

---

# リシュエル1 魔導騎士リシュエル

五十嵐 綾乃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リシュエル1 魔導騎士リシュエル

### 【Nコード】

N6674M

### 【作者名】

五十嵐 綾乃

### 【あらすじ】

宮廷魔導士であるテュルナーナスは、10代の学生だった時にある一人の青年に出会った事で、自分の志が大きく変わった。青年の名はリシュエル

この名は、もつとも恐るべしと誰もが知る、謎の戦士魔導騎士の名であった。彼はリードと名乗りエル・ソニユル王国に荷担していた。この話は、物語というよりも、テュルナーナスが知る限りの知人に頼み、魔導騎士リシュエルとう人物について個々に書き綴ってもらい、それを纏めたものである。

# 1話 テュルナーズ 〵 1 (前書き)

初めてのファンタジー作品です。長くなるかもしれません。

## 1話 テュルナーナス 1

私の名はテュルナーナス、王宮魔導士である。

この記録は私の人生を大きく変えた、ある1人の魔導騎士について記したものだ。

その人については多くの事が謎である。

私の知人友人に彼について記して貰ったが、

その記録が彼の全てではない。

謎の多いところは許して頂きたい。私にもわからない事が多いのだ。

### 1 テュルナーナス

私が彼と出遭った時。既に彼は有名な魔導騎士だった。

何処からともなく各国に現れ、戦場で危機を救い、多くの人々の目に留まる事無く姿を消してしまう。幻の男として噂を聞いてはいた。

その噂の男は無償で国を助けていた訳ではない。その働きに対する報酬は相手を見て金額を変えてくるとの話ではあったが、実際にはどうなっていたのかは私は知らない。

ここ数年は、私が住むエル・ソニユル王国の戦しか参戦しなかった。

私が彼の姿を初めて見たのはまだ学生で魔術師見習いの時だった。当時、私は王宮が経営する学校に通っていて、魔術科の中等生だった。実習の為に魔術士の一団に付いて戦地へ初めて出た時、この魔導騎士に出会った。戦場と言っても、国境の領地の小競り合いでそう難しくない戦場だった。

彼の美しさ、それとは相反する凄まじい強さが印象に残っている。

「大丈夫ですか？」

赤土の上に倒れていた私に誰かが声をかけた。その声は低すぎず、やわらかな口調だった。私はゆっくりと目を開いた。私の前に優しいげな黒い瞳の、整った顔立ちの女性の顔が目の前にあった。黒く長い髪。私はその容姿の持ち主が女性と勘違いしながら、一瞬、彼の美しさに見惚れた。

「しっかりしてください。ここは戦場ですよ」

言われてはつとして周囲を見回した。どうやら私は魔術の実習に夢中になり、魔術の発動するすぐ近くまで出過ぎて魔術の発動の勢いで敵方より後方に吹き飛ばされたらしかった。

「ここは、まだ少し危険かもしれません。こちらへいらしゃい」

黒い皮の手袋をはめた手を差し出された。

「あの…ぼくは」

「気絶していましたが怪我はありません」

彼の言葉でやっととはっきりと思い出した。そうだ、ここは実習にきた戦場で、美しい女性がこんな場所にのんびりと居る筈がない。

「あつ、ありがとうございます。お名前は？」

「一戦士です。こういう場所では細かい事を気にしなくていい」

彼が戦士であることは、鎖帷子を着て腰に少しのカーブがある剣を携えているという服装からもわかった。整った顔、細くしなやかな肢体、艶やかな髪、私がこの戦士はさほど強くないのだろうと思ったのは、彼が自分とそう変わらない年齢だろうと思われる程、若く見えたらからだだった。

「でも、訓練ですから報告しないと」

「わたしはリシュエル。ですが、この名はやたらに言わない方がいい」

「え？」

驚いて自分の耳を疑った。そこにいるのは決して屈強とも見えず、恐ろしい雰囲気も無い。長い黒髪、優しい瞳が印象的な若く細い男

性だ。

世間の噂では、魔導騎士リシュエルという人物は見るからに禍々しく恐ろしい風体なのだから、人間の姿を留めていないらしい等、あまり良い印象は無かった。それなのに若くて穏やかなこの若い男性がリシュエルだと名乗るのだ。嘘をつく筈はなかった。彼の名を勝手に名乗っていい事が有った人は誰も居なかったと聞かされていた。

「さあ、いそいで」

「はい」

彼の手には握まり、味方の陣へ急いだ。

少し安全そうな所まで着くと、彼は「では、気をつけて」と一言残し戦場へ戻っていった。

戦いの焰と叫びの中、不思議な人影を目の中に焼き付けていた。彼の周囲には誰も近寄らず。リシュエルが剣を一振りする度に辺りは黒い煙幕を巻き上げ、瞬間戦場の状況が見えにくく成り、次に目に映るのは、大量に倒れた人馬だけ。という具合だった。

学校に戻って、実習の報告書を提出すると、教員から生徒指導室へ呼び出された。指導室には担任や魔術の専門の教師、校長までいて、魔導騎士リシュエルについて色々と聞き出された。1時間少しは指導室にいたと思う。

校内ではどうやって知られたのか、私が呼び出された理由が魔導騎士リシュエルに関わったらしい。という噂がどこからか広がり話題になっていた。

各先生方の矢のように繰り出される質問に、子供ながら懸命に答え終え、退室を許された。

指導室扉を開け廊下に出ると、友達のルウナとラスターが待ち構えていた。

「テウ」

「どうだった？」

テウというのは当時の私の愛称だった。

「うん、指導じゃなくてただの話し合いだったから」

「でも、噂の人の事だったんでしょ？」

ルウナは女の子らしくよくしゃべる。好奇心の旺盛な彼女は赤い髪と同じように血色の良いふつくらとした唇で声も高い。

「まあ、そうだけど、話を聞かれただけだし、怒られたりもしなかったよ」

「で？噂の人は？どんな人だったの？」

女の子というのは遠慮がない。気になる事はすぐに聞いてくる。

「おい、ここじゃあ人に聞かれるから良くないだろ？いつもの所に行こう」

私よりも背が高くがっちりとして体躯の良い、騎士を目指しているラスターは噂よりも私の身を案じてくれている様子で、茶色の瞳は少し心配そうな目をしていた。

いつもの所というのは、子供らしく木の枝の上だった。

「テウ！はやくーう、ねえ、聞かせてよ」

女の子だけれど、ちよつとおてんばで、活発なルウナは木の枝に跨り、活発な彼女らしく落ち着き無い様子で、期待感たっぷりと言わんばかりに、足をぶんぶん振り子のように振りながら、話を即す。

「それがね…、よくわからないんだ」

「会ったんだろ？」

ラスターは将来騎士に成るために体を鍛えているだけあって、木の枝に一番先に昇ったが、落ち着きのある態度でゆつくりと一つずつ質問してくれた。

「うーん。そうなんだけど、なんていうのかな。噂とは違いすぎて…」

魔術科の生徒である私は、日頃からあまり鍛えてはいないので、ゆつくりと木を昇りながら答えた。

「どんな？ 恐いんだよね。噂だと化け物みたいだって聞いたわよ」  
「ルウナ少し黙ってるよ。テウが話しにくいだろ？」

「それがね、僕たちが知ってる噂とは違うんだ。優しそうで綺麗な顔だったな」

「綺麗なの？ かつこいい？」

「うん。笑顔が綺麗だったな」

「で？ どのくらい強かった？」

強さにこだわるところが騎士になりたいラスターらしい質問だと内心思った。

「そうだね。でも魔術を使っていたみたいだったから、どんな風に戦ってたかはよく見えなかったよ。黒っぽい煙と砂埃が見えて、そのあとは500人位かそれよりもっと多くの人が倒れてた」

「500人？ 凄いな、魔導騎士って言われるだけはあるって事か。」

テウは魔術科だろう？ どんな魔術だったのかわからなかったのか？」

「中等部の僕に魔導の術がわかるわけないよ」

色々聞かれて、見たことは全て話したが二人は今ひとつ理解できない様だった。

私自身も彼の最初の鮮明な姿に夢で見たかのように、なにか勘違いでもしている気がして、それ以降その事については話すことも無かった。

その後彼に会ったのは1年たってからだった。

15歳になって、中級過程を終えた私は高等過程に入れる事が嬉しくて、1人で街を歩き回っていた。学生は多くの金銭を持っていないものだが、中級過程を一位の成績で卒業したお祝いを自宅から幾らかもらっていたので、新しい魔具を探していた。杖でも良かったし小さな爆薬の類でも何でも良かった。

魔術というのはとんでもない不思議な力と思われがちだが、高等部以下はそれほどでもない。魔術師となると何らかの才能を持っていなければならなかったが、普通の魔法使いは科学的で、後はスタ



イルの問題だった。如何に相手をびつくりさせて味方に先制攻撃をかけさせるか、とかそんな物だ。魔法を使い、みせかけ小細工や言葉による心理攻撃が殆どではあったが、魔導士というのは少し違っていた。魔術師が50人以内の人を魔術で攻撃できるのに対し、杖の一振りですぐ100人程度に影響を及ぼすのが魔導士。魔導騎士とか魔導戦士などと呼ばれる人たちは、一回の攻撃で200から300人程度を倒せるという噂を聞いてはいたが、個人差があるらしかった。

そして、驚くことに魔導騎士リシユエルは一度で千人を超す兵を倒す程の攻撃力と言われていた。

当時戦乱が収まりつつあったが、未だ戦争はあるの世だったので、癒しの魔術より防護魔術や攻撃力の高い魔術が非常に珍重された。

街に出た私は、煉瓦造りや木の建物が並ぶ町並みを歩き、ある店の外で以前から欲しいと思っていた白いローブを見つめていた。子供には手の届かない値段のものだった。

「それは、あなたには少し大きいですよ」

聞いた事のある声、振り返ると、つばの広い帽子を被り白と青の爽やかな組み合わせの色のマントを羽織った、黒い髪の青年が立っていた。

「あなたは！リシユ」

「名前は言わないで下さい」

「あつ、すみません」

「いいえ。あなたは確かテュルナスでしたよね。以前お会いした。覚えて下さっていたんですね」

「あの時は助けて頂いてありがとうございました」

流れるような話し方。口角が上っていて薄い唇、夢を見る様な澄んだ瞳。どこをとっても世間の噂とは別人だった。あの戦場での強さも、この繊細な雰囲気のある青年とは結びつかない。

「これ、欲しいの？」

私が眺めていた白いローブを見て言った。

「あなた、なかなか物を見る目がありますね。これはただ高いという物ではありません。少しだけ古い魔法がかかっています。もちろん、素材もいいですが」

そう言われるとますます欲しくなったが、学生が頑張っても買える値段ではない。諦めて肩を落とした私の様子を見ていた彼が口を開いた。

「まだ当分売れないでしょう。それまでに手に入れる事も出来ず。高等部に入る前にちよつと稼ぐといい」

「はい」

どうして、有名な魔導騎士のリシュエルが自分のような、たった一度会っただけの子供を覚えていてくれたのか、なぜ自分が中級クラスを卒業して高等部へ入る事を知っているのか、見当もつかなかった。

「ところで、路に迷ったようなのですが、王宮学校高等部の魔術科はどちらでしたか？」

「あつ、それだったら、よく知ってますからご案内できます」

「助かった」

嬉しそうにニコリと笑ったその笑顔は少年のように見えた。思わず親近感まで抱いてしまったのは子供の怖い物知らずな所でもある。

「お願いしていい？」

「はい。えっと…名前はなんて呼びたらいいですか」

「私のことはリードと呼んで下さい」

「はい。リード」

「良い返事です。案内お願いしますね」

私は、内心嬉しくてたまらなかった。この有名な人は私にだけ自分の本当の姿を明かしてくれた。秘密は守ろうと胸の奥で決めた。

「ここ、曲がるよ。溝板が壊れてて危ないから踏まないように気をつけて」

「はい」

彼の若々しく優しい態度のせいか、いつの間にか自分の友達に話しかけるように話をしていた。近道をと頼まれたので裏通りを通った。

「着いたよ」

「ありがとう。一番偉い人いる？」

「えっと」

学生が考える偉い人とは校長だ。

「校長先生なら、多分校長室にいると思うけど、一緒に行く？」

「ええ。お願いします」

「いいよ」

王宮が経営する学校というのは、大きくは魔術科と武道剣術科、その他の能力科に別れる。

先代の王が開設した学校で、王都内の王宮近くにある学校だ。開設された目的は、王国の武力や政治力の向上だったらしく学費も高くはなかったが、現王は以前からいる武将や政治家などに満足しているらしく、教育に全く興味が無い。

学校側は卒業生に職業の斡旋もしていないし、王宮経営の学校を出たからといって特にそれが何の資格であると言う程の事でもなく、専門知識や技術、特殊能力を磨く場であって、実際に世の中に出て働いてみて実力があるかどうかの方が大切なので、世間一般では学校に入るよりも仕事を先に見つけて、それから専門に学びたいと言う10代半ばよりも上の人が入学することが多かったし、人数もあまり多くはなかった。

現王があまりにも教育に興味がなく、学校が縮小も拡大もしないのは私にとっては運が良かったかもしれない。

学校の敷地はさほど広くもなかったが、初等部中等部までは同じ校舎で学び、中等部からは教科の選択があり、高等部は各専門に別れて校舎が違ったり、他の敷地にある科もあった。

魔術の科は比較的人数が多く、王宮に近い広い敷地にあった。緑の多い校庭を通り抜け、石造りの建物の奥の教員室へ行き、来

客を教師に告げ、教師は彼を校長室へ案内した。リードの要望でも校長室前まで行った。

校長室の扉に着くと、彼が私に部屋の外で待っていて欲しいと頼んできたので校長室の前で待っていた。長い時間は待たなかった。

「お待たせしました」

「リード」

「では行きましょうか」

「どこへ？」

「戦です」

「え？」

「一緒に」

「ぼくが？」

「ええ、この前は助けたから、今度は君が、わたしを助けるんです」  
「は？」

「学校の外出許可は取りましたから心配しないで。すぐに終わります。手を貸して下さい。行きましょう」

白い手袋をはめた左手を差し出された。不思議と手を伸ばしていた。彼が私の体を腕の中に抱え、反対の手でマントを翻した。次の瞬間、青と白い光に包まれ気付くと戦場にいた。

場所はどこかわからない。自分が立っている場所は天幕を張った陣地の近くの魔術を行う円陣を書いた土の上で、少し離れた場所で戦いが繰り広げられていた。

「リード！ぼくは…」

「黙って、その杖を持って立っていてください」

「え？」

そう言われて自分が杖を持っていることに初めて気付いた。長く二本の木の枝が幾重にも螺旋を描き絡まる重たい杖。杖の手元には赤い大きな宝石がはめ込まれていた。

「そこで、じつとしていて」

私を見つめる彼の目は先程の穏やかで優しいものではなかった。

真剣な瞳の中には邪悪とも思える光があり、戦いを楽しむような、それでいて戦いを嫌っているような複雑で厳しい目、唇の端を歪むように持ち上げると、私に背を向けた。その姿はいつの間にか黒い甲冑を纏い。黒く長い髪には不吉な感じの赤い汚れがついていた。

「まって！待ってください」

彼は振り返る事は無かった。

## テュルナーズ Ⅱ（前書き）

1話目の続きになります。1話が長いので2回ぐらいに分けて投稿させて顶きました。

## テュルナーズ Ⅱ

彼は振り返る事は無かった。彼の後ろ姿はどんどん遠ざかる。私は不安に駆られながら、強風に翻る漆黒の髪とマント姿の、彼の後ろ姿を見つめた。

「うおおおおお！」

その叫び声はリシュエルのもだった。地獄のそこから響くように、低く大きく、大地を震撼させる声、とても彼のものとは思えなかった。彼は一瞬にして空宙へと舞い上がり大地を踏みしめる。

中級クラスを出たばかりの私は、それまで戦場の実習経験は4回、安全な所から見学するか3人から5人で行う魔術を手伝う程度だった。

リシュエルに、杖を持ってそこにいるようにと言われた私は、震えながら彼を見つめるしか出来なかった。

真紅の焰を身に纏い、敵を焼き尽くす彼の剣が一振り動いたたびに、私の手の中の重たい杖が振動する。戦場での経験が浅く何も知らない私からは、次々と繰り出される、彼の強力な魔導の攻撃が多くの敵兵を倒して行く様が、まるで彼が世界を変えていくようにさえ見えた。

目に入る全てをただそのまま受け止めるしかなかった。それが魔術師になるための実践的な勉強をする。という事だと学校では教えられていた。重い杖を両手で支えながら耐えた。

気が付くと戦いは終わっていた。

「はあはあ！」

彼が魔術を帯びた剣を一降りすることに、私の体力が失われるのは感じてはいたが彼が戻ってきた時には、私はかなり消耗していたらしかった。息を切らして、支え切れなくなった重い杖を地面に

置いた。

「大丈夫ですか？」

「うっ！」

「おっと」

私はリシュエルの腕の中へと倒れこんでいた。

誰かの話し声が聞こえる。

「我が校の生徒、それもまだ中級部を卒業したばかりの子供を、そんなところへ連れて行くとは、前例がない！」

「前例などと、古いです。彼は特別な力を持っている。少々無理をさせたのは申し訳なかったですが、わたしも今回はいささか厳しかったので」

目を開くと、派手でない重厚な雰囲気壁が見えた。校長室だった。

目の前を白い煙が通り過ぎる。

…リシュエル？

顔を動かして声の方を見た。彼は黒い甲冑のままだったが、汚れを洗い流したのか、水分の滴る髪は艶やかに黒く、肩を流れ椅子の背もたれの後ろにあった。

驚いたのは、彼が細い葉巻を吸っていて、それを校長が大人しく認めていた事だった。

校内では禁煙だ。

「とにかく、テュルーナス・マルデが卒業するまで近づかないで頂きたい」

「それは…困りました。せめて、彼にお礼をしてから」

「まあその位はよいですが。どういうお礼ですか？」

「少しばかりのお小遣いです」



「他人からの金銭の受理は認めていません」

「では、彼が欲しいもので」

「本人の希望を聞いて、こちらで判断させて頂く」

「それで結構です」

彼が怪我もしていないらしく、普通に校長と話している姿にほっとして思わず声をかけた。

「リード！」

「失礼、大丈夫ですか？」

「うん」

「よかった」

彼の表情はとても柔らかで、安心し、なぜか思わず泣いてしまっていた。リシュエルが私の寝ている長椅子へと歩いてくる。

「リードは？何処も怪我しなかった？」

「ええ」

「よかった」

「お礼を言います。ありがとうございます。君のおかげでどんなに助かったか」  
片方の膝を床に付き、視線を私に合わせる。優しい笑顔、鳥が歌かのような流れのある話し方。

「大変だったね。今日はゆっくり休むと良いよ」

彼の優しさにやっと、ホッとした途端、私と彼の会話を不機嫌そうな声が遮った。

「体はなんとも無いですから、心配しないように。気分が落ち着いたら退室しなさい」

「はい」

校長に言われ、ゆっくり起き上がり部屋を後にした。

校長室の外には指導の先生が待っていた。今回の事は口外しない様に言われた。

その後リシュエルは半年程、私の前に姿を現さず、彼にまた会うことは無いのだろうと思っていた。

ある学校が休み日、寮の庭の木陰でのんびり読書をしていた時

だった。

一羽の白い小鳥が本の端に留まった。嘴には紙を咥えていた。私は急いで小鳥が本の上に落とした紙を広げた。

お元気ですか？君にあの時のお礼をどうしてもしたくて、お手紙をさせていただきました。よかったら以前ローブと一緒に見た魔法具屋まで来てください。

リードより

手紙を読み終えた私は駆け出していた。彼に会いたい。自分が戦場で何をしたのか、彼は噂と全然違うけれど本当はどんな人なのか、聞きたいことはたくさんあった。

道具屋の前に行くときリードが静かに立っていた。長く黒い髪を後ろに束ね。薄手の濃い茶色のコートを着ている。

「リード！」

「元気そうですね」

「はい！お久しぶりです」

「このローブ、欲しいかなと思って、もうじき売れてしまいかもしれない」

彼は私が先日見ていた白いローブに目をやった。

「え？そうなの？」

「そう、君も少し背が伸びたでしょう。サイズも良さそうだし買いましょう」

「でも…そんな高価なものは」

「大丈夫、君が働いた取り分です。少しここで待っていて」

そう言つと彼は店の扉を押した。出てきた時は布の袋を持っていた。

「もらえないですよ」

「いいえ貰ってくれないと困ります。わたしの評判が落ちますから」  
「でも」

「ちよつとお時間ありますか？」

「あるけど」

「では、なにか飲み物でもご馳走しましょう」

彼は私の答えを待たずに歩き出す。しばらく歩き、こぢんまりとした木造の小さな喫茶店に入り、彼が緑色のハーブのお茶を頼んだ。

「ねえ、リード」

「はい」

「あの時つて何処だったの？どうやって行つたのかな」

私はずつと気になっていた自分が彼に連れて行かれた戦場の事を聞いた。

「くすくす」

彼は馬鹿にした風でなく、隠し事をしている女の子のように密やかに笑う。

「教えて。自分が何をしたのかくらい知っていたい」

「まだ、早いです。独立してから考えた方が良い。この国の敵方についたわけでは無いので気にしなくて良いですよ」

「そんな…でも…」

「この店のお茶は美味しいですね」

高価そうな陶器のカップを口に運び、一口だけ味わう。テーブルに置いて如何にもゆったりした時間を楽しむ風に息をついた。

「この店にして良かった」

穏やかな微笑み。この人が戦場で豹変してしまう事を思い出す。本当の事だったのか、それとも彼の術にかけられていたのかもわからない。

「どうして、ぼくだったんですか？」

「それは…」

困ったように少し目を伏せ、しかられた子供の様な顔して黙ってお茶を啜る彼はどうしても人々に恐れられる戦士には見えなかった。

彼の様子をみているうちに子供が大人に同情するというおかしい状態になっていた。

「えっと、言いたくないならいいです」

「ありがとう。思った通りの優しい子でよかった」

温かいお茶と甘いお菓子。彼との安らかな時間は短い様でも長い様でもあった。

「ところで、お友達は？どうしていますか？」

「友達？」

「中級の時に仲の良かった」

「ルウナとラスター？」

「そう」

「元気みたい。高等部に入ってからたまにしか会えなくなっただけ。ルウナは神殿で修行してるし、ラスターはもう戦場に行ってる。ぼくはまだ学校で勉強だからなんか取り残された感じ」

「それはしかたありません。男の子の魔導士というのは修行に時間がかかります。巫女見習いや戦士を志す人と一緒にはならない。でもいつか、共に行動できるかもしれません。君は才能がありますから。優秀な魔導士になれるでしょうね」

「ほんとに？」

「ええ」

「そっか、頑張ろう」

「楽しみにしています」

数時間、他愛もない話をした。彼を目の前にすると、彼が本当はどんな人なのかなどはどうでもよくなっていた。

「そろそろ帰った方が良さそうですね」

「もうそんな時間？」

「さ、立って」

素直に立ち上がると、リシュエルがすぐに側に来て肩にローブをかけてくれた。

「わあ、肌触りが良い生地ですね」

「少し丈が長いですね。でも夕方は寒くなるので着て帰ると良いでしょう」

「ありがとう」

「当然の報酬です。送ることは出来ませんが、帰りは気をつけて」  
支払いを済ませると、あつという間に立ち去ってしまった。

それから、私は数年間、彼には会わなかったが、彼の「才能がある」と言う言葉を思い出し、それを励みに懸命に勉強をし、国立魔術研究所に所属した。

## 2話 ラスター Ⅰ

俺、ラスター・バエルは中級過程を終えて、卒業前から国の兵士として入隊し戦場へ赴くようになって、数ヶ月が経っていた。騎士見習いだっただのでそう多くの戦績は望まれていなかったが、いつか、必ず本物の騎士として国の為に戦い、何よりも家族を金持ちにしたと思った。

入隊して最初は伝令とか雑用などの簡単な役割だったが、今は歩兵軍の郡部長として戦いに参加し、將軍への報告などもする様にもなっていた。

ある戦で、とんでもなく強い人物と出会った。

將軍への報告の為陣営を構える天幕の中へ入った折に、小柄で細い男が陣営の中に有った。その小柄な白い服の男は上座に優雅に腰掛け、飲み物などを煽りながら無表情に周囲の話を聞いている様子だった。武將に囲まれ敬語の報告を受け、時折頷くのみでほとんど黙っていた。なぜ小柄な男がそんなに偉そうなのかと不審に思ったが、何処かの領主の息子か何かだろうと、内心馬鹿にしていた。俺がそんな勝手な判断をしたのは、その男が年若く見え、面差しが豊頬であつたからだった。

しかし、ひとつの隊を任され、武將への報告をするようになったとは言つても一介の兵士が身分が上の者に対し馬鹿にした態度をとつて良いわけが無かつたので、その男の事は余り気にかけない様にした。

まさか、その男がその戦の勝敗を決める事になるとは思つてもいなかった。

その時の戦の戦況は苦しかった。

戦場に着いて既に一週間に近かつたが、どちらも引かず進む事も叶わず、敵陣は静かに援軍を待ち、軍勢を増やす為に時間稼ぎをしていた。

その時、俺が出兵した戦場は国境近くの辺境の砦で、少しでも領土を賣めたい隣国に賣められていた。

陣営天幕の有る場所は自国の砦近くの荒涼たる大地ではあったが、食料も水も問題はなかった。敵国の方がその点では不利だったが、敵援軍と物資が届けられたら勝てそうも無いと思った。

俺が陣営の中に細い男の姿を見た日から3日後いよいよ、敵が動き出した。

朝の早い時間に、敵陣から火矢が放たれた。

戦場は敵勢が少しばかり優勢だった。俺は不利を承知だったが、此所で手柄の一つでも立てれば昇進もあり得るだろうと必死に戦っていた。その場にいた誰もがそんな風に思っていたかもしれない。手柄を立てる気がなくても、少しばかり自軍の劣勢に気付いている者は多かっただろう。これ以上少しでも戦況が悪くなれば、下手をする戦意が下がるばかりか、戦を放棄する戦士が出るのではないかと心配をする程、危うい均衡を保っていた。それでも、もし今、敵将の一人でも倒す事が出来れば幾らかでも士気が高まるだろう。そして、その手柄を俺を立てたいと思い、敵将の一人へ向かって、次々と群がり襲い来る敵兵をなぎ倒し進んでいた。まさにその時、我が国の砦の方向からいきなり強い風が吹いた。両国から放たれた火矢で広がった炎と煙が敵勢方向へと向かう。振り返ると黒い甲冑に身を包み、兜もかぶらない男が立っていた。

間違いなく、先日陣営の中で見かけた小柄で優雅な風体の男だったが、あの時とは明らかに様子が違っていた。

男が現れると、上官から、敵からより遠くへ離れ、砦の方へ戻るようにと合図が送られてきた。命令は絶対だ。俺も本陣方向へと用心深く引いた。

砦の方へ戻った俺から見えるのは、たった一人の小柄な男の後ろ姿。その向こうには多勢の敵。敵は今だとばかりに攻め寄った。男と敵勢の距離が縮まる。

次の瞬間。地の底から響くような大きな叫び声と共に男は飛鳥の様に身軽く宙に飛び上がった。そして、信じ難い飛距離で敵軍の目前に飛び降りた。

男の剣が振り下ろされる。たったの一閃だった。1000以上の敵兵が焰と、何やら分らない苦しみに倒れていく。

彼が持つ赤い光を放つ剣が降られる度に空気が震撼し、焰が大勢の敵を包み、その剣の切っ先に触れたかどうか分からない者までが傷を負い倒れ行く。

彼は圧倒的に強く、味方の誰もが彼の前に出ようとは思わなかった。その男の周りにいて、何時自分が死んでもおかしくないと、皆思った。

我々は、ただ、彼が打ち逃した少数の兵を大勢で迎え撃つだけだった。

戦はあっという間に終わった。

全てが彼の力だったと言って良いだろう。

男は戦いが終わると本陣に歩いていく。

この男は一体何者なのだろう。

ふと、男は足を止めた。將軍と主なる戦士が彼を囲む。そして急に將軍の直属の部下が俺に声をかけてきた。

「その兵士、来い」

將軍からのお声がかりだ。

俺は、とにかく言われた通りにした。

人を掻き分け辿り着いた先には小柄な男がいた。

酷薄な目付き、残酷そうな笑み。背筋が寒くなった。俺は彼の目付きに、戦に出る時よりも戦慄した。

男が一瞬、下を向き、顔を上げたときには人形のように感情を感じさせなかった。

男が口を開いた。その声は顔と同じように感情を感じさせなかった。



「ラスター…ですか」

なんの手柄もたてていない兵士の名前を知っているのは不自然だった。

「これから…あなたはもつと強くなります。出来れば、そのうちに私と一緒に戦ってください」

彼はそう言い終えると、また歩き出した。俺に声を掛けた後は何か気になる事があるのか、急ぎ足で歩き出した。そして陣営の幕の中へと入っていった。

その男の噂はあつという間に広がった。酒宴に男の姿は無かった。皆の話では、どうやら雇われた魔導騎士なのだとか、大きな戦とは言えないのに国が魔導騎士を雇った事も不思議だったが、その強さから見るに、報酬もかなりの高額であつただろうに辺境にふさわしくなかった。

戦場から戻ると王宮に呼び出された。俺は身分がまだまだ低く本来なら王宮に足を踏み入る事の叶う身分ではなく、王宮に立ち入った事など無かったが、宿舎に戻り数日休み稽古を再開した時に上官に呼び出されたのだった。

王宮へ初めて出かけた日は非常に緊張した。王宮の正面には大きな広場、幅の広い吊り橋、正面の入り口からぐるりと回って、小さい西門から入るように言われていたので、少し細い吊り橋を渡った。身分が低い俺は着る物にも困ったが、こういう場合は支給されている兵士の制服が正しいだろうと思いい、あまり綺麗な状態では無かったが紺色の制服を着て来た。

案内されたのは王宮の外庭の片隅にある小さな建物だった。その建物は雑木林の中の石膏石で出来たさほど大きくない建物だ。

部屋に入ると本棚が沢山あり、どうやら書庫のような所らしかった。二部屋続きの本棚に沢山の本が並んだ部屋の更に奥の、サン・テラスルームから誰かが声をかけてきた。

「お待ちしていました。奥へどうぞ」

「失礼します」

言われるまま、奥のサンルームへと進んだ。黒いローブを着た男が、籐の長椅子に、本を片手にゆったりと腰掛けていた。彼の後ろからあたる陽射しが眩しく、それが高貴な人の後光かのように見え俺は緊張を高めた。

「お久しぶりです」

王宮に知り合いなど居る筈のない俺の予想に反する言葉を発した主が、俺の側へと歩み寄った。その顔には、確かに見覚えがある。

「あなたは」

「覚えていましたか？」

「お覚えに預り恐縮です」

ここが王宮だったこと、男が魔導騎士だったことを思い出し、膝を折り頭を下げた。相手は王宮が直接雇ったという噂の魔導騎士だ。一介の兵士とは身分も実力も違う。

「そう硬くならずに、ただの雇われ者です。わたしは身分が低いのでこんな場所ですみません」

「いえ、先日拝見しました折には、…貴方様の戦い振りには…」

「黙って」

「はっ…」

更に頭を垂れた。魔導騎士は俺の方へ近づいてきた。

彼は黒い皮の手袋を嵌めた両手を差し出し、俺の手を持った。俺は彼に両手を持ち上げられた。

「立って、顔と体をよく見たい」

「はい」

失礼の無いように立ち上がった。

彼は黒曜石のように黒い感情のない瞳で俺を観察した。俺は、この男は戦いの最中以外は感情が無いのかもしれないと思った。

「良い目付きです。体力もある」

「ありがとうございます」

「わたしが言った事、覚えていますね」

「一緒に戦わせて頂けると」

「そう、あなたが嫌でなければ」

「光栄であります」

「よろしい。では、一緒に修行をしてから」

「お願い致します」

「私はリード。よろしく」

「ラスター・バエルです。どうか宜しくお願い致します」

## ラスター Ⅱ（前書き）

2話の続きになります。

## ラストー 2

リードという魔導騎士の申し出を断っても良いことはないのが分かった。むしろ、この男についていけば出世できるであろう事も。

魔導騎士は魔術師としても騎士としても最高峰だ。

魔導騎士というのは、なかなか弟子を取らないとも聞いた。自分を高める為の最高の機会と思った。その日からリードを師と仰いだ。

その数日後リードと共に山へ修行に行く事になった。

山では剣の稽古をし通しだった。

より少ない動きで多くの敵にダメージを与える方法、将となる為のすべてを指導された。

「踏み込みが弱い」

「違う！なぜそんな動きをする。無駄な動きがあるから剣先が遊ぶ」  
細く軽そうな剣を振るうリードは動きが軽く、息を切らす事も無かった。

最初は彼の動きに付いて行くのがやっとだった。

訓練は厳しかったがリードは根気よく教えてくれる。俺はただひたすら彼の教えを聞き、イメージ通りの動きを実現する事に没頭した。理論は無い実践だった。

食料を里から運ぶ、薪集め、重い鍋、火の扱いも全て俺の仕事だった。食費も持たず、御礼の為の貯蓄もない貧乏な剣士にとっては当たり前だった。

「お食事ができました」

鍋に野菜を煮詰めた俺が、師であるリードに報告すると、毎度の事だが彼がこう言う。

「お疲れ様。味付けはわたしがしますから」

「お願いします」

師は味付けを終えると何時もの様に、俺に声をかけた。

「座つて。お疲れ様。食べなさい」

「はい」

「どうですか？味は」

「うまいです」

いつも通りの味付けに、何も考えずそう答えた俺だったが、師はいつもと変わらず表情の無い顔つきで、当たり前のような口ぶりでこう言った。

「そうですか。この食事には実は微量ですが、毒が入っています」

あまりにもさらりと言つてのけたその言葉に、驚きと信じられない思いで聞き返した。

「え？」

「怖がらなくて良い。以前から入っていました。もう体が慣れていく」

「はあ……」

そう言いながら師リードは平気な顔をしてその食事を食べている。「この配合を教えますから、ずっと飲んでいると良い。微量を接種していれば毒に体勢がつかます。戦争では魔術師や魔導士が裏で協力する事があります。將軍や強い武将になると毒物を混入される事が多々ある。ひどい時は城内や街まで全て水が飲めなくなる。ラストー、あなたは生き残らなくてはいけない。食べましょう」

「はい」

毒と聞いて一瞬ゾツとしたが、体は今まで何とも無かったし、師の言うことは正しい。毒殺などしょっちゅうある事だ。そして俺が生き残らなくてはならないと言う彼の言葉は、俺が武将として強くなるというお墨付きの言葉もあった。

師は時々出かけた。魔導騎士となれば仕事は多くあっただろう。師の居ない留守中は自分で鍛錬した。

ある日、師が馬を2頭連れて戻った。

「そろそろ、馬に乗れるようになりましょう。明日から里への食料の買出しは馬を使います」

その日から乗馬の訓練が加わった。槍も、短剣も体術も何でも教えられた。

ある夜、蠟燭に火を点した師が言った。

「ラスターこの蠟燭の火を消してください」

吹くと消えた。

「良いでしょう、もう一度点けます。他の方法で消してください」

扇いだり、唾をかけたり、指でつまんだり、思いつく事は全部した。師は何度も火を点し、俺はあらゆる方法を考えた。水か風を使えば消える。

「他には？」

とうとう何も思いつかなくなった。

「どうしました？」

腹立たしくなった。こんな事の何が勉強になるのか理解できない。

師の手から蠟燭を取り上げ地面に投げつけた。

「意味が分りません」

「そうですか。では」

突如、師の足元の地面が丸く赤くなる、師の立っている周囲に焰が上がった。師の木綿の衣類に火が移る。

咄嗟に、足元の砂を大量につかめるだけ掴みどんどんかけて、一力所だけ人が通れる程度の広さに火を消し、師を助けるために焰の輪の中へ走って入った。

「大丈夫ですか」

「来られましたね」

とたんに火が静まる。そうだった剣の稽古ばかりしていて忘れていた。師は魔導師でもあった。

「優秀です。あなたは意志の強い戦士だ」

師には一年以上、たっぷり指導して貰った。

ある日、師と共に戦場に赴く事を俺に告げた。

師と共に戦に行くと言幕の中へと案内され、師の側で戦況の報告を聞いた。

「私は、今日は何もしません」

武将達が訝しげな顔をする中、師はいつもの無表情のまま続けた。

「今日は私の弟子が全てやってくれます」

いつせいにその場の全員の目がこちらへ向く。

「ラスター、頼みましたよ」

「はい」

「わたしは、ここで待っています」

はいとは答えたものの、なんの打ち合わせも無く、師からの指示も何もなかったが、師に言われたのだから黙って戦場に立つしかなかった。

師は人前に姿を表す事無く、影から魔術を使って俺の戦いの後押しをしてくれ、戦跡を上げて行った。一年経つか経たぬうちに、国の中で有名な戦士になった。

王宮仕官に上がる日、師から呼ばれた。

「今日からは、王の下、エル・ソニユル王国の為においに活躍してください」

「はい」

「修行を頑張ってくれたので、これをあげます」

「なんですか？」

「手首用の鉄製のバングルですが、簡単な仕掛けが…」

そう言いながら、師は自らの手で両腕にバングルをはめてくれた。「ここから」

師がバングルの手首の内側を押すと、バングルの手の甲の側から太い針のような剣が飛び出してきた。

「これは…」

「針剣が思った通りになるように練習してください」



「しかし」

「人はいざとなれば卑怯などありません。生き残らねば何もできない事を覚えておいてください」

「はい」

「では、頑張ってください」

「はい！有難う御座いました」

この時初めてリードの笑顔を見た。何時も無表情だった師の顔に感情らしいものを見たのは二度目だったが、一度目とは全く逆の表情に驚いた。今まで全く知らなかった。我が師リードは美しい笑顔をする青年だった。

師を見送りながら涙を溜めた。

「それから、私の本当の名前はリシュエルです」

師は振り返らずにさりと云った。

啞然とした。有名なあの魔導騎士リシュエル。友達が会った事があると言っていた。言われてみれば友達が言っていたのと同じ長い漆黒の髪、すらりとした体だった。

友人の話では優しそうな若い男の人だったが、最初の印象が恐ろしく、友人の言葉とは違い過ぎていたから気が付かずに来たのだった。

「また会いましょう」

師は去っていった。

その後、俺は戦略も勉強し王宮騎士になり、戦でラスターあれば、負けないとまで言われる程になった。

### 3話 ガレット Ⅰ

森の中の湖から少し離れた所に小さな城がある。城壁も無く、誰でも簡単に入って来ることが出来そうな城。しかし、この城に誰でも来られるという事ではなかった。森を含めて広い敷地がある男の私有地で、魔術による結界が施されていた。

此処に人は少ない。馬を世話する年寄りの男と城の雑用をする17歳の男だけだ。

17歳の青年は金色の髪をしていて、田舎に暮らしているせいか質素な服装をしているが彼の淡い緑色の瞳は、その性格の素直さを表すようにどんな宝石より美しく輝いていた。

2年半ぐらいだったかな？彼とまともに話していなかったのは。「彼」というのはこの城の城主で私を育ててくれた人だ。

私は最後に彼と何を話したか思い出し、少し苦い気分になった。彼は何も言わずに立ち上がって背中を向けて、それから話してくれなくなったのだったな。

数時間前、彼の部屋の暖炉に火が灯った。彼がこの城に来るときはいつも暖炉に火が灯る。

あの人が来る。

私は風呂を沸かし、着替えを用意した。

思っていた通り彼が城の扉を開けた。

この城の城主ミスト。彼は色々な名前を使って活躍している人だけれど、私の前ではミストだ。

ミストが皮の手袋を外しながら言う。

「ごめん。ずぶぬれです」

「そうだと思って準備しておきました。コート、脱いでください」

ミストは黒い乗馬用のコートを脱ぐ。私は彼の後ろに回ってコ―

トを脱ぐのを手伝う。

「今回も馬で来たのですね」

「あなた、背が伸びましたね。わたしより高い」

「ええ、もう１７歳ですから」

「早いですね、ちよつと前は子供だと思っていたけれど」

「２年半も経ってます」

ミストは安心したような表情を浮かべ、クスリと笑った。

この人の穏やかな雰囲気がとても好きだ。でも、この人は何処に居ても誰の前でも穏やかとは限らない。私の知らない顔がこの人にある事をなんとなく察してはいた。でも、私がその事を口にしないのは、彼が私の前で何も言わないからだ。

彼が乗馬用の脚半の紐を解こうとする彼の手を止めた。

「私がします。椅子に掛けて下さい」

ミストの肩に毛布を被せる。ミストは玄関横の椅子に座り黒く長い髪を軽く絞っている。私は体を折り彼の足を膝の上に乗せて、乗馬用の脚半を外す。

「久しぶりに馬で森の中を走ってきました」

「せめて馬車で来てくれればいいのに」

「ここへは、１人で来たいんです」

「それなら、他にも方法はあるでしょ？この雨の中わざわざ馬で来なくても」

「馬で来るのが気に入っているんです」

「脱げましたよ。お風呂に入ってください」

「はい。…そういえば、忘れていました。ただいま」

「おかえりなさい」

「ハクシヨツ！」

「ほらあ、早くお風呂で温まってください」

私は風呂場の入り口まで彼の手を引き、その後、ミストが風呂から上がってくるのを少しの間待った。

きつと彼のことだからお風呂に入ってそのまま寝てると思う。い

つもの事だから時間を見て一時間位経ったら見に行こう。放っておくと明日までずっとお風呂に浸かりっぱなしで眠っているんだろう。乗馬用のコートはかなり汚れているので明日にでも洗おう。彼が好きなお茶を煎れて、また少し待つ。ベッドのカーバーを外し、布団を捲くり、いつでも寝られるようにした。

大きめのシーツを何枚も持ってあちこちに配置し歩き回った。そろそろ1時間過ぎ。

風呂の外から声をかけたけれど返事がないので扉を開ける。

彼はやっぱり寝ていた。子供の様な寝顔。私はシャツを脱ぎ彼の体を抱き上げた。細い体だけと思ったより重たい。

脱衣所の長椅子の上に広げてあるシーツで体を包む。

「よつと」

もう一度体を抱き上げて寝室へ運ぶ。ベッドに降ろし長い髪を用意したシーツで丁寧に拭く。

「よく寝てるなあ、どこで何をしていたか知らないけど」

見当がつかないと言ったら嘘になってしまふ。だけど、彼はここで休養したいので何も言わないだろうし私も聞かない。

「ん…暑いです」

突然、目を開け、黒い瞳を見せたミストが言った。

「はいはい」

体を包むシーツを取る。

「喉が渴いた」

「どうぞ、冷やしたお茶です」

「飲ませて」

「しょうがないなあ」

「美味しい。もっと」

「そろそろ自分で起きて飲んで下さい」

「はい」

上半身を起こしてカップを受け取り、勢いよくゴクツと音を立てながら喉を潤す。

「良いお茶ですね」

「いつも通りです」

「そうですか、すごく美味しいけど」

「喉が渴いていたら、なんでも美味しいです」

「んー！寝ます」

「はい」

ミストはかなり早い時間に寝た。食事は明日の昼ぐらいまで食べないだろう。

明日になってからバタバタしなくなかったので彼が寝ている隙に魔術で調理の下ごしらえをして、スープを煮込んだ。

明日の準備が出来て寝ようとしていた時、彼の叫び声を聞いて急いで寝室へ行った。

彼は苦しそうに息を切らしていた。

「はあ！はあ！」

「ミストしつかり」

彼が上半身を起こして自らの両腕を抱える。きっと嫌な仕事をしてきたのだ。

「ああつ！」

ミストは大きく息を吐き気持ちを整えようとしているらしかった。

「大丈夫。大丈夫だから。ゆっくり、おちついて」

「嗚呼、ガレット。わたしは……」

「いいから」

ミストが開いていた黒い目を睨ると、大粒の涙がその頬を伝った。

彼は私の腕に体を預けた。

「ごめんなさい」

「いいですよ」

翌朝、朝の眩しい日差しが窓から差し込んで、鳥の鳴き声と聞きながら目を覚ました。

ミストは寝室には居なかった。

夜の間ずっと付き添っていたので彼のベッドで目が覚めた。白い小鳥が開け放した窓から飛び込んでくる。枕元でチチチと鳴いた。彼は湖にいるらしい。小鳥の声はそう言っていた。

## ガレット 2

寝室を出て、急いで着替えをして、洗濯と料理をした。

野菜は森の中に小さな菜園を作っていたので、そこから採ってきた新鮮なものを使った。彼が居ない隙に魔術を少しだけ使った。洗濯物を干す時だけ。

私は魔術が使えるし普段はかなり多用している。でもあの人の前では出来るだけ使わない。理由はあの人が嫌がるから。その割には、あの人はしょっちゅう私の目の前で魔術を使うけど、それもいい勉強になるので見るのはいい。

私が彼に出会ったのは10歳くらいの時だった。孤児で食べるものが無くて飢えていた。

彼に出会った時、私は彼の優しい笑顔に触れ、その暖かい優しさにどれだけ有り難くおもったか・・・。

彼は私に食べ物をくれて、拾ってくれた。命の恩人だ。

「君、名前は？」

「ガレット」

「一緒に来ますか？」

「うん」

「じゃあ、少し此处でまっついていて」

「うん」

彼の世話になるうちに、彼は見た目よりずっと歳をとっている事と魔術と剣術に秀でている事に気付いた。そして、複数の名前を持ち、なにやら普通でない生活をしているらしい事も。彼は私を仕事に連れて行ってくれなかったし、私の前で仕事の話をしなかったのので細かくは知らなかった。

彼に拾われ、この城に連れてこられた最初の頃は、彼が城内にいる時はいつも彼の後について歩いた。

14歳までの間に読み書きや一応の護身術、乗馬、マナー等、彼から勉強を教えて貰った。

2年半前、私との言い争いの後、彼が何も言わずに城を去ったので沢山泣いた。

半年に一度位、彼の姿を城で見たが、私が近寄らないように彼のいる部屋には結界がはられていた。彼が風呂場に行けばそこにも結界がかかっていて、一晩待っても彼は現れず、気が付くと私は自分のベッドで目が覚めたりして、ちつとも話をしてもらえなかった。たまに手紙が来ても、

元気ですか？わたしは元気です。位の内容。葉っぱや水の入った小瓶や鳥の羽、何か変わったものも送られてきた。全部とつてある。彼が送ってきた物は面白い物が多かった。

城の掃除をしたり畑を耕したり色々しながら魔術の勉強をした。この城の書庫は広く、多くの書物があったが何よりも多かったのが魔術の本で、私は魔術の勉強を続けいつか彼に認められて、一緒に行動したいと思って頑張った。

ミストは湖から帰るなり、元気に第一声

「おなががすいてしまった」

外の世界で彼がどんな風にいるのかは知らないが、私の前では彼は子供のように奔放な態度でいてくれて、年上の彼を可愛いと思うこともあるくらいだ。

「はい、食事、出来てますよ」

白い木綿の服を着ている、ほそつりとした体。湖には服を脱いで入ったのだろうけど、体や服や髪は魔術で一瞬にして乾かしたのだと思う。

今回は数日の滞在らしく、その間、彼が安心してのんびり過ごせる様に心を尽くした。

ある日の午後、彼が常々風光明媚と誉め、気に入っているベラン



ダで食事をしていた。

「美味しい。お茶もだけど、あなた料理が上手になりましたね。そういえば宮廷で働く話はどうしたんですか？また断ったの？」

「何回も聞かないで下さい。何度断ったら気が済むんですか？」

「でも、あなただって、いい加減、独立した方が良いでしょう。それに結婚してもおかしくない歳です」

「いいんです」

「どうするんですか？これから」

「あなたが近くに置いてくれればいいんです」

「ふう。またそれですか。困ったな」

「私だってあなたの役に立ちたいです」

「ん…だったら。何か頼もうかな」

「なんですか？」

「嬉しそうですね。じゃあ、もう一杯お茶を持って来て下さい」

「なんだ。そんな事が」

「ふふっ」

彼の笑い声を後ろにベランダから台所へと向かった。

「はい。お茶！」

「乱暴ですねえ。その置き方」

「だって、ミスト、あなたが悪い！」

「おやおや、こわいな」

「それって、ぜんぜん子供扱いだろ！」

踵を返し走ろうとした時に、ミストが後ろから私の腰をしっかりと抱いた。

「待ちなさい。ここに居て。あなたには感謝してます。急に大人っぽくなったから戸惑っている。どうしても役に立ちたいというのなら、一度、わたしから離れて修行してもらわないと。わたしはあなたには甘すぎる。だから、出来ればどうかこのままできて下さい」

「ミスト…でも、あなたは、たまにしか此処へ現れないでしょ」

「それでも、わたしを嫌いで無ければ」

「嫌いなわけではないしょ」

「お願い。こつちを向いて」

「ミスト……」

私はこの人が大好きだ。そつと抱きとめた。

急にミストが私の腕をつねった。チラリと目だけベランダの向こうにやり、体を強く押し付け向きを変える。そうしながら室内の方を見て武器の位置を確かめる。

「そのまま」

「はい」

小さな声で囁く。

「何かこぼしたとか、上着を脱がす振りでもして」

「はい」

「そろそろです」

体を離し、一斉に壁に掛けてある剣を手にし、ベランダから庭へと飛び降りる。私も自分で出来る限り素早く行動したつもりであったが、彼の速さは人とは思えない程尋常を逸したものだった。

「誰です？ここは私有地ですが」

彼が、背の曲がった小男の喉下に剣の先を突きつけながら尋ねた。小男はひるむ様子もなく、にっと笑った。

「伝令か何かですか？。たしか、あなたは王宮に居た筈。なぜ来ました？」

「王太子殿下が」

「なに？」

「毒殺されました」

「っ！そうか。去れ。此处を知った者は殺す」

「私がします」

私は彼の手を汚させたくなくて、慌てて前に出ようとしたが、彼が制した。

「いや、いい」

ミストは鋭く光る切っ先を小男から離した。小男は素早く逃げ去

った。

小男が逃げ去ると彼の厳しい表情は一変し、先程と同じように穏やかなものになった。

「あーあ、ここを知られたのでは、いい加減、引越すしかないですね。まあ引越しは簡単ですが、でも此処は気に入っていたのになあ。新しく結界でも張らなくてはね」

「はあ…」

そう答えながら私は彼の表情のあまりの変化に、如何に彼がこの城の外で危険の多い生活をしているのかと内心、心配をした。

「仕方ないなあ。行きますか」

「何処へ、ですか？」

「王都。ガレット、あなたも一緒に」

「いいんですか？」

「そんなに喜んで…後で泣いても知らないから」

「へーきです！」

王都は高い壁の中に広い街があり、街はお祭りの様に賑わっていた。ミストに拾われるまで住んでいた街だったけれど、孤児だった私の記憶は決して華やかな物でなく、廃屋などでお腹を空かせ、着る物も無く寒かった程度の、あまり楽しくない思い出しか無かった。今通っている大通りの町並みは賑やかで色々な店があり行き交う人々も購買意欲に満ちていて、田舎暮らしに慣れた私にはまるでお祭りのように見えた。ミストはいつもこうなのと言う。

「ガレットはずっと静かな所にいたから」

「でもっ、とっても活気があって感動しますね！」

「はしゃぎ過ぎ。先が思いやられるなあ」

「大丈夫ですって」

「だと良いですけど。王都ではわたしの事はリードと呼んで下さい。あなたも名前を変えましょうか。何が良い？」

「え？何って、どうしよう」

「じゃあ、ビータン」

「なんですかそれ」

「だめ？」

「もつとカツコいいのがいいです！」

「もう、我儘だな。自分で考えて下さい」

「えっとー、んー、んー。ゴー……」

「エトンゴね。決まり」

「まだ何にも言っていないっ！」

「いいの、いいの。ねっ。トゴンエちゃん」

「ぷーっ！さつきと違う！」

彼がクスクス笑った。その笑顔が嬉しくて、名前は何でもいいと思った。

立派な建物の中に到着した。私はただ彼の側に居て黙っているのが一番いいと判断した。

「王子。お元気でしたか？」

「リード！」

「王子殿下、次はあなたの番ですね。覚悟は出来ましたか？」

「ああ！でも、私で良いのか？」

「その為に勉強してきたのでしょ？」

「そうだが」

私と同じような年頃の王子はちらつと私を見た。

「この者は御気になさらなくても大丈夫です」

「うむ。新しいお弟子さんですか？」

「いえ、ただの世話係です。そのうち何かのお役に立てるかもしれません」

「楽しみだ」

「彼の事は後ほど改めて。暫く滞在するので宿を探します」

「どこか準備させよう」

「いえ、この者がおりますので、今回はご城下におります。宿が決まりましたら直にお知らせに参ります」

#### 4話 ルーニア（ルウナ）〜1

あたしはルウナ。この大地の神殿に修行に入って2年たった。一応、巫女アーニヤ様付きでお世話や身辺警護みたいな事をする係。神官様の儀式の手伝いをする所まで頑張ってきた。

でも、神様に仕えるのはあたしには向いてないって最近思う。どういう訳だか、どんなに頑張っても神様の声が聞こえたり心を感じたりしないし。巫女様のアーニヤ様みたいに人を治癒する不思議な力なんか全然養えなくて、ただ、性格がいいとかよく働くからとかいう理由で巫女アーニヤ様付きに選ばれたんだろうと思う。

アーニヤ様は、あたしをとても気に入って下さって嬉しかった。あたしは巫女アーニヤ様のお側に居られればそれで満足する普通の女の子だと思う。

アーニヤ様は、儚い感じの人で守ってあげなくちゃって思う。アーニヤ様はお体があまり丈夫でらっしやらない。

考えたくないけど、巫女様って長生き出来ない方が多いらしい。でも長生きすればその霊力も物凄いらしい。あたしはアーニヤ様に絶対長生きしてもらうつもりだ。

「アーニヤ様、こちらの聖衣でいいですか？」

「ええ、お任せします。あなたも、もう自分の支度をしていいのよ」  
「でも、王宮の方へ行かれるんですから、ちゃんとしていかない」と

馬鹿にされたら腹立つし」

「まあ、まるであなたが巫女として行くみたい」

アーニヤ様が楽しそうに微笑んだ。あたしはアーニヤ様の笑顔が大好きだ。とっても綺麗だし居るだけで花が咲くみたいに周りの雰囲気明るくなる。

「あーん。すみません。あたしったら、つい夢中になって」

「いいのよ、あなたを見ていると楽しいわ」

1つ年上のアーニヤ様は可憐で純粹で、人を疑わない本当に素敵

な人だ。長い髪、大きな目、細い指、あたしはアーニヤ様が大好き。髪はいつも下していきちゃんと櫛を通してある。髪を梳いたりするのはあたしの仕事じゃない。それは他の人の仕事。今回みたいな国の祭りでは雑用もするけど、普段はいつもアーニヤ様を見るのが仕事だ。アーニヤ様が困ったらすぐにあたしが動くっていう決まり。

「そろそろ自分の支度もなさい。あと二週間しかないのよ」

「だから最終点検してるんです」

「さっきから何回もしてるでしょ？私があなたの支度をした方がいいかしら？」

「あー！出来ますから！あたしなんて荷物なんにもいらないし」

「そうはいかないでしょ？私の側に居てもらうんだから。新しい衣類は届いて？」

「はい。届きました」

「忘れ物しないだね。今日はもういいから、自分の支度なさい」

「はい。じゃあ失礼します」

此所、エル・ソニウル王国では、もうすぐ王都で収穫を祝う新嘗祭だ。この新嘗祭では各大神殿の巫女様や神官様が式典に参席する。この国では日の神、土の神、水の神、月の神の四つの大神殿が王都から離れた東西南北の静かな場所にある。大神殿は神聖な場所とされているので、巫女や神官が修行したり祈りを捧げる場だ。

王都にも一応4神殿はある。ただし王都にあるのは、どっちかって言うと聖職者向けの建物じゃない。

星や空の状態を調べて、天気の前測とか気象研究をする施設。

民が豊穰を祈ったり、今年はどんな作物がよく取れるだろうという予想をしたりする役割を担っていて、普通の人にとっては便利な神殿で、アーニヤ様みたい清らかな巫女様が住むような所じゃ無いと思う。

王都に行つて帰ってくるまでは忙しい。

はやく新嘗祭が終わつて静かな毎日に戻りたいのがあたしの本音だつたけど、１年に１度の大祭だから、行かないつて事は出来ない。アーニヤ様の部屋を出て神殿への廊下を歩いた。

この大地の大神殿は一般の人が入れる区域と神殿の関係者しか入れない場所に別れている。

普段あたしは誰でも入れる一般向けの神殿までは行かない。奥殿止まり。アーニヤ様の側を離れないからだ。でも、奥殿内の神殿で祈りをして良いのは巫女様が神官様。あたしは奥の神殿では端っこでアーニヤ様を見守るだけ。

アーニヤ様が奥神殿へ入る時以外は、あたしは奥神殿へ入れない。だから、あたし自身が祈りを捧げたい時は多くの人が出入りする一般向けの神殿にお祈りしに行く。

あたしのお祈りを神様が聞いてくれるとも思つてないけど、遠出する事になると思うと、アーニヤ様の無事を祈りたくなった。

急いで廊下を歩いていると、数人の人が向うから歩いてきた。案内をする若い女の子と、その後ろに汚らしい白髪の老人。

老人は軽く頭を下げたが、なんだかとても嫌な感じがする。汚い格好のせいだけじゃなく、なんとなく嫌な雰囲気だ。

気になって呼び止めた。

「ちよつと、待って」

「はい」

「そのお年寄り、何処へ案内してるの？」

「アーニヤ様のお部屋へです」

「ここは特に神聖な場所だからその人の汚れはきちんとしてから奥に行くべきじゃないかな」

「はい、ですが、アーニヤ様がそのままお通ししていいと」

「だとしても、客人の身なりぐらいは気を使うのが、あなた達の仕事でしょ」



あたしの態度が大きいのは、話してる相手が淡い桃色の襟の着物を着ているからだ。着物の襟の色は、神殿内での立場や役割、徳の高さなんかを表している。

あたしのは青。この色は、ちょっと人数が少ない。アーニヤ様の周りではあたしだけだし、1人の巫女や神官に対して3人までしかないのが青い襟だ。青い襟というのは世話係もするけど身辺警護的な役割もし、いざというとき神官や巫女の身代わりに命を投げ出してもいいと自ら進み出た者しか着られない襟の服だ。

紫とか、黒とかの濃い色になると徳の高い相手だから、あたしも偉そうな口は利けない。

「お急ぎでいらっしゃるので…」

老人を見たが、老人は黙っていた。かなり具合悪そうで下を向いて全然動かなかった。薄汚れた赤いマント、汚れて絡まってくっついてる白髪。冗談じゃない。こんな男をアーニヤ様の部屋へ通すって言うのか？。だったらあたしが付いて行くしかない。

あたしは老人の後ろに立った。老人は歩き出し少しして急に振り返って、あたしを見た。虚ろな目、嫌な感じだ。

「欲が無い」

老人は小さな擦れた声で言い終わると、また前を向いて歩き出した。

嫌な予感がして心配になったあたしは、老人がおかしなまねをしないかと注意深く後ろをついて行った。

アーニヤ様の客室に入ると老人が人払いを言った。

「わかりました。皆下がって下さい」

部屋から出たくなかった。でも、アーニヤ様が言う事に逆らえない。

心配で振り返りながら最後に部屋を出た。

心配だ。護衛の女達を呼ぶように言い付けていつでも扉を開けられるように準備していた。

少し時間が経った時、部屋の中からガタンという大きな音が聞こえた。すぐに部屋へ入った。

「アーニヤ様！」

客室から奥の部屋へ走る。ただ事じゃない。机も椅子も倒れている。アーニヤ様の身が心配だ。扉を3回開けて奥の寝室へ入った。アーニヤ様のベッドに老人が居た。アーニヤ様の上に覆い被さっている。

「あんたっ！どきな！」

老人はアーニヤ様から離れない。しっかりと体をくっつけているのでアーニヤ様の顔が見えない。あたしは老人をどかそうと思い、足を前へ動かそうとした。足が一步前に出ない。動けない。足だけじゃない短剣を取ろうとして懐に入れた手もだ。

あたしは動けないまま目を見開いて、アーニヤ様に何が起こっているのか知ろうと必死になって目を凝らした。

老人の髪の色がだんだん黒くなっていく。

どんなに目を凝らしても、あたしには霊視能力がない。目の前で何が起こってるのか解らない。飲み物を飲むみたいな音が老人の喉から聞こえてくる。老人は若返ってるみたいだ体からオーラが出てる。オーラなんて初めて見えた。うっすらだけど白い感じ。

アーニヤ様のオーラが小さくなって行く。この色はアーニヤ様のオーラだったのか。

大きな笑い声が寝室に響く。今若返った男の声。あたしはそいつを睨み付けた。

男がアーニヤ様から体を離しあたしの方を見る。陶醉したみたいないやらしい感じの目。口から紅い液体が流れている。

「次は、あなただ」

男は不敵な笑みを浮かべ、狙いを定めた動物みたいにあたしを見た。

## ルーニア（ルウナ）〜2

男はすっかり立ち上がると、あたしに向かって歩いてくる。

「許さない。アーニヤ様を」

どうやら声は出るらしかった。

「あなたが巫女になるべきだ。だから」

男は呟きながらあたしに近づいてくる。ここまでだ。すぐに誰かが駆け込んで来る筈。

「だれが来ると？ここには誰も来ない」

あたしの考えている事がわかってしまうのか。

「さて、この力を与えましょう」

男があたしの前に立った。あたしより少し背が高い男があたしの懷に手を入れてきた。どうする気だ。

あたしの手からゆっくり短剣を取り上げ、鞘を投げ捨てる。

え？男が自分の指を傷つけた。そしてあたしの目の前に血が流れ落ちそうな指を差し出す。

あたしは大きく口を開けた。自分がどうしてそんな行動をとったのかわからない。

ただ、あたしからアーニヤ様を奪ったこの男が憎い。出来る事ならこの男の血を飲み干して敵を討ちたいと思っていたのかもしれない。一滴、二滴、口の中に深紅の液体が滴る。

どろっとした感触が舌を通る。でも味も香りも無い。これって血じゃないのか？

男の指先から流れ込んでくる液体と共に不思議な感覚があたしの中に入ってくる最初は意味が分からない古い記憶、多くの記憶と共に最後にはアーニヤ様の記憶もあたしの中に入ってくる。どんどん流れ込んでくる記憶と幸福感、そして何か特別な力が体の中に満ちてくる。

自分の体の中が満たされていく。いいや、心も。

どんどん流れ込んでくる。記憶と優しい想い。それと、特別な力。全部アーニヤ様のものだ。

「っう！」

男が苦しそうな声をあげた。驚いた。あたしはいつの間に目を閉じたのか。慌てて男を見ると、さつきより弱っている。男があたしの上に倒れこんできた。重たい。あたしも床に倒れる。

男は必死に体を起こして何か言ったようだったが、言葉じゃないみたいだった。

だんだん色が薄くなり透明になった液体が喉を通る。

長い時間が経っている。

あたしは…気が遠くなりながら、男の体が老人へと変化していくのを見た。

目を開くと、大理石の床に跪く人々がいた。私を見ている。

見回す必要が無かった。ここは奥の神殿。後ろに大地の女神像がある。

私が座っている椅子は以前アーニヤ様が座っていた。

「私の名はルーニア、これからはあなたがたを守り、神の意思を伝えましょう」

室内の全員が頭を下げた。

立ち上がり自分の部屋へと向かう。以前寝泊まりしていたルウナの部屋じゃない。これからは私の部屋はアーニヤ様が使っている部屋だ。

後ろから女官達が付いてくる。

「今日は1人にしてください」

扉が閉まる音が後ろからした。やっと1人になった。一つ溜息をつく。寝室へ足を進めた。

何が起こったのかは上手く説明出来ない。ただアーニヤ様は亡く

なり、私とその知識も力も受け継いだということだ。

木々の美しい緑の中。小さな滝壺の水につま先を浸す。冷たい水が肌を引き締める。

私の膝まである緑色の髪が水の流れに遊ぶ。以前は赤かった髪の色は、アーニヤ様の力を継いでから緑色に変化していた。

私がルウナだった頃は肩までしかない髪を束ねていた。雑用に追われていたしアーニヤ様の側を離れないでいるのには動きやすい方がよかった。

もつすぐ王都へ行く日。

楔を済ませ冷水から上がるうと岸に向かって歩くと、馬の蹄の音が聞こえてきた。

馬の蹄の音が近づいてくる。此処は巫女専用の襦ぎの場だから女の護衛が山への出入り口を塞いでいるはず。此処へ馬で入ってくるのはあの男ぐらいだ。

馬が止まり涼しげな麻の上着を着た男が馬から降りる。

私は白い浴衣を急いで羽織った。

男は私には近づかず、離れた所から話す。老人だった筈の男は今若く、黒い髪を後ろへ束ねていた。

「あら、何の用かしら」

「ご機嫌を伺いに参りました」

「あなたが？」

「はい」

「らしくない事をするのね」

「お出かけになられるまであと数日なので、あなた様の变化後の体調を気にしていました」

細い体つき、憂いのある整った横顔。アーニヤ様のような長い黒髪。若い普通の女の子なら、すぐに彼の外見に惹かれるだろう。

しかし、今の私の目には、彼が人外の者であり、普通では考えられない程の長命で有ること。そして神に仕える私とは異なる、血生臭い日々を送ってきたで有ろう事も彼のオーラから推し量れた。

「私が思う通りだとしたら、…リシュエル」

「はい」

「やはり、そうだったの」

私が一歩踏み出すと彼は跪いた。

「どうか、お許しを」

「怒ってはいません。でも、なぜ私が巫女に選ばれたのか、それだけは話して頂戴」

「わたしには、神の意思など解りかねます」

「だったら、なぜ、あなたがアーニヤ様の力を私に与えたのです」

「わたしの一存で」

「なんとこの不遜な」

「巫女が弱くては困ります。民が望んでいるから、これから暫くは、体が丈夫で心に穢れのない、あなたに」

「一戦士がそこまで考えるのには、理由があるのですね」

「はい。この国も10年後には変わっていると思います」

「わかりました。そろそろ人が迎えに来ます。下がちなさい」

「失礼いたしました」

ヒラリと跨った馬を駆りリシュエルの姿が遠ざかっていった。

もっと聞きたい事はあった。でも、彼が答えてくれるのかどうか、多分それもないのだらうと思う。私は彼という存在に私とは全く異なる魔力を感じた。互い変に影響しても困るので最低限の会話で帰って貰った。彼もそう考えたから私に近づこうとしなかったのだらう。

私はあの日、リシュエルによって、アーニヤ様の特別な力を与えられてしまった。

アーニヤ様は静かに埋葬された。でも、誰もその事で困らなかつ

た。巫女の体というのはただの器。人々は次の巫女が誰なのかという事には関心がある。力を失った者には生死を問わず、見向きもしない。それがこの世界だ。

私と一部の者を除いてはほとんどの人が新しい巫女の私を向かえるために動き回っていた。

私は10人ほどの聖職者と共にアーニヤ様を奉った。

アーニヤ様にもう心はない。全て私が受け継いだ。アーニヤ様は私と共にある。

代々の巫女が今までどうやってその力や知識を伝えてきたのか知らなかったが、私の受け継ぎ方は最近では珍しかった。

普通は代々そういう血筋の者を幼いうちに巫女候補として選んでくる。より霊力の高い巫女を望み親戚同士の結婚による女の子が選ばれることが多い。だから体が丈夫でなかったのだ。

リシュエルが言ったように、人々を安心させる為に心身共に強い巫女が必要なのかもしれない。強くならなくては。いつか、戦争が終わった時、多くの人を幸福へ導けるようになるまで。

## 5話 セウルドゝ1

ぼくは、身分の低いお母さんの子供なので王になれないだろうって、みんな思ってる。ぼくもそう思う。だって、そうだよね…。でもフィーナが居てくれれば別に王にならなくていいと思う。

フィーナは2歳半歳年上の子守だ。

私はセウルド。エル・ソニユル国王の現王の第一子だ。だからって皇太子になれるっていう簡単な構図ではない。

今、皇太子の様に扱われ始めたのは、あと二人いる王子の内、私の次に生まれた3歳下の弟。それも一時のことかもしれないし、わからない。

大人たちの汚い勢力争いなんて関わりたくない。というのが私の本音だった。

私が10歳の時からずっと子守役をしてきているフィーナという女性と結婚できれば良いと思ってる。

私はまだ13歳なので、あと4年くらいは求婚できないかもしれないけど、必ず彼女と結婚したい。

フィーナは一応貴族の娘だけれど、気取った所がなくて優しい女の子だ。女の子っていうのはちょっと違うかな。もう結婚してもいい年齢だから、レディーっていいのかな。

フィーナが16歳になった日に、彼女に大人と思って欲しくて、自分から「ぼく」はもう止めて「私」という言葉を使う事にした。



私は王の息子といっても、母の身分がさほど高くないので誰も私に大きな期待を抱いていなかったのは、私にとってはかえって気楽だった。

次期王の候補の座とはほど遠い私は、王宮の片隅で楽しく暮らしていた。

勉強も王族だから学校には行かない。教師が来て講義をする。色々な教師がいたし、勉強は真面目にしていたけれど、どちらかというところ、どうでも良かった。

魔術の先生でリードという人がいた。

リードとはたまに会うだけで話をするのも少なかった。その日までは挨拶程度だったと思う。リードを呼び止めたのは13歳の時だった。

何故、彼に恋の悩みを相談したのかというと、たまたまフィーナの事を考えている時、丁度、目の前にいたからだだった。

魔術の教室は他の教科と違って、庭にある<sup>ひとけ</sup>人気の無い場所にある小さな建物だった。他の教科では私専用の教室に教師が赴くという形だった。魔術の教室には面倒だったのでそれまで足を運ばなかった。彼もあまり居る様子が無かった。その建物が魔術の教室だという事も忘れていた。王宮内の庭の木に寄りかかりフィーナの事を考えていたら、若草色のマントを着たリードが魔術の教室から出てきた。髪を上の方に束ね一箇所<sup>ひと</sup>に纏め、背があまり高くない若々しい教師は、静かな雰囲気だった。

「あの、先生、ちょっと良いですか？」

「セウルド様。お久しぶりです」

表情のあまり無い人だが、顔の作りは美しく、印象は悪くない。私が声をかけたのはこの教師が若いから恋愛の相談がしやすいかつたのもあった。

「けっこうですか」

「ええ」

彼は、一瞬、右の眉尻を上げ何か考えたような顔をした。

「これはまた。随分と…お早い」

「先生は？好きな女性は居ないんですか？」

「わたしの事は置いて、そうですね」

この年若い教師は最初から魔術を教える気が無さそうだった。子供心にこんな若い教師に何もわかってもらえないだろうと思ったけれど、教師の中では男として一番歳の近い先輩だし、何でも良いから誰かに応援して欲しいというもの本心だった。

「好きというのは良い事ですが、結婚は…」

「やっぱり解らないか」

「占つてあげましょうか？」

魔術の教師だから占いと言う言葉が出てきても不思議は無かった。  
「当たるの？」

「さあ、占いはあてにならない。と思います」

「だったら、いいよ」

「でも、参考にはなりません」

「うーん」

「どうします？」

「じゃあ、ちよつとだけ頼もうかな」

「わかりました。では、占いの支度をしますので後ほど教室へお越しください」

若い教師が新緑の色のマントを風になびかせ立ち去った。

その日から毎日、木造の魔術の教室へと通ったが、なかなか占ってもらえず、何故か簡単な魔法のやり方を講義されて帰ってくる。

「今日は此処までです。明日またおいでください」

「占いはまだなの？」

「はい、こういう事は時期が難しいので。特に結婚となると一生の事です。あなたも、間違えた占いなんてしたくないでしょうし」

「そうか…」

「その代わり、きっと当たるように、頑張りますから」

「うん。それならまた来る」

「お願いします」

あまり表情の無い人だと思っていたが、毎日会ってみると、とても優しく、穏やかな笑顔が印象的な人だ。でも少し頼りない感じもした。

ある日、魔術の教師が自分の事を少し話した。

「わたしには昔、子供がいました」

「え？」

「ほんとうです」

「どんな？今いくつ？」

「さあ、どうだったか」

「まって、先生って若いですよ」

「そうでもないかな。わたしのことは名前で呼んでください」

「でもっ、どう見ても20代前半ですよ」

「そんな風にみえるんですね」

教師は一瞬、困ったような顔をした。

「実を言うとかかなりの年寄りなんです」

「うそ、だって…若くみえるけど？」

普通教師と言うのは、結構、歳が行っていて、難しい言葉を選んで話してくる。

子供の私の前では、なんとなく威厳を保つような感じがしたが、リードは偉そうな言い方もしないし、いつも解りやすい言葉で話す親しみやすい。教師としては珍しい人だ。外見も若者らしく爽やかだ。

そういえば、この人をいつ紹介されたかよく覚えていない。大分幼い時だったのかもしれない。たまに見かける範囲では、表情を見せることが無かったが、毎日話してみると暖かい人だった。

でも、どう見ても若い教師が年寄りというのは本当なのかな？

「見た目で判断するのは人の常ですが、それだけでは賢いとは言えません。人を見極める力を持てば世界が大きく変わります。貴方様

にはその才能がおありのように見受けました」

「人を見極める？どうやってですか？」

「そうですね。まず、相手の目を見るといいでしょう」

リードは時々城を空け留守にしていた。そういう時は他の授業や稽古は受けてはいたが、暇を見つければフィーナを呼んで、食事をしたり、お茶やお菓子を楽しんだりして過ごすようにした。

他の教科もきちんと学ばなくてはいけないので、しかたなくではあったけれど、一応授業を受けていた。ある日、突然、私専用の教室の扉が開いた。丁度授業を受けている最中だった。

「失礼、遅くなってしまいました。見学させて頂きます」

中に入ってきたのはリードだった。どうやら前もって許可を貰って教室へ入ってきたらしい。教師がリードを快く向かえた。

「いらつしやい。どうぞ、お好きな所へ」

「恐縮です」

リードはどの教科の講義にも必ず付いてきて、黙って講義を聴いた。彼が講義を聞いているというより、私がどんな授業を受けていて、どの位理解しているのか観察している様だった。2週間位彼は講義に現れなくなり、また暫く姿を見る事もなかった。

ある時魔術室での講義が終わってリードが言った。

「そういえば、簡単な占いなら、ご自分で出来ますよ」

「本当？」

「ええ。運を占う、金貨を投げて手の上に乗せます」

「それ、知ってる」

「ですよ。じゃあ、お呪いは？<sup>まじな</sup>恋の」

「どんなのですか？」

「沢山あります。相手に幸せをプレゼントするもの、自分の魅力に気付いてもらえるもの、その他にも、様々です」

「どういづのがいいんです？」

「人によります。ですか、今のあなたは、相手を喜ばせてあげると良いと思いますよ」

「どうやって？」

「好きな人が喜びそうな事って無いですか？」

「うーん。お花をあげるとか…。女性は綺麗な物を貰うと喜ぶと思うけど」

「では、今度、あげたいと思うものを持ってきてみて下さい。ものによりますが、お相手の女性が喜ぶように魔法をかけられるかもしれないですよ」

「はい、持ってきます」

なかなか難しかった。フィーナが本当に欲しがっている事ってなんだろうかと、数日間悩んだ。

フィーナ自身は、私の世話をしてくれるので私が楽しかったらそれでいいと言ってくれる。

そうか、私は、彼女が楽しいかどうかまで考えず、ひたすら甘えてきたのだ。彼女にはきつと責任もあつただろうし、気を使つたに違いない。そう考えると、早く結婚したいなどと勝手に考えてきた自分の幼さが恥ずかしくなった。リードにまだ早いと言われたのもそのせいだ。

## セウルドゝ2

フィーナとお茶を楽しむ時間に、それとなく質問をしてみることにした。宮廷内の庭の、柱と屋根のある休憩所で椅子に掛け、茶と菓子を楽しむながら話をしていた。

「フィーナ、ご両親は元気？」

「はい。おかげさまで。セウルド様？そろそろお部屋へ戻られた方がよいのではないかしら、午後は雨が降るとか聞きました」

「お宿下がりには、今度はいつ？」

「来月です。1週間」

「そうか、寂しくなるけど、ゆっくりしてきてね」

「ありがとうございます」

私はフィーナの実家の事もたいして知らなかった。ただ、11歳の時に子守として紹介された彼女がとても親切で楽しい人なので、ひたすら一緒にいて、遊んだりしていただけた。ただ。

子供時代はよく一緒に追いかけてこをした。彼女は元気よく、日の光に金色の柔らかな髪をなびかせ、ふたりではしゃぎ回った。夜は綺麗な声で物語を読んでくれたり、手が汚れていれば手を洗ってくれたり、本当に優しく接してくれた。今、彼女は髪を結び、長いドレスを着て大人の女の人らしくしとやかに話す。

いつまで経っても自分が年下なのが悔しかった。大人の男になりたい。フィーナを守って、フィーナの笑顔を見て幸せに暮らしたい。そんな気持ちが芽生え始めた。

フィーナが宿下がりをした時に彼女の実家を訪ねた。

私の命をどうしようと思う者もないだろうと思っていたので、剣を持って歩いていれば安全だから簡素な格好をし使用人の扉をくぐって1人で街へ出た。街へ出るのは初めての事では無かった。

裏通りを歩き回るのは危険なので広い道を選んで歩いた。馬で行

こうかとも思つたが、厩には番人がいて、見咎められるのもまずいから徒歩だった。

城下街から出て少し行つた所に彼女の家がある。

彼女の実家の屋敷は小さいが、昔はいくらか地位があつた家柄なので、そんなに品のない外観ではなかつた。門を叩くと、家の使用人らしき男が扉を開いた。

「カロン家とお見受けしました。フィーナ嬢に会いたくて伺いました」

「どちらさまでですか？」

「セウルドと伝えてもらえれば解ります」

「かしこまりました。少々お待ちください」

少し待たされた後、慌てたように、先程の使用人を含め数人の使用人を従えて、家の主人であるフィーナの父らしき男が玄関に現れた。

「これはこれは、わざわざこのようなむさ苦しいところへおいで下さつて。ささ、中へお入りください」 人の良さそうな主人が挨拶を済ませると使用人達は雲の子を散らしたように立ち去つた。突

然の来客におもてなしの準備を始めたのだ。

「こちらは妻のリシアです。セウルド様には、私共の娘が大変お世話になり」

「堅苦しい挨拶はいりません。立ち寄つただけで直に帰りますからお氣遣いなく」

「恐縮至極に御座います。娘は直に参りますのでお茶をお召し上がりください」

「頂きます」

客間へ通されて茶を飲んでいると、質素だが品のあるドレス姿のフィーナが現れた。編み上げた金色の髪。自分より少し大人っぽい気がした。

「買い物に出たら近くまで来たので、会いたくなってしまつて、急でごめんなさい」

「わたくしを思い出して頂いただけでも有りがたいですね。でも、あまり危険な事はなさらないでくださいませ」

「心配をかけてしまったかな。でも、危険な事はしていない」

「ですけど、お一人で。どうか共の一人ぐらいはお付けください」

「わかった。次に何かの折があればそうします」

フィーナとの間に距離を感じるもどかしい会話だった。いつもより敬語が多く一番話したいことは後回し。

王宮での日常の彼女との会話は友達の様でも一向に構わなかったが、両親の前では嫁ぎ先は決まっていなくても年頃のお嬢さんで、私は14歳とは言っても男だったのだ。

彼女の事をもっと知りたいから出向いたのだったけれど、これでは多くを知る事は出来ないと思って適当な会話をし、早々に帰る事にした。

「馳走でした」

「もうお帰りになられるのですか？」

「ええ、急にお邪魔して失礼しました」

「ぜひ、またお越し頂けると光栄です。失礼かと存じますが、護衛を付けますのでお連れ下さい」

社交辞令の挨拶。私が帰る事に少しホッとしている様だった。帰り道、私に何かあつては自分達の責任が問われるから護衛も付く。ひよつとすると、街に着いたら王宮から向かえが来ているかもしれない。きつと、報告しただろうから。

王都に入ると、思ったとおり城から迎えが来た。私は王位を継ぐ可能性が低いにも関わらず、王の子供という立場故に、何かあつては問題があるという面倒な自分の身の上に、いつもの事ながら内心苦笑いした。

王宮に戻って数日経つても、フィーナに何を上げればいいのか決まらず悩んでいた。思い悩むあまり、この日のリードは授業もろくに頭に入って来ていなかった。



「お復習はここまでにして、今日は魔術の基礎の考え方を…あれ？どうしました？ご気分が優れないですか？」

「わからないんです」

「…どこがですか？」

「いえ、授業ではなくて、フィーナに何をあげたらいいのか」

「ああ、その事でしたか」

「だって、正式には上げられない。だから、お金を掛けるのもおかしいし、何がいいのかずつと考えて」

「その調子です。必ず答えは見つかりますよ」

「リードは？あなただったら、どうするんです？」

「そうですね…今日は授業など止めましょう。たまには庭でも散歩しましょうか」

魔術室外の周辺はは涼しい木陰が多く、適度に手入れされた下草の薄い緑の草の絨毯や、爽やかな風が塞いだ気分を和らげてくれた。

「例えばこの葉っぱ一枚でも、そこに落ちている鳥の羽根でもいいんです。気持ちが籠っていればそれで」

「そんなのでいいの？」

「ええ。大切なのは結果ではなく、どれだけ相手を思ったか、という事ですから」

「でも、それじゃあ、気持ちが伝わらないかもしれない」

「いつか伝わればいいと思いますよ。その方が相手の心にも深く浸透するでしょう」

「だって、急いでいるんだ」

「急いておいでなのはよく分かります。しかし、それだけでは意味がありません。事はひとつひとつ、段階を踏んでこそ想いも通じるものです。恋愛以外でも同じです。わたしは以前、占いはあまりあてにならない。と申し上げた事がありました」

「そういえば、最初に会った時にそう言っていたな」

「占いというのは、殆どが統計学です。つまり、可能性を視差した

物で、結果を生み出すのは強い思いや行動でしかないのです」

「強い思いと行動…」

「ええ、強い思いは希に奇跡を起こすと言われています。確かにごくたまにそういう事は起こります。それはどちらかと言うなら、占いではなく、呪いの類に属します。一般には混同されやすいのですが、行動というもののほど顕著に人を計れ、結果を出すものはありません。現に魔術師を志す者でも、魔術の才能を持っていようと、書物を紐解き、思念を意のままに操る鍛錬や自然を使役する為の鍛錬などの、修行という行動を怠れば魔術師には成れないどころか、ただ才能を埋もれさせてしまうのですから」

「つまり、強い思念と行動が結果をもたらす。だから、段階を踏む事に意味があるという事か？」

「はい、その通りです。応援しています。焦つたらかえって失敗するかもしれないですから、ゆっくり考えてから行動して下さい」  
理解と強い思いと行動が大切だと聞かされた私は、また暫く考える事になった。

そうこうするうちに、戦に参加する事に決まった。行かなくてはならなくなった。

年齢的にもそろそろだろうと思っていたので、戦に出るのは特に驚く事でも無かった。

父が私の生死を気にしてくれているとも思っていなかったのも、それなりに覚悟は出来ていた。よっぽどの事が無い限り自分は大丈夫だと思う。大体、守られて終わるのだ。気をつけなくてはならないのは敵よりも味方だった。戦争のごたごたに紛れて反乱を考える者だっている。私を利用しようとする輩だっているかもしれない。居るかもしれない。

手柄を立てることよりも生き残り、今までの生活に戻る様にすることだった。

その前にフィーナに何か渡したい。何も思いつかなかったのせめてフィーナの笑顔だけは見たかった。フィーナをお茶に誘った。「御武運をお祈りしてまいりました。これをお持ち下さいませ」何かあげようと思っていた私は、彼女に頂き物をしてしまった。「いいのか？ありがとう」

彼女の金色の髪の毛を編んで出来た紐に神殿で売っている太陽を模った飾りが付いていた。

「この飾りを女性の髪に縛って持っていると、運が良くなるそうですわ」

彼女は私の為に少しだけ髪を切ったのだろう。

そのことをリードに報告した。

「髪の毛ですか。女性の髪は強いからきつといいですよ」

「それで、決めました」

「はい？」

「無事戻って、打ち明けるって」

「うーん、性急ですねえ」

「彼女が無事を祈ってくれたなら、それもプレゼントだって思ってたそうですね。わたしもあなたが御無事であるようにと願っていますから」

「そうか。必ず戻ります」

「お待ちして申し上げております」

戦に出て数日経った頃、鎧甲を装備した1人の戦士が常に私の側に居る事に気付いた。

その者は口を開かなかったし、顔も見せない様に常に兜を被っていた。

決して体が大きいとは言えない戦士は、いつも私の後ろに居て私を守っていた。

何故かその戦士が側に居る事で、私は落ち着いていたし、全てが

うまく行った。

戦いは、予め、父が準備させたものだったので何もせずとも勝ち  
は決まっていた。

私の父は負ける戦をしない人だ。費用も臣下も全て父の采配で、  
私はただ、そこに居れば良かった。

戦が終わる前に、略奪をさせたくなかった私は敵の大將に会うと  
決めた。降参するように頼みたかったのだ。

誰もが私を止めたがっていた。

「誰か、共に来てくれる者は居ないのか？」

私の言葉を遮る者は無く、かといって、後押しする者も無かった。  
1人で敵陣へと向かおうとした時、いつも私の側にいた鎧甲の戦士  
が膝を付いた。

「わたしをお連れ下さい」

「そなたは、何者だ」

戦士は膝を付いたまま兜を脱ぎ、束ねていた黒く長い髪を解いた。

「わたしは交渉には向きませんが、お守りする事だけは約束します」

「リード？あなた、どうして此处に？」

「すみません。心配だったので」

小声で話す。言葉遣いはともかく、彼は決して私を直視しない遜  
った態度だった。

「どうして？危ないでしょう？」

「わたしは、戦場では戦士以外の何者でもありません。ですが、今  
回はあなた様を守ることに徹します」

「大丈夫？」

私は彼を魔術の教師としてしか見ていなかったたので、彼が戦士と  
して強いかどうかは知らない。一応確認を取ったが、見たところ、  
かなり重そうな武器も防具も、平気な顔をしている。

「はい」

私は彼の近くに行き体を屈めてさらに小声で話しかけた。

「リード、えつと苗字は？」

「名はいらないです。命令だけ下して」

にこりと笑う、その笑顔はいつもの様に優しかった。

「私を守れ」

「御意」

誰にも顔を見られたくないらしく、直に兜を付けた。誰も彼の顔を見る事は無かった。

二種類の旗を背中に掲げ、鎧甲を纏い、馬に跨るリードに馬上で話しかけた。彼は人がいなくなってから兜を脱いだ。

「重くない？」

彼と少しだけ話したかったので、馬の歩をゆっくり進めた。

「馬に重くないかって聞いた方がいいですよ」「リードって戦士だったの？魔術の先生と思ったけど」

「急ぎませんか？話は後で出来ます」

「そうか。じゃ、行こう」

後で話すというのは、私も彼も安全に帰れるという事だった。

「あちらへ着いたら、わたしを盾にしてください」

リードはそう言っていると、私より前に馬をまわし、先を歩いた。

敵の陣地では、あまりにも簡単に事が進んだ。リードはずっと私の盾となった。もっと言うなら、彼は矢も剣も通さない魔法を使っていたと思う。話し合いの合図の旗を掲げていたので誰も攻撃をして来なかった。相手は私を使者と思い内部へ招いた。リードは何故か誰の目にもはつきりと映っていないが、武器、防具を身につけていても誰にも気付かれないらしく、一言も咎められなかった。どうやらそれも魔術の力らしかった。だったら、鎧兜を着る必要が無いのではないかと思ったが、どうやら魔法というのはそういう物でもないらしい。

彼は私の前を歩き、武装を外す事もないまま敵将の前に立ち膝さえも折らず、兜を脱いだ。

「おまえは…」

「お久しぶりです」

敵将は苦い笑いを見せた後、諦めた様に言った。

「マグワス。そなたが居ては事が運ばぬ訳だ」

「すみません」

「煙草はいるか？」

「いただきます」

リードは煙草に火をつけた。リードの指先から焰が灯り白い煙が上がる。

「それで？そなたの要求は」

「いえ、わたしはただの護衛で、こちらの方が交渉をなさいます」

「解った。聞こう」

「その前にお人払いをお願いします」

部屋に人がいなくなると、敵の將軍と、リードは少し緊張感を解いた。

「本当に久しぶりだな。歳を取らぬのも相変わらずらしいな。若く美しいままだ」

「わたしも、お会いしたかったです」

「嘘を付くな。おまえならいつでも私に会いに来られた筈」

「歳月というのは、直に過ぎるものですね。あれから確か…」

「24年だ。長かった。もう忘れたと思っていたが、いきなり現れるとは」

「すみません。今回は貴方の為にでなく、こちらの方の為に」

「ただの使者でないという事だろう。そなたが守る程なら」

「はい。王子です」

「そなたの新しい主あまじと言う訳だな」

「はい。今は」

リードは私のほうへ向き直り、跪いた。

「セウルド様。この方は將軍ザイル様です」

「貴方様が第一王子のセウルド様ですか。お若くしてこの者を味方

につけたとは、なかなか。貴方様のお話を伺いましょう」  
「ありがとうございます」

交渉を終え、味方の陣営に戻る途中ふたりきりの時にちょっと聞いてみた。

「ねえ、リード、煙草はちょっと似合わないと思うけど」

「そうですね」

「美味しいの？」

「苦いだけです。でも、社交術として、お茶やお酒を嗜む程度には必要な時もありますけどね」

城へ戻ると大賑わいになるだろう事は解っていた。酒宴の席でリードを見かけなかった。

空席に料理だけが運ばれてきた。

宴が適当に盛り上がったところで退室した。私がいたら皆が氣を使う。退室したその足でリードを探した。彼は多分魔術室の中だ。

「あれ？いらっしゃい。宴の席はもういいのですか？」

リードは魔術の実験でもしていたのか、一瞬、別の世界から来たみたいにぼんやりとした顔をした。

「リード」

「はい」

「あなたっていったい何歳？」

「さあ、数えた事がないので」

「だって50歳以上の計算になるけど」

「それは？」

「あつ、うん、宴会の食事」

「わざわざ持ってきて頂かなくても、言っただけならば取りに伺ったのに。でも、丁度お腹が空いてきたのでいただきます。セウル様は？」

「私は食べてきたから」

「じゃあ、どうしようかな」

「食べて」

「はい」

「机がいつぱいだね。片付ける？」

「いえ。持ってきます。手伝わなくていいですよ」

彼が私に解るように魔術を使うのを初めて見た。リードが右手を開き、部屋の隅の机を指さす。丸いテーブルがゆっくり近づいてくる。

「動いてる……」

「実は種も仕掛けもあるんですけどね」

テーブルが部屋の真ん中辺りで止まった。

「上にその食事を置いて下さい」

リードが椅子を持ってくる。椅子も魔術で動かさない所がよく解らないけど、あんまり披露したくないらしい。持ってきた料理を包みごと置いて開くとトレイの上に所狭しと皿に盛られた食事が乗っていた。リードはいただきまますと言ってからゆっくり食べ始めた。私も椅子を持ってきて向い側に座り話をした。

「告白したのですか？」

「いえ。まだまだです」

「どうして？」

「一人前の男になってからって思っ」

「良い心がけです」

その後、何度か戦場に赴いた。常にリードが居て、こんなに簡単でいいのかと思う程、事が運んだ。いつの間にか弟に何かあったら私が王になると思われるようになっていて、王宮の片隅の何時でも抜け出せる場所からだんだん奥へと住まいを移動させられていた。

リードはというと、人前に入る事を嫌い、戦地ではいつも鎧甲で姿を隠し後に付いてきていた。

ある時、戦場から帰った私は酷く落ち込んでいた。理由はフィー



ナが嫁に行ってしまったからだった。

「あなた、知っていたんですか？」

「噂は…でも、本当だったとは」

「何とかならないのかな」

「…」

彼は黙り込んでしまった。何か考えているらしかったが、私には何も言っではくれなかった。

数日後の午後、彼がとても急いだ様子で私の食卓に訪れたので、すぐに人払いをした。彼は王宮でも人目を避ける方だったからだ。

「はー。間に合った」

「どうしたんですか？」

「焼き菓子を持ってきました」

「ん？」

焼き菓子の為に息を切らして来たのは何か理由があるのだろうか、それが何なのかすぐには言ってくれないらしい。

「どうしても、食べていただきたくて」

「なんでまた焼き菓子ですか？」

「まあ、食べて下さい」

「はい」

彼が紙に包まれた焼き菓子を机の上に置く。包みを開くと、飾り気がない如何にも家庭的な不揃いな形をした焼き菓子が甘い香りをたてていた。一口食べた。

「味は如何ですか？」

「んー、結構甘めですね。柑橘系の香りがする。この味は多分宮中の者が作ったわけでも無さそうだけど…」

「ええ、あるご婦人に頼んで作っていただいたので」

「誰に？」

「ラスター・バエル士の奥様」

「え？」

口の中一杯に柑橘系の甘酸っぱい香りが広がり涙が流れた。リード

は黙って私を見守った。

「改めて、どうですか？」

「やさしい…味」

「沢山、泣いておいてください。合わせたい人がいます」

言われなくても既に頬も手も、涙でいっぱいだった。

いつまでも泣くのもみつともないので、ほどほどにして、接見用の小部屋に向かった。人に合わせたいと言われたのだし早く用事を終わらせたかった。

私の後を付いてきたリードは部屋に入ると、一人の騎士の横に立った。騎士は跪いて私を向かえた。私は部屋の奥にある椅子へ腰を掛け、リードの言葉を待った。

「これからは、この者が命を投げ出しても、殿下をお守りいたします」

「で？名は」

「騎士。ラスター」

「…ラスター・バエル？」

さつきはフィーナのことで頭が一杯だった。この国でその名を知らぬ者は無かった。名高い騎士。この人がいれば軍は必ず勝つとか。

「ラスター、頼みましたよ」

「はい」

「まって、いきなり…。いや、ラスター、立って下さい」

私はフィーナの夫がどのような男なのか確かめたかった。立ち上がった男は静かで強い目をしていた。

「いかがです？フィーナの旦那様は？」

「ええ。良い目ですね」

「よく覚えていらっしゃった、人を見る時はまず目からと」

「ラスター・バエル、私の護衛を宜しくお願いします」

「お言葉、しかと承りました」

室内で暫くリードと話をしたが、これからリードは忙しくなるので、護衛として自分の代わりに信頼できる人間を紹介したのだと言

った。

「あなたはご自分で判断して、ただ信じればいい。必要とあれば、わたしが人材を準備します。その為に出かけなくてはなりません。どうかお許しを」

騎士バエルはとても頼りになる人望の厚い心がけのよい青年で、なるほど彼の様な騎士になら、フィーナが恋をしても不思議は無かった。私は彼女を幸せにするには、まだまだ世間を知らず、人の心を知らず、至らなかつたのだと、バエルを見るにつけ思う。だから私はこのバエル夫妻の為に、賢い主人になる事を心がけた。それこそがフィーナを幸せにする為に私に与えられた事だと思った。

リードはフィーナの事は何も言わずに立ち去った。暫く会わなかったが、彼は何もかも見通していたのかもしれない。

## 6話 セウルド王子との面会 ー1

ある日、リードが珍しく私の元へ来訪した。

私はこの時既に、王立魔術研究所の研究員であり、何度も戦に行った経験もあった。

研究所の客間で私に来客が待っていると知らされ、誰だろうと思いを巡らせつつ扉を開いた。

刺繍を施した緑色のソファ一用の装飾布を覆った大きめのソファ一にゆったりと腰掛けたリードが居た。

「リード！、お久しぶりです。お元気ですか？」

「ええ、おかげさまで、テュルナス。あなたも元気そうで何より、王立魔術研究所で1、2を争う優秀な研究家と聞き及んでいます、将来は研究所の代表になれそうな勢いだそうですね、戦でも魔術師として相当ご活躍と聞きました」

ひさしぶりに見る彼の笑顔が、相変わらず優しいので、私は嬉しくなった。

「はい、ありがとうございます」

「早速、本題に入りますが、今日、あなたに会いに覗いたのは、ある人に紹介したいと思ってです」

「ある人？ですか？」

「お引き合わせしたいのは、セウルド王子です」

「王子？」

「はい。あなた、王子の直属の魔術師になる気はありませんか？」

「私が、ですか？」

「ええ。あなただからです」

「ですが、勿体ないお話で…」

「勿論、急な申し出ですから、少し考えて頂いて、決めてくれれば良いと思っています」

「はい、確か、セウルド王子と言えば、ラスターがお守りしている

ますよね。先日戦の時に参じました折に少しばかりですが、お声を  
おかけ頂きました」

「ご存じでしたか。そうです。あなたのご学友、ラスター・バエル  
氏が護衛をなさっています」

「リード、どうでしょう。緊張してきてしまいました。私は、ま  
だまだ未熟で、魔導師にもなっていないません。そんな私をお召しにな  
って、ご迷惑をお掛けするのでは無いかと心配です」

「緊張する事はありませんよ。あなたは有能で熱意は誰にも負けな  
い魔術師です。セウルド王子はお優しく立派な方ですよ。面会をさ  
れてから王子付きの魔術師になれるかどうかを決められて構いま  
せん」

今、王宮内では、セウルド王子の弟君で、東の大臣の御孫様に当  
たられる、正妃の王子イスル様が王太子であられる。

一番年下の王子で、西の大臣、グラウダ様の御孫様、キアリル王  
子は、以前は王位継承権を2番目と見られていたが、セウルド王子  
の近年の目覚ましいご活躍に、8年程前、現在の王に気に入られる  
までは小さな領土の一領主でしかなかったグラウダ大臣の未だ幼い  
キアリル王子よりも、セウルド王子を第2継承者とするべきだと後  
押しする貴族達の声が高まっていた。

大まかに言うなら、代々王家に仕えてこられた東の大臣家と、東  
の大臣家に対抗したグラウダ様との権力の二分を嫌う貴族達にとつ  
て、セウルド王子は年齢も一番上でご活躍だと言う事で次期王の継  
承権を主張し、自分達の立場を守る為にやり玉に上げるのには格好  
の方だ。

私は果たして、セウルド王子付きの魔術師になるのが良いのかど  
うか考えた。しかし、昔の学友であるラスターがお仕えしている方  
であることを考えると、きちんと会ってみたいと思った。

その後、リードの友人という事で、リードに付き添ってセウルド  
王子に会った。公式な面会ではなく、王子がリードとお茶をなさる

時に招いて頂いただけだ。

王宮の庭、茶を嗜む為に建てられた六角形の日除け棚の下、明らかにセウルド王子と解る白の上着に金色の刺繍の付いた礼装の方と、紺色で地味ではあるがきつちりとした軍服を着て、子供の頃とは見違える程立派になったラスターが座っていた。リードが王子に一礼し、私もそれに習った。

「セウルド様、お久しぶりです」

「リード、堅苦しい挨拶はしないでいいですよ、そちらが今日、私に会わせたいと言われた方ですか？」

「はい。王立魔術研究所の有望な研究員のテュル・ナスです」

「そうですね、リード、いつまでも頭を下げていないで、テュル・ナス、でしたね。今は私の自由な時間です。堅苦しい事は抜きにして、くつろいで、座ってください。」

リードは日よけのフードが付いた裾の長い

魔術服のフードを肩へ落とし、私と一緒に座るように合図をしながら、王子の向かい側に腰をかけた。

「テュル・ナス、こちらが王子セウルド様です」

「お招き頂いてありがとうございます。テュル・ナス・マルデです」  
リードに習い、礼をして腰を掛けた。

「さつきから、堅苦しい事は抜きにしようと言っているじゃないですか。テュル・ナス、先日のお戦いの活躍ぶり、見届けさせてもらいました。君の魔術をより有効に使う考えにも感銘しました。すぐに私に仕えて欲しいとは言いません。せつかくのリードを通しての縁です。まずはラスターと共に私と友人になってももらえないだろうか？」

「は、あの、友人ですか……」

私は王家の方のお言葉とは思えない友人の申し出をされた事に驚いた。

「ああ、すまぬ、驚かせてしまったな。ラスター、君からも頼んでもらえないか？」

「はい。畏まりました。後ほどで宜しければ」

「ラスター、君も固い言い方をするな、これではテュルナーが緊張してしまうではないか」

と、クスクスと笑うリードの声が聞こえてきた。

「セウルド様、テュルナーが緊張しているのがよくお分かりですね。如何にも、彼は少しばかり人見知りをする人です。ですが、いざの時に彼の判断力は優れております。外見的には大人しく見えませんが、彼は意志の固い人ですよ。それから、テュルナー、王子は幼少の頃、王に成れる身分と扱われて居なかつたので、よく御城下へ出かけられていて、堅苦しい王家らしからぬお人柄です。あまり王家の方で有られることを気になさらず、親しくなさってみては如何ですか？」

「リード有り難い。そういう事だ。遠慮せず私の所へ何時でも来てくれると嬉しい」

「わたしが居ては、ラスターもテュルナーと親しく話し難いでしょう。暫く庭でも散策して参りますテュルナー、折角の機会ですゆつくりと話をして下さい」

リードが立ち上がる姿を見て、少しばかり不安を覚えた私の手に、リードが立ち上がる姿を見て、少しばかり不安を覚えた私の手に、セウルド王子の手が重なった。私は王家の方が一介の魔術師に手をお触れになる事に驚いたが、王子の目は、暖かく、深い慈しみを感じさせ、私は安堵し、思わず笑みを見せていた。

私も魔術を学ぶ者の端くれである。人に触れれば、相手の心の有り様や健康の状態が解る。そうでなければ、癒しの魔術などは使えないので、一応の修行はしているのである。

セウルド様の手から伝わってくるのは、安定した心と、暖かさ、物事があるがまま受け入れる素直さと、前進する事への意欲ある強い心が伝わってくる。私はこの爽やかな心映えに、思わず緊張を溶いていたのだった。

## セウルド王子との面会 2

リードが立ち去る姿を見送ると、ラスターが口を開いた。

「あの人は、相変わらず若いな」

あの人というのは、無論リードの事である。

ラスターは続けた。

「テュルunasが会った時は確か…」

「私が中等部に上がる少し前でしたから、6年程前した」

「俺があの人に出会ったのが、その少し後だから、もう5年にはなるか。俺はその頃15だった。あの時はあの子の落ち着いた雰囲気から5歳位は年が上に見えたが、今見ると、どう見ても10代半ばにしか見えない。外見が若く見えるにしても、あまりにも若すぎる気がするが…」

「私もそう思う。私は彼が、私の教師として最初に来た時から何度も彼を見ているが、全く年をとっている様に見えない。一度年齢を聞いた事が有ったが、答えてもらえなかった」

ラスターと、王子の話しに耳をかたむけながら、彼が魔導騎士リシュエルだという事を話して良いものかどうか悩んだ。

「テュルunas、お前は魔術の専門だろう？若さを保つ魔術というのがあるのか？」

ラスターに聞かれ、言い淀んだ。

「そうですね…。あの方は特別な能力をお持ちでいらっしゃいますから。ただ何というかその、あの方の場合は我々が学んでいる魔術というものとは少しばかり異なるもので…」

「確かに、彼は我々とは少しばかり違うのかもしれない」

王子は、その言葉でこの話をくくった。

あまり彼についての良からぬ噂が広がる事を好まないのだと思われた。

その後、この会見の間に、ラスターも居てくれたお陰か、私はす



っ かり王子と打ち解けていた。

王子のお人柄は好ましく、王子の国の有り様の理想である、戦を減らし、多くの国との盟友関係を結びたいというお考えに夢中になつて聞き入った。この時既に私は王子にお仕えしたいと思い始めていた。

会見の時間はあつという間に感じた。

使者が王子に時間の訪れを伝えに来るまでの時間がなんと短く感じられたことか。

「テュルナス、とても楽しく過ごさせて貰った。是非また、君と話したい。次回は君の考えをもつと聞きたい。遠慮無く私に会いに来てくれ。ラスター久しぶりの級友との再会だろう、私の警護は他の者にさせるから、ゆっくり話したまえ」

そう言つて、責務に戻られる王子のお姿を見送った後、ラスターが耳打ちしてきた。

「テュルナス、お前はリードがリシュエルと知っているんだろう？」

「あなたはご存じでしたか。セウルド様はご存じなのですか？」

「ああ、知っているだろう。ただ、この事は今の所はあまり多くの者に知られないようにしているらしい」

「そうでしょうね。普通の魔導師ならともかく、彼ほどの人となると実像を知られない方が有利に働くことも多いのだと思いますよ」

「そういうものなのか」

「ええ、魔術そのものが、一般には理解し難い不思議な物という認識あつての効果が有るのと同じ事だと思えます」

「ふーむ、成る程な。俺にはよく分からぬがな」

相変わらず戦士らしい彼の言葉に、懐かしさを覚え、知らずと笑顔がこぼれていた。

帰り道、リードにセウルド王子との面会の感想を聞かれ、私は、直ぐにでもお仕えしたい。と言った。

リードは、それはもう少したつてからの方がよい。と言う

「どうしてですか？」

「ええ、それが、わたしの余計な心配でないと良いのですが、この先、数年の間に王位の継承権で一波乱ありそうな気がするのです。

ですから、表立っていない方の力添えも必要ではないかと思っています。もちろん、王家のお家騒動が納まったら、正々堂々と、王子付きの魔術師として、仕えて欲しいと王子もお望みです」

「そうでしたか。私も人前に立たされる立場は苦手ですから、いきなり王子付き魔術師になるよりも、その方が気が楽です」

「そうおっしゃると思っていました」

「リード、あなたには何もかもお見通しのようですね」

「とんでもない、わたしなど。世の中にはもっと長けている方が沢山いらっしますよ」

終始、柔らかい笑みで接してくれる彼の美しい笑顔が心地よかった。

## 7話 王位継承権

私、王子セウルドはここ数年の間に、多くの貴族達から、王位継承権を得るべきだという進言を受けていた。その者達は、西の大臣、北の大臣、そして、その両大臣に意見を同じとする。要するに、新しい政権を望む者達である。

私自身は是非に王になりたいとまで願った事は無かった。

何故ならば、私の弟であり、東の大臣という強力な後ろ盾のある、正妃の子、イルス王子が王位継承権が最も上と誰もが思つて来たし、更には、近年父に気に入られ、娘御を第二妃として、父に差し上げ、大臣となつた東の大臣の姫君の王子キリアルが、私よりも母の位が高いからである。私は、自分が王位継承権を主張する事で、国情が不安定に成るのを望まなかった。

実際には父である現王が、政治に対し全く関与しようとしなくて、誰が次期王と明確な事は言っていない。それが、大臣、貴族達を分裂させているのも事実である。

父王は兼ねての政治は大臣、政治家、貴族達に任せきりである。

先々代の王がご存命の時、父があまりに政治に興味を示さない様子を心配し、ある男にこの国の先行きを助して欲しいと頼み、その男というのが、リードであつた事を、近衛隊の長であるヴォルドーから聞いたのはつい最近の事であつた。

リード、すなわち魔導騎士リシエル。彼が何故、私を気に入り、支援してくれたのか、私には解らぬ事だったが、今思うに、彼は誰の後ろ盾も無いからこそ、私を選んだのではないかと思う。彼が望んでいるのは新しい政治体制なのであろう。

そして、子供の頃より、王位継承権が無いと思われ、特別な扱いも受けず、気が向いた時に何時でも城下へ出かけ、民衆の生活を垣間見てきた私を、善き王に成れるだろうと判断したのでは無いかと

思う。

さて、私のこの所の心配は、王位継承権争いに業を煮やしたグラウダ大臣の動向である。父王に気に入られてからの彼の権勢たるは、まさに飛ぶ鳥をも落とす勢いであるが、父王の衰えにいささかの不安も感じているだろう。

そして、不報が知らされたのも、何も無い事を祈っていた矢先であった。第2王子東の大臣家の王の正妃の息子である、イルス王子が、毒殺されたという物であった。

宮殿内の誰もが騒然となり、緊張が高まった。権力者達の間で多くの噂が飛び交い、明らかな言い争いなどが勃発するようになった。

その事件より、一週間に満たなぬ頃、私の元にミストという青年を伴ったリードが現れた。

「王子、次はあなたの番ですね」

というリードの言葉の意味は深かった。

次に命を狙われるか、はたまた、イルス王子を暗殺を企てた者とされるか、そして、何より、身の潔白を明かすには、王位継承権を得るしか無いのだろうという事なのだ。

わずか数日の間に、私の覚悟は決まっていた。

## 8話 逃亡1

王都に着き、ガレットという名を改めた私ミストは、王都に宿を取り、2日程、王宮内の動向を探ると言って出かけたリードを待った。2日目の昼、リードが宿へ戻り、急ぎ王宮に共に来るようにと私に言った。

「時間がありません。ここからセウルド王子の部屋へ直接空間移動をしましょう、あなたも魔術を学んだのだから、移動魔術と一緒に来て下さい。あなたの力が必要になります。」

細かいことは、その都度支持します。協力してください」

「はい、喜んで。ミスト、いえ、リード」

「では、行きましょう」

魔術で一瞬にして王子の部屋へ着いた私たちに気付いたセウルド王子が振り返った。

「リードか、どうした」

長身で爽やかな青年のセウルド王子は私達が、いきなり現れた事にも驚かない様子を見ると、今までにもリードはこの方法で何度も王子の部屋へ訪れているらしかった。

王子の隣にいる護衛らしき、精悍な顔立ちのよく鍛え上げられた体躯の男は、突然の来訪者に反射的に刀の柄に手をかけていたが、リードを見ると直ぐに刀から手を離れた。

「セウルド様、ラスター、グラウダ大臣の動向を探って来ました。今すぐに、王宮を出て下さい」

「今すぐとは？何が起きている」

王子は爽やかでは有るが、王子らしい毅然とした態度で答えた。

「セウルド様、にイルス様毒殺の嫌疑を掛けようとしている様です。時間がありません。どうか急ぎ、王宮を出られるようお願い致します」

「いかにも、グラウダが考えそうな事だが、しかし、今、逃げたの

では自分が犯人だと言っているのと同じではないのか？私が直接父にあつて、身の証を立てるほうが良いのではないか？」

「いえ、グラウダは既に王子の部屋から、イルス王子を殺したものと同じ毒を手に入れたと申しております。まもなく、王家の兵がこの部屋へあなたを捕らえにやって参りましょう。後の事はわたくしにお任せ下さい」

「しかし、それでは…」

「身の証は生きてこそ立てられるものです。いまは、お辛いとは思いますが、今、捕らえられてしまつては、お命も危ういかと存じます。グラウダは邪魔になる者は徹底的に排除する。そういう男です」  
「解つた、リードを信じよう」

「ミスト、あなたには、私とセウルド様との間の通信の役割をしてもらいます。いいですね」

「わかりました」

「あなたは、取り敢えず王子とラスターと共に此所を出て下さい。そして、王都内のこの地図の場所に、バルヌという青年がいます。その青年にミストが来たと言つて下さい」

「バルヌつて確か」

「そう、あなたが孤児だつた頃同じグループの長の少年だつた人です」

「彼らと会つていたのですか？」

「話すと長くなります。商人ミストと名乗れば一夜二夜位は匿つてくれるでしょう。その間に旅の支度をして、支度ができ次第、西の大神殿へ向かつて下さい。出来ますか？」

「はい」

「セウルド様、ラスター殿、この者はわたしの弟子、ミストです。彼にお供をさせて下さい」

「ミスト殿、宜しく頼む」

「はい、畏まりました」

「それで、リード。どうやってここから抜け出す？グラウダがそこ

まで采配したなら、普通に出かける事はできぬだろう」

「はい、セウルド様その通りですが、王家には地下を通る抜け道と  
いうものが御座います」

「如何にも、抜け道は有るが、それは王座の奥の間にしか戸口がな  
い」

「ご安心を、ただいま、この部屋に出現させます」

そう言うと、リードは部屋の隅に行き、床に星形と、魔術記号を  
書き示した。

星形の図の中央に人が一人通れる程の大きさの穴が開き、階段が  
見えた。

「階段を下りれば地下通路です。この魔術はそう長く持ちません。

さあ、お急ぎ下さい」

「リード、すまぬ」

「いえ、あとはわたしにお任せ下さい。王子のご無事をお祈りして  
おります」

王子が階段を下り始めた。その後ろから、ラスターが長剣を腰か  
ら外し縦に持ち階段を下りる。

「ミスト、王子をお願いしましたよ」

「はい」

私は薄暗い階段を下った。

私達が下る地下道への階段は暗く、どうやら結構長いらしい。私  
は先行きが明るく見えるように、両手の中に小さな明かりを点す魔  
術を使った。地下へ着くと道はさほど狭くなかった。松明があれば  
よく見えるのだが、私の魔術の灯火では少し前を照らす事が出来る  
程度で、王子のご不安はいかばかりかと心配したが、流石、王家の  
方だけり、どちらに向かうかをご存じの様子だった。

足下が明るくないせいで時間がかかってしまったのか、追っ手が  
来る足音と声が聞こえてきていた。

## 8話 逃亡了2（前書き）

前回のあらすじ、セウルド王子の、腹違いの弟イスル王子が毒殺された。

大臣グラウダの策略により、セウルド王子に弟イスル王子殺害の嫌疑がかけられた。

セウルド王子の部屋へ訪れた、魔術の教師リードがセウルド王子を地下道へと逃がした。リードは弟子のミストに王子にお供し逃亡を助けるようにと言った。

セウルド王子、護衛のラスター、ミストの三人は暗い地下道を急いだ。そこにも追っ手が迫っていた。



## 8話 逃亡2

松明を持っているであろう追っ手の足音は我々よりも明らかに速く進んで来ている。

私は何とか出来ないものかと思ったが、魔術で大きな明かりを点す等は未だ出来たことがない。

「いたぞー、あっちだー」

追っ手の兵士らしき男の声が響いた。

走り来る追っ手がこちらからも見えてくる。こんな時リードなら、暗闇で戦う事も出来るだろう、魔術で追っ手を一網打尽にできてしまつのだろう。私は自分の不甲斐なさを身にしみていた。

しかし、悩んでいる暇は無かった。

既に剣を抜いたラスター氏が後ろを振り返りながら、王子を前に急ぎ足で進む、しかし、この足下の悪さと暗さでは、追いつかれてしまつのは間違いない。

何人もの追っ手が近づいてくる。

「王子、先へお進み下さい。此所は私が」

ラスターが後ろを向き、しっかりと足を踏みしめ構える。

「いや、一人で戦うより共に戦った方が効率が良い」

そう言つと、セウルド王子も剣を抜いた。

「あの、セウルド様、わたしに短い方の剣を貸して下さい。私も戦います」

「それは頼もしい、たのむぞ」

「はい」

追っ手が持っている松明のお陰で、足下が明るい。我々は飛びかかってくる追っ手と剣を交えた。

私は、剣で戦うには人数において不利であることから、魔術を使っ

てより多くの追っ手を倒す事に専念した。それでも、私には一人ずつしか倒せない。次々と現れる追っ手に徐々に後退しつつ、不利になっていく。

とうとう、我々は追っ手の兵士達に囲まれる事になった。

その時だった。突然、追っ手の者達が持つている松明が大きく燃え始め、手や体に火が移って、追っ手の兵達が慌て始めた。皆、自分に付いてしまった火を払うのに必死である。

「遅れて申し訳ありません」

「テュルナス」

どうやら、王子のお知り合いの方らしい。

「リードから連絡を受けたので急いで参りました。この先に船があります、急ぎましょう」

こうして、船に乗り、王都の中を通る川を下り、王宮を外から眺めると、騒動など無いかのように静まり、豪奢で優雅なたたずまいに見惚れるばかりだった。

川沿いに下って行き、地図の場所に近い辺りに船を止めた。

「ミスト、この地図の場所は分かるか？」

船を下りて直ぐに王子が口を開いた。

「いえ、私はつい先日まで、人里離れた山暮らしをしておりましたので、王都の地理はよく知りません」

「そうか、では、私が先に進むから、着いてきてくれ」

「またもや、私は何も出来ない。恥ずかしい事だ。」

ラストー氏は王子の横にぴたりと付いて、王子をお守りする事につけている。テュルナスという方は黙って後に従い、私はその後ろを歩いた。

暫く歩くと、木造の建物の前で、王子が止まった。

「どうやら、ここの様だが、この建物は何だ？民家ではなさそうだな」

「私が最初に入って、安全を確認して参ります」

私はやっと自分ができる事が出来て少しばかり嬉しく思いながら、知らぬ建物に訪問する緊張を高めた。

扉を叩くと、少女の声が答えた。

「だれ？」

「私は、ミストという者ですが、お願いがあつて伺いました」

「ちよつと待つてて」

少女がそう言うってから、少し経つと、扉が開いた。そこに立っていたのは顔にそばかすがある青年だ。

「あなたがミスさん？はじめまして。どうぞ中へ入ってください」

「私一人では無いのですが、構いませんか？」

少年は私の後ろに居る三人を見てから、

「ああ、いいよ」

と答えた。

「お兄ちゃんたち、こんばんは」

中へ入ると、先程の声の持ち主らしき、幼い少女が挨拶をしてきた。

建物の中は広く、工具や、縫い物をする道具があちこちに置かれていた。

「えつと、そこら辺に座つて下さい。汚い椅子しかなくてすみません。さつきあなたから手紙を貰ったから待つてました。俺はバル又つて名前です。おい、ミルカ椅子をちよつと綺麗に拭いてくれ」

「はい」

少女は布を持ち、急いで椅子を拭く。

「えつと、俺たちミストさんには凄く感謝してます。あなたが出資してくれて、この職業訓練所を作ってくれたお陰で、俺たちは自分達で稼いでちゃんと食えるようになったし、安心して寝るところも出来た」

「そうですか、それは良かった」

私はリードが彼らの為に何をしてやったのかよく知らない。昔、私が両親を亡くし、住む家も無く、食えることもままならぬ頃、彼

らの仲間に拾われ一緒に過ごしていた。その後、彼らがどう暮らしていたのか考えた事も無かったが、リードは、この建物を買い取り、彼らの生活を援助し、彼らが仕事が出来るように技術を身につけさせる為に、職人を送りこんだのだろう。

細かい事情を知らぬ私は、あまり多くを語らないように気をつけながら話した。

「今日はお願いがあって、こちらに来ました」

「なんでも言ってお下さいよ、おれら、ミストさんの為だったら何でもしますよ」

名前だけで私を支援者と思うのだから、実際に支援者のミストとしてのリードに有ったことがないのだろう。

「すみません、お願いします。所で、私達が此所へ訪れた事は口外しないで欲しいのですが、それをお願い出来ますか？」

「ああ、勿論、今、此所にいるのは俺とミル力だけだから、仲間には黙ってますよ。ミル力！絶対に言わないよな」

「うん、言わない」

「言ったら、口を縫っちゃうからな」

「言わないってば」

「あの、そこまでしなくても、もし、兵隊に捕まってしまったら、素直に言ってお下さい。いいですね」

「わかった。ミル力、お前も分かったな？」

「はい！兵隊につかまっちゃったら、仕方なく言う」

「よし、お前は頭が良い子だ」

「さて、見た所、相当身分が高い人を連れているみたいだけど、俺はそれ以上は聞かない。ミストさん、俺に出来る事は何でも言うてくれ」

私は、馬を人数分と欲し肉などの食料、王子や、如何にもそれと分かる質の良い服を着ている王子とラスター氏の為に目立たない着る物などを頼み、支度ができてすぐに、王都を発った。

## 9話 西の大神殿

私達四人は魔術師のローブを着、フードを深く被り、馬に乗り、王都の門に達した。バルヌの仲間数人が馬を引いてくれている。荷車を引くバルヌの仲間が剣と杖をを荷車に乗せている。

バルヌは門番と顔見知りらしく、明るい笑顔で門番に声を掛けながら通行証を見せる。

「よお、元気かい？」

「なんだ？今日は行商に行くんじゃないのかい？」

「ああ、荷車は売り物だよ。そっちの人たちはさ、魔術師なんだけど、これから東の砦まで行くらしいんだ。丁度行商に行く方向だから、用心棒を頼まれたって訳さあ」

「へえ、ま、気をつけてな」

そんな簡単なやり取りで、王都の門を出た私達は、その後バルヌ達と別れ、西方にある地の大神殿へと向かった。

「ふーむ、問題があるな」

セウルド王子が馬上で口を開いた。

「は？えっと、何か必要な物が足りなかったですか？」

私は何か足りない物があるかと荷物を調べようとした。

「いや、ミスト、君のことではない。バルヌの通行証だけで、私達が門をくぐってしまった事を言っているのだ」

「ああ、その事でしたか、でもそのお陰で無事に王都を出られたのですから」

「そうです。王子、今はそんなことをおっしゃっている場合ではありません。追っ手がこない間に急ぎましょう」

そう言うや、ラスター氏が馬を走らせた。

乗馬があまり得意でなさそうなテュルナス氏が一番後ろを走っていた。

二度馬を変え、四日程後、西の大神殿へ至った。

西の大神殿の石造りの門をくぐり、地の女神の像がある大きな庭で、馬を降りた私達に

神官服を着た女性が声を掛けてきた。

「地の女神の神聖なる地へようこそいらつしやいました。救済をお求めにおいでですか？」

「はい、実は込み入った事情がございまして」

私は、王子をお連れした事をお伝えするべきなのかどうか、迷った。もし、この神殿内に王都の内通者が居ればあつという間に王子を捕らえに来るだろう。リードの支持はただ、西の大神殿へ行けただけだった。

「皆さん、色々な事情をお抱えです。どうぞご遠慮なく神殿へお入り下さい。丁度これより、巫女ルーニア様のお祈りの時間になります。奥の神殿へは入れませんが、今日は月に一度の巫女様が皆様へのお祈りを捧げられる日、一般方の神殿までおいでになります。是非ご参列下さい」

「はい、有り難う御座います」

私は事情を話すのは取り敢えず控え、神殿へ向かった。

大理石の床に多くの人が、大地の女神の像がある祭壇に祈りを捧げる中、私達四人は最後尾に座した。神殿に入る時はフードを頭から下ろすよう言われ、王子の顔を人に見せるのははばかれたが、仕方なかった。

暫く経つと、大太鼓の音が神殿内に響き渡り、神殿内の参拝の人々が一瞬嬉しそうな声を上げ、直ぐに静まり、全員が跪いた。

神殿の太い柱の後ろにあるらしき扉から、この大地の大神殿の巫女であられるルーニア様が使者を伴い、祭壇に現れた。

「皆様方、本日はよく母なる大地の神殿においでくださいました。大地の女神の慈愛を皆様方がお受けに成られますようお祈りいたします」

よく通る澄んだ声の巫女ルーニア様が、そう言つと、皆が両手を

合わせた。

巫女ルーニア様は、後ろを向き、大地の女神の像へ祈りを捧げる。緑色の美しい髪、清浄な巫女らしき声。山育ちの私は、初めて見る巫女様がかくも美しいものかと、惚れ惚れと見ていた。

巫女様の祈りが終わり、神殿から退室され、暫く経つと、神官服の女性が巫女様が私達と話をしたい。と申されていると声をかけられた。

私達はその神官服の女性に付いて巫女ルーニア様の部屋へと誘われた。

巫女ルーニア様の部屋の大きく重たい扉が開かれる。白い机と椅子が置かれた、ルーニア様の来客用私室内は飾られている色とりどりの花の香りが充満していた。

巫女ルーニア様は人払いをなさると、セウルド王子に礼をした。

「セウルド王子様、このような、山奥までおいで頂き、恐悦でございます」

「ルーニア殿、そのように改まって頂いたのでは私の方が気が引ける。どうか、頭を上げて下さい」

「はい、有り難う御座います。この度は、イルス王子様が亡くなられて、さぞ、お心痛みなさっていらっしゃるかと思じます」

「もう、聞き及んでいましたか、こちらの神殿に伺ったのには理由があります」

「わたくしに出来ます事でしたら、なんなりと、お申し付けくださいませ」

「うむ、有り難い。実は、今、私にイルス毒殺の嫌疑が掛けられている。それ故、王都より身を隠して参った。暫くの間、我々をこの大地の神殿に匿ってはもらえぬだろうか？無論、迷惑がかかりそうになったら、直ぐに退散する」

「迷惑などと、今年の新嘗祭に王都へ参じました折には、暖かいお言葉を頂戴して、感激いたしました。どうぞごゆっくりと旅のお疲

れを癒し下さいませ。この奥殿には来客用のお部屋が御座います。

其方をご用意させて頂きました。テュルナーとラスター、それにもうお一方のお供の方のお部屋もご用意させて頂きますわ」

テュルナーとラスターは顔を見合わせた。

「ルーニア様、何故、私共の名前をご存じですか？」

ラスター氏が遠慮がちに口を開いた。

すると、ルーニア様はいたずらでもしている子供のようにクスクスと笑った。

「覚えていらつしやらない？わたしよ、ルウナ」

「ルウナ？ルウナってあのおてんばの、髪が赤い？」

テュルナーが驚いたのか、思わず大きな声を出したらしく、慌てて改まって聞き直した。

「あつ、失礼しました。その、王宮経営学校の人に友達だったルウナですか？」

「ええ、髪の色は、巫女としての能力を得た時に変わってしまいましたけど、そのルウナよ」

「ルウナ！、おお、本当にあのルウナか？そう言えば面影があるなラスター氏はとたんに破顔し懐かしそうに彼女の顔を見た。

「ええ、本当に久しぶりね、新嘗祭の時にセウルド王子様の護衛をなさっているのを見たわ、立派になって、とっても驚いてよ」

「いや！驚くのは俺の方だ、あのおてんばのルウナが大地の女神の巫女様とは」

「ちよつと、ラスター、今は巫女のルーニア様なんだから、あんまり馴れ馴れしい話し方はいけませんよ」

そう言う、テュルナー氏の顔もほころんでいた。



## 10話 拷問

「リード、すまぬ」

「いえ、後の事はわたしにお任せ下さい」

「ミスト、王子を頼みましたよ」

「はい」

リードは三人が地下道の抜け道への階段を降りるのを見届けると、床に書いた魔術の紋を消し、ラスター王子の私室の椅子にゆったりと腰をかけた。

王子を捕らえる様にと、王の命を受けた兵士達の足音が廊下から聞こえてくる。

ドンドンと扉を叩く音が部屋に響いた。

リードはこれと言って答える事も無く、のんびりと椅子に座っていた。

扉を開けて入って来た兵士達は王子がおらず、誰やら分からない魔術師の服を着た男が何者なのかと訝しんだ。

「貴様、何者だ？王子は何処へ行った！」

隊の責任者らしき兵士が大きな声でリードに問うた。

「わたしは、セウルド王子の魔術の教師です。王子はお出かけかと思いますが？」

リードの落ち着き払った態度に腹を立てたのか兵士は更に声を大にして言った。

「なんだと？貴様！さては王子を逃がしたな！」

「これはまた、逃がしたとは異なる仰り様、如何にも、王子がお出かけになられるのをお手伝いを致しましたが、なにか問題でも？」

「セウルド王子にはたった今、イルス王子の毒殺の容疑で、御身を拘束されよとの王の命が下ったばかりだ。貴様知っていて逃がしたのだろう！」

「おや、そうでしたか・それは、存じませんでした」

リードはあからさまに、とぼけている態度を取っていた。

「この男は王子の逃亡を手伝ったと見える。捕らえよ」

隊の責任者らしき兵士は王子に逃げられたという自分の責を軽くしたいのだった。

「それから、そこのお前」

隊の責任者である兵士は荒々しく、近くに居た兵士に声を掛けた。

「はい」

「王子が逃げた事を陛下にご報告しろ」

「はっ、かしこまりました」

兵士の報告にグラウダは王宮から抜け出せる全ての道を探索するように命じた。

リードは、全く抵抗をせず、腕に縄を掛けられ牢へと連れて行かれた。

牢に入れられ暫く経つと、牢屋の窓に白い鳥が飛んできてとまり、美しい声で囀った。ミストからの知らせである。鳥の体に手紙を付ける等という一般的な方法ではない。魔術による、王宮無事脱出の知らせであった。無論、魔術の心得の無い者には理解できない。とまった鳥はリードが見上げた瞬間に一枚の羽となって牢の床にヒラリと落ちた。

その直ぐ後、牢の門番が扉を開け、リードの腕を縛る紐を持ち、拷問部屋へと引っ張った。

拷問部屋、その部屋には、どこことなく血生臭い臭いが漂い、壁には鎖手錠がぶら下がり、壁にも床にも染みが付着してしみこんでいる。部屋に入るだけで気分が悪くなるような雰囲気があった。

拷問長である、黒いローブを着た男が、顎を動かし、二人の拷問係の男が沈黙のまま、リードが着ている魔術師のローブと、シャツをはぎ取り、両腕を壁にぶら下がっている鎖手錠に嵌めた。

そして、何の質問をする事もなく、拷問長は手にした鞭でリードの体を数度打った。

「っ、痛いですね。流石は王宮に雇われるだけの拷問士、鞭の使い方が優れています」

「ふん、誉めてもらって有り難いが、今にそんな口も利けなくなる。さて、お前は、王子を逃亡させた犯人として、王子の行き先きを言うまで、拷問するようにと、グラウダ様のご命令だ。早く言っしまえば楽にしてやるとグラウダ様が温情の言葉まで下さった。鞭などとは如何に楽な拷問だったか思い知る前に、さっさと、王子の居所を言っんだな」

まるで、何かにとりつかれ苛々とした様にリードの前を左右に歩きながら、拷問長が言った。

「例え、大地が裂けようと、わたしは口を割ることはありません」

リードは毅然と答えた。その瞳には鬼気迫るものがあつた。

「生意気な、思い知らせてやる！」

拷問部屋に数え切れない程、鞭の音が鳴り響いた。

## 11話 対峙者

リードはその次の日も、また次の日も、執拗に拷問を受け、朝から夕刻までは拷問部屋、夕方には牢獄へと戻されるという日々を四日間過ごしていた。

朝と晩には野菜の屑等が入った粥状の食事が牢に運ばれて来たが、リードはそれを口にする事も無かった。

四日目の夕刻、食事が配られた後、リードが壁に寄りか掛かり座っている、背中の方の壁から声がした。

「もし、失礼ですが、あなたはという罪状で捕らわれたのですか？」

若い男の丁寧な言葉遣いだ。

「わたしは、キリア王子殺害の嫌疑を掛けられたセウルド王子を逃亡させた罪で捕らえられています」

「そうでしたか。それで王子の居所を聞きだ出す為に、拷問を受けられておられるのですね？」

「ええ」

「相当、酷い目に会われておられる様子ですが、大丈夫ですか？」

「はい、あなた様はご身分のある方とお見受けしました。何故、この牢に？」

「失礼しました。私はゼルクル・ムスクラド

と申します」

「ゼルクル殿？先々代の王より代々政治を司って来られた家系の御当主」

「はい、私は、以前は東の大臣家の一派として働いておりました。しかし、ある夜会の折にセウルド王子と話しをする機会がありました。セウルド王子は、今この国は十分過ぎる領土を持ち、東の大臣がより領土を広げようと戦を続け、それにより西の大臣家が武器を売り、必要以上の利益を得ておられ、その上、陛下に気に入られて

居るのを良いことに、陛下と共に無駄な散財が多い。この国は戦で両親を亡くした子供や、余分に取られる税で苦しむ民で溢れている。このままでは国政は悪くなるばかり。今は、国民が十分な富と教養を得ることに力を入れるべき時だ。とおっしゃった。私はセウルド王子のお考えに感銘を受け、グラウダ大臣と対峙する立場になりました。そして、先日のイルス王子の毒殺事件にグラウダ大臣の関与があるのではないかと、調べていた矢先、道で暴行を受け気を失いました、気がつくとその牢へ投獄されていたのです」

「そうでしたか。そこまでするとは…。それで、調べは、どの程度まで進んでいたのですか？」

「その事です。私の配下の者をイルス王子の側に潜ませておりました。イルス王子が亡くなった直ぐ後、一人の侍女が姿を消しているので、グラウダ大臣の動向を調べさせた所、ある商人から、何かを買ったらしいという所まで調べが付き、その商人も行方が知れないので、追っていた所でした」

「成る程…。つまり。グラウダの考えはこういう事です。王子を捕らえ、証人と侍女を証人にし、国王陛下の前で、王子があなたと結託し、イルス王子を暗殺企てたと証言をさせる」

「恐らく」

「とすると、予定外ではあるが、丁度良く、王子を逃亡させたわたしを、イルス王子の食事に毒を盛った実行犯としたい。そんな所でしょ。王子と共謀した者の人数は多い方がグラウダ大臣にとっては都合が良い」

「そうですね。王子を見方する者を一掃する格好の機会でもあるだろう、被害に合いたく無い者たちは、大人しくなる」

「良いことを、教えて頂きました。ありがとうございます。わたしは、あまり多くを調査する時間が御座いませんでしたので、これで決着を付け安くなりました」

「どうなさるおつもりですか？」

「ご心配には及びません。わたしが全てを片付けます故、もう暫く

のおご辛抱を。わたしは王子の魔術の教師で、名はリードと申します」

翌日、朝から、王子の居場所を聞かれ拷問を受けていたリードの顔に鞭が当たった瞬間、拷問長が慌てたように、

「おい！顔に傷を付けるな」

と言った。言われた拷問士は申し訳なさそうな態度を取った。その様子をリードは見逃さなかった。

「何故？わたしの顔に傷を付けてはいけないのです？」

リードの問いに、拷問長はニヤリと笑って答えた。

「お前は知らんだろうが、グラウダ様は若い男を可愛がるご趣味をお持ちでな」

「可愛がるとは？如何様な事ですか？」

「ふっ、分かんのか？お前の様な若い男の体を弄び、飽きれば捨てるのだ。お前のように希な美形はさぞお好みだろう。あと一週間ばかり経ったら、国王陛下の御前で、誰がイルス王子の殺害犯かの審判会議をする。もちろん、計画者はセウルド王子、そして、王子を逃がしたお前が、直接手を下した犯人に決まるだろう。その後お前は、表向きは再び投獄されるという事になるが、実際はグラウダ様のお相手をする事になるだろうな。お前の敵のグラウダ様から屈辱を受け投獄生活が如何に楽だったか思い知るがいい」

そう言う拷問長は高らかに笑った。しかし、その声と同時にクスクスと笑う声が出た。

その声は、リードのものであった。

「なにが可笑しい！」

拷問長は腹を立てて怒鳴った。

「あなたは、わたしが此所へ来るまで、拷問士としての腕に自信を持っていた。所が、わたしが此所へ来てから、少しばかり違ってきた。わたしが口を割らぬどころか、叫び声の一つさえ上げぬのに腹を立てておいででしたな」

「なにを！」

凶星を指された拷問長は更に怒りの表情をを露わにした。

「わたしが、痛みに声さえ上げなかったのは、あなたが腹を立てて、先程のように無駄な情報を口にするのを待っていたからです」

それではまるで、拷問を受けていたのが自分の様に感じる、あまりに冷静なリードの言葉に憤慨した拷問長は、自分の持てる力の限全てで、この生意気な囚人に鞭を入れようと、鞭を持った手を上げようとした。しかし、何故か腕が動かない。

その時、カチリという音がし、それと共にリードの腕に嵌められていた拘束する鉄の輪が外れた。拷問長は我が目を疑った。

「いつでも外れる物を付けているのは面倒でしたが、お陰で有用な情報が手に入りました。あなたのお陰です。感謝しなくては」

拷問長と他二名の拷問士は、驚き、リードを再び拘束しようと慌てたが、彼らは体を動かす事が出来なかった。どう頑張っても指の一本さえ動かないのだ。

「わたしも、痛い思いをさせて頂いたお陰で少しばかり体力を使いました。あなた方もお疲れでしょう？お礼にゆっくり休める様に楽にして差し上げます」

リードはそう言つと、体を動かす事が出来ない拷問士に軽く口付けをした。リードの口付けを受けた者は一人、また一人と倒れた。

拷問長の前に立ったリードは、にこりと笑った。

「怖がる事はありません。少しばかり、あなたの寿命を頂くだけです。今日のことは忘れ、明日も今日と同じように生活できますよ。それから、この汚らしい拷問部屋へわたしを二度と連れてこないで下さいね」

そう言つと、拷問長の顎を指で支え、恋人に口付けをするかのようにな、拷問長の寿命を奪った。

拷問長が倒れた後、リードの体の傷は何事も無かったのように癒えていた。

ゼルクルは、拷問部屋の鞭の音が止まったのに気付いた。

（まさか、リード殿が力尽きられたのか？）

そう考えていた時であった。牢番が隣の牢扉を開ける音がして、人が牢に入る気配があった。

「リード殿、大丈夫ですか？」

「はい、ご心配を頂き有り難うございます。

新しい情報を入手して参りました。一週間後に、わたし達は裁判を受けるようです」

「一週間後、しかし、セウルド王子は逃げておられるのに、裁判になるのですか？」

「グラウダは業を煮やしたのでしょう。国中に裁判を執り行くと噂を立てれば、王子が現れるであろうと考えたのでしょう、もし、現れなかったとしても、姿を消している商人に、ゼルクル殿が毒を購入したと証言させ、侍女に、わたしが毒を盛るのを見たと言わせれば、王子と縁のある者が動いたという理由で王子を首謀者としてあとから捕らえる事が出来ると考えているのでしょう」

「それは、困った事になったな」

「ええ、ですが、わたしに策があります。お任せを」

リードは床に落ちている鳥の羽を手にとつと、小さな声で呪文を唱え、息を吹きかけた。羽は白い鳥になり、牢の窓から夜の闇へと飛び去っていった。



## 12話 審判会議の一週間前

翌日、ミストの元へ一羽の白い鳥がやって来た。

ミストはその鳥の声を聞き終わると立ち上がり、急ぎ王子の部屋へ向かった。

「王子、たった今、リードより連絡をもらいました。王都へ戻る時が来たようです」

「そうか、それで、リードはどんなのだ？無事でいるのか？」

「はい、その様に伝えられました。一週間後、裁判が行われるそうです。その時に王宮へ戻られるようとの事です」

「裁判と？イスルの暗殺者を皆の前で私だという事にしようとグラウダが企てているという事が…」

「そう連絡を受けております」

「ミスト、ラスターとテュルーナスを呼んで話し合おう」

「はい、呼んで参ります」

セウルド王子、ラスター、テュルーナス、ミストの四人に、巫女ルーニアを交え王都へ向かう策を練った。

牢獄に居るリードは翌日から、拷問部屋へ連れて行かれなくなつた。

ゼルクルは、何故、急にリードが拷問を受けなく成ったのか不思議に思った。

「リード殿、今日は拷問係がきませんな」

「ええ、ときにゼルクル殿、体を綺麗にしたいくなりませんか？」

「それは、まあ、確かに。何日も風呂に入っていないからな」

「そうですねえ。審判会議も近い事ですし、そうしますか」

この牢獄の中で風呂などと、いきなりのリードの提案に何の事かと悩んで居ると、リードが居る牢の方向からカチャリと牢の錠が外れる音がした。

リードは当たり前の様に牢の扉を開け、牢の外へ出た。それを見咎めた牢番がリードの方へ急いでやってくる。

「おい！」

門番が何かを言おうとする間もなく、リードが門番の頭に手を置いた。すると、突然、門番はぼんやりした顔になった。

「すみません、風呂に入って体をさっぱりしたいのですが、私の魔術の教室まで連れて行って頂けます？」

牢番は、ぼんやりとした表情のまま、はいと言ってリードの手に紐をかけた。

「ついでに、隣の牢の方もお願いします」

牢番は言われるまま、ゼルクルの牢を開け、ゼルクルの腕にも紐をかけ、牢からリードの魔術室へと連れて行った。

「リード殿、これは一体どういう事です？」

「わたしも魔術師ですから、この位の事はできます」

「しかし、牢屋には魔術師が入牢する事も考慮に入れて、魔術封印の魔術がかかっている筈だが」

「それでも、王子の魔術の教師を預かる身ですから」

「成程…、普通の魔術師よりも力があるということか」

「わたしの魔術の教室の二階に風呂があります。わたしの部屋へ着くまでは、目立たぬよう、口を閉じていて下さい」

「うむ。そうしよう」

魔術室へ着くと、リードは牢番に室内で待っているようにと言い渡した。

ゼルクルとリードが入浴を済ますと、リードは、清潔そうなフーダの付いた魔術師のローブをきっちりと着込みながら、ゼルクルに声をかけた。

「ゼルクル殿、審判会議の日に、如何にも罪人らしき、汚れた服も

何ですから、あなた様の部屋へ衣類を取りに行って参ります。お部屋はどちらでしたか？」

「そんな事も出来るのか？」

「ええ、まあ、わたし一人でしたら、人目に付くことなく行つてこられますから。お部屋だけ教えて下さい」

「しかし、そんな物を持つて牢に戻る姿を見られては、まずいのではないか？」

「袋にでも入れて、牢番に持たせればよろしいでしょう。わたしも着替えは数枚欲しいですし、お部屋はどちらですか？」

リードはゼルクルの王宮内の私室へ行き、衣類を持つて戻ると、自分の衣類も入る大きな袋に入れ、牢番に持たせた。

それから、自分の魔術師の服になにやら呪文を唱えようと、魔術師の服からリードの顔が生えてきた。

「わたしは、審判会議までに、しなくてはならないことがあります。申し訳ありませんが、この牢番とわたしの影と共に、先にお戻り下さい」

「分かった。君の策を聞きたかったが、君は頼りになる男のようだ。審判会議の日にまた会おう」

リードが牢番に、ゼルクルの腕に紐を掛けて牢に戻るように言うと、牢番は、ぼんやりした表情で言われるままになった。

審判会議の一週間前、国中にあるおふれが出た。王の勅命である。「一週間後。イルス王子の殺害犯を明らかにするべく、審判会議を執り行う。」

セウルド王子はイルス王子殺害の嫌疑を晴らしたくば、審判会議に参列するように」

という内容の看板が国中の街角に立てられていた。

### 13話 審判会議前夜

裁判の日の前日の夜。グラウダ大臣の寢室の扉を叩く音がした。

「なんだ？」

「はい、ドルス・ジェルナー様より、美酒をお届けする様、申し使った者で御座います」

ドルス・ジェルナー。兼ねてより、グラウダの権勢の恩恵に預かるうと、何かと貢ぎ物をしてくる政治家の一人だ。

グラウダはニヤリと笑った。この時間にグラウダの元へ、若い男に美酒を運ばせる意味は一つしかない。

「入れ」

「はい、失礼します」

白く薄い生地の夜着を来た若者が、グラウダの寢室へ入って来た。テーブルの上に、美酒とグラスが乗った盆を置き、グラウダに深々とお辞儀をする。

（ほう、これはまた、黒髪の美形とは、希な贈り物だ。ジェルナーめ、どこからこんな美形を手に入れたのか）

そう思いながら、グラウダは青年にグラスに美酒を注ぐ様にと申しつけ、その優艶なる姿を眺め入った。

グラスに酒を注ぐうら若き青年は、黒く長い艶やかな髪を腰まで下ろし、肌が透ける白い夜着の下は細くしなやかな体つきで、肌はあまり白くはないが肌理細かく、なにより瞳は美しく輝く黒曜石のようだとグラウダは満足の笑みを浮かべ、椅子に深々と腰を落とした。

青年がグラスを手に取り、グラウダの方へと歩いてくる。その顔を更によく観察すると、これほどの美形はそう見たことが無い。

「どうぞ」

グラスを差し出す青年の体からは、甘い芳香がする。

グラウダは思わず青年の腕をグイと引き寄せた。

グラスを落とした青年は、慌てたように「あっ」と声を出す。

「声も良い、そなた、今宵の勤め、分かっておるか？」

「わたくしは、美酒をお届けするよう申し使っただけで……」

青年が言い淀むと、グラウダは青年の顎に手を掛けた。

「今宵の美酒とは、お前の事よ」

「……グラウダさま？」

訳が分からず、困惑した表情の青年がグラウダから離れようと体を引くのを、肩を強く引き寄せたグラウダが無理に口付けた。

と、何故か、グラウダは自分の体がグラリと揺れるような感覚を覚えた。

次の瞬間、スルリと青年の体が離れた。

「グラウダ様、過ぎたお遊びは身を滅ぼします」

言葉使いこそは変わらぬものの、先程のしずしずとした所作と頼りなげな様子を一变させ、不敵にニヤリと笑う青年に、グラウダは何か言おうとしたが、何故か口が利けない。それどころか指の一本も動かないではないか。

「わたしの事をご存じ無いようですね。確かに、この王宮で人目に付かぬ様にしておりましたが、敵の姿も知らぬとは随分と油断されていらつしやる。申し遅れました。わたしの名はリードと申します」

グラウダは驚いて目を大きく見開いたが、その姿に見覚えは全くなかった。セウルド王子の魔術の教師リード。名は知っては居たが、その姿をハッキリと覚えている者は居ないと噂では聞いていた。

しかし、セウルド王子付き魔術の教師リードは、セウルド王子を逃がした犯人として捕らえさせた筈、何故此所にいるのかとグラウダは思いを巡らせた。

「さて、あなたは今、わたしから、魂の一部を取られています。ご存じないでしょうが、この世の中に、魂を奪う魔術などというものはありません。わたしは人外の者です。まあ、この話は置いておきましょう。所詮、聞いたとて、明日には覚えておられぬ事。それよりグラウダ殿、明日の審判会議に発言をして頂きたいと思ひまして、

嘘の証言ではなく、あなたの胸の奥にある真実をお話下さい」

そんな事をする筈がないではないかと心の中で言うグラウダにリードは答えた。

「いいえ、残念ながら、魂の一部を取られた者は嫌でもわたしに逆らえないですよ」

グラウダの頭は突然訪れた窮地に激しく回転した。何故この男が自分の考えが解るのかと訝しみ、人外の者であると聞かされて納得をしながらも、目の前に居る得体のしれぬ魔物に自分が何をされるかわからない恐怖を抱いたのを、またもリードに言い当てられる。

「そんなに脅えなくても大丈夫です。命を全て頂こうという訳ではありません。もっとも、イスル王子を殺害を案じた張本人があなたとなれば処刑されるでしょうけれどね。さてと、明日は忙しいでしょう？ごゆっくりお休み下さい」

そう言い終わると、リードはパチンと指を鳴らした。それと同時にグラウダは意思を失いフラフラと豪華なベッドへ行き、ぱたりと倒れ、深い眠りに落ちた。

## 14話 審判会議の日 1

翌、審判の日。自分の寝室で目が覚めたグラウダ大臣は、夕べ自分が何時床に入ったのか覚えていないのが不思議だったが、テーブルに酒とグラスが有るのを見て、酒を飲んで酔っていたのだろうと考えた。それよりも、今日の審判会議の事の方が気がかりだった。抜かりは無いはずである。

自分が毒薬を買った商人にゼルクルが毒薬を買ったと証言させる。イルス王子の側に侍女として置いていた女に、セウルド王子の魔術の教師が、イルス王子の食事の側をうろついていたと証言させる。セウルド王子と信頼関係を持つ二人がセウルド王子の命を受け、イルス王子の殺害に至ったのだらうという風に話を持って行かれればよい。その為の報酬は商人にも侍女の女にも十分にしておいた。

先週より、イルス王子の殺害犯を審議する貴族会議を開くから、セウルド王子は身の潔白を立てたいのなら、王宮に戻るようにおふれを出させた。おそらく、セウルド王子が現れるであらう。もし、現れないのであれば、自ら犯人であると証明したも同じである。

グラウダ大臣は、審判会議のお膳立てと、事の運び、全て自分が書いたシナリオ通りになるのを楽しみにしていた。

そうなれば、残る王位継承者は自分の孫であるキリアル王子のみ。誰に反対をされる事も無く、自分の孫を王位に就ける事が出来るだろう。後は自分が執権となり、この国は自分の物になったも同然と考えていた。

審判の時間が迫る中、貴族、政治家が次々と審判会議をする大広間に集まってくる。

席が全て埋まると、国王が皆より一段高い場所にある国王の席に座し、審判会議を開くと宣言した。

リードとゼルクルは誰の目にもよく見える、大広間の中央に立た

された。

グラウダの息が掛かっている進行役の男が、ゼルクルとリードに質問をする。

「名を述べよ」

「ゼルクル・ムスクラド」

「リード・マドリッド」

「ゼルクル氏は以前よりセウルド王子と懇意にっていて、セウルド王子が次の王位に就くべきと日頃から皆に話しておりました。ゼルクル氏はイルス王子に盛られた毒物を商人より入手した嫌疑で捕らえて御座います」

もう一人、リードと名乗るセウルド王子の魔術の教師は、イルス王子に毒を盛った実行犯としての嫌疑で捕らえております。この二人は嫌疑を認めておりません」

会場の参列者は全員、ゼルクルとリードに注目していた。

丁度、その頃、王宮の門では、門番達に行く手を阻まれるセウルド王子一行が居た。

「私、王子セウルドは、身の潔白を明かすべく、審判会議に参じた。皆、そこをどき、わたし達を王宮に通せ」

王子セウルドが言ったが、グラウダに捕らえよと命令されていた兵士は、王子達を捕らえようとしていた。兵士の一人が王子を捕らえるべく、足を一步踏み出したが、その兵士の目前に小さな雷が落ちた。テュルナーナスによる、魔術の雷の一閃だった。

「王子に手を掛ける事は私が許しません」

テュルナーナスがきっぱりと言った。

「俺も同じだ。王子を捕らえたくば、俺と剣を交える事を覚悟するのだな」

ラスターが剣を引き抜きながら言った。

王宮に勤める者なら、ラスターの強さは、誰もが知る所である。魔術師とラスターの牽制に兵士達は足を止め迷った。

「先程、王子が申し上げられた事を、お聞き逃しか？王子は身の潔



白を明かしに来られた。もし、王子に罪が無かった時、王子に手を掛けた者がどうなるかわかっているのか？」

ミストの堂々としたその言葉に兵士達はますます迷った。

王宮の門を守る兵士達の責任者が、全員に後ろへ下がるように命令した。

ミストは、責任者に向かって言った。

「王子とわたし達を、審判会議の間へ案内してください」

「畏まりました」

兵士達の見守る中、堂々と審判会議室へ向かう王子は、ミストに小声で話した。

「随分、堂々たる発言だったな、迫力があつた。そこまで、言うかには何かリードから確たる勝ちを知らせられたか？」

「いいえ、何も。ですが、私はリードを信じています」

「師弟の信頼か。成る程、では、私も彼を信じよう」

審判会議室では、商人が、ゼルクルに毒物を売ったと証言をし、グラウダの息が掛かった侍女がセウルド王子の魔術の教師が、イルス王子の配膳の周辺で怪しい動きをしていたと証言を終えたところだった。

グラウダは事の運びが予定通りで有ることに満足していた。

そこへ、一人の使者が入って来て、セウルド王子が現れたと告げた。

もう既に証言は終わっている。後は、セウルド王子と懇意にしている者が関わっていたと一言添えるだけで、セウルド王子は事の首謀者であるとなるであろう。王子がどのように言い訳をしようとも、動かぬ証言が有る限り、セウルド王子がイルス王子を暗殺させたと思われるであろう。丁度よいタイミングで王子が現れた事を内心喜んでいた。

セウルド王子は落ち着いた様子で、審判会議の間へ入室し、王の前に跪いた。

## 14話 審判会議の日 2

セウルド王子は落ち着いた様子で、審判会議の間へ入室し、王の前に跪いた。

「国王陛下、お久しぶりに御座います。私、ソルデュ三世陛下の息子セウルドは、国王陛下の御前にて、身の潔白を証に参上いたしました」

「笑止、たった今、商人と、侍女の証言で、セウルド王子が命でイスル王子を殺害せし、首謀者と、国王陛下も会議の成り行きを見られていた所である。無駄な言い訳などなさらず、真実を語られよ」

グラウダはここぞとばかり、セウルド王子に詰め寄った。

と、その時であつた。

「下らない猿芝居はもうこの辺りで終わりにしませんか？ 本当の事を言うべき人物は他におりましょう」

リードのつぶやきが聞こえてきた。さほど大きな声とも思えぬリードの声は、何故か全員の耳に止まった。

「なんと申すか！ 魔術師風情が」

グラウダは叱咤の声を上げたが、突如、パチーンとリードの指先から発せられた音が会場に響くと共に、体がグラリと傾く感覚を覚えた。

「皆に、言う！」

グラウダは皆にセウルド王子が首謀者であると更に言う為に大きな声を出した。

「イルス王子の殺害を企て、毒物を商人より購入せしは、私、グラウダだ。そして、侍女に命令し、毒を盛らせたのもこの私である！」

貴族、政治家達は、ざわめいた。グラウダは自分の言った言葉が何かの間違いだと慌てふためき、間違えたと言い訳をしようと更に口を開いた。

「それというのも私の孫である、キアリルに、ぐずで頭の悪い国王

が何時まで経っても王位継承権を与えないからだ！イルス王子が死んで、セウルド王子が殺害の犯人となれば、我が孫キアリルが王太子となるは必定、そうなるように計ったのは、私である！」

グラウダは、自分が思っている本当の言葉しか言えない事に驚き戸惑い、口をつぐんだ。

今、審判会議の間に居る全員がグラウダを穴が開くほど見ていた。何故だ？何故こんな事を言ってしまうのだ？グラウダは焦りと苛立ちと怒りで全身が震えた。王は驚きのあまり、顔が青ざめていた。グラウダはその表情を見て更に慌て口を開いた。

「えい、くそっ！おい！その商人、私が毒物をお前から購入し、ゼルクルが買ったと嘘の証言をするよう金をたっぷり与え、証言しなければ、お前の娘を殺すと脅したのを覚えておろう」

商人は驚きながらも「その通りで御座います」と言う。口を開けば開く程、真実を語ってしまう。

もう誰もがセウルド王子を疑う余地は無かった。

国王は兵士に向かって首を立てに振り、グラウダは、王が如何に間抜けで、世間知らずで、如何に自分の言いなりになって操られた馬鹿者かを喚き立てながら、兵士に引きずられ部屋を後にする事になった。

グラウダ大臣が去った審議の間は静まり返っていた。

「陛下、陛下？」

セウルド王子は小声で優しく父を呼んだ。

王であるソルデユ三世は、はっとしたが、未だ信じられぬという表情を浮かべていた。

「ソルデユ三世陛下の御世に栄えあれ！」

セウルド王子は、あまりの驚きに言葉を発せぬ王に機転を利かせ、剣を抜き皆の前で言った。

「ソルデユ三世の御世に栄えあれ！」

セウルド王子の声に呼応するように、全員が声を上げた。

落ち着きを取り戻したのか、ソルデユ三世は立ち上がり、セウル

ド王子に声を掛けた

「セウルド。そなたを疑った父を許してくれるか」

「勿論で御座います。父上」

「皆の者、これより、この国の王太子はセウルドのみとなった。後に王太子立式の祭典をとり行う。皆の者、この後もセウルド王子を頼んだ」

皆が、王の言葉に頭を下げた。

この後、セウルド王子は、王太子となり、

後に国を預かる王へとなり、ゼルクルは東の大臣になった。

## 15話 ナギ

酒と煙草の臭いが充満している。いつもだけど店の中は騒がしい。この村で2軒しかない酒場の、大きい方の店と言う意味の看板はムライチ。ムライチとかいう名前をつけたって店が少しばかり広いつてだけで、木で出来た看板も建物もはつきりぼろくて、表面は少し新しそうにしてあったけど、裏側なんかぼろぼろだ。

今日は休日の前の日だから店は満員で、俺は皿や酒を両手に目一杯抱えて店内を駆け回っていた。9歳位から父親の借金のせいで働くはめになって1年位経った。仕事はもう慣れたので困る事も全然なかった。今日みたいに忙しい日は暇な時より客に絡まれないから助かる。

「はいよっ！おまたせ、この料理は精が付くよ！」

「おー？ナギ、今日も元気がいいな」

客にどうでもいい挨拶だけして次に料理を取りに行こうとした時だった。

酒場の入り口に1人の黒いコートを着た男が入ってきた。

酒場の客のヒューとかなんとか冷やかしの声が聞こえてくる。俺は全員が注目する方を見た。

目立つはずだ。どう見ても異国の格好をしてる。黒くて長い体型が分かり難い上着を着て、顔が見えにくいほど深く帽子を被った背の高い男。俺が男だと思ったのは、他所から来てこういう店に平気で入ってくるのは男に決まってるし、腰にベルトをしていて細長い刀剣をぶら下げていたからだ。

珍しい客は直ぐに酔っ払いの男に絡まれた。

「よお、お嬢ちゃん、それともお姫さまかな？」

下卑た笑いが店中から聞こえる。でも、その男は気にする様子もなく、誰の顔も見ないで答えずに店の中をすたすたと歩いて、立ち塞がる奴はさらりと手で退かした。

なぜか誰もその男に手を出せなかった。俺は忙しく皿やコップを配りながら時々チャリと黒いコートを着た客を見た。

入ってきた珍しい客にからかいがないと知るや、全員が他の話題を探してぐちゃぐちゃと話し始めた。

黒いコートの男は店員に話しかけ、店長が出てきた。暫くは忙しくて見ないで居た。

チャリン！チャラン！チャリン！突然誰もが反応しなくなる音が聞こえてきた。

全員がカウンターの横の丸テーブルを見る。銀貨だ。5枚？いや、10枚か？

黒いコート男の手の中にある袋から惜しげ無く銀貨が掴み出される。無論銀貨を掴みだしているのも黒いコートの男本人だ。

だれもかれも、黙って見守る中、店長のじじ臭いしゃがれ声が響く。

「あの子はよく働くしね」

チャラ。銀貨がもう一枚

「人気もあるんですわ」

金貨が一枚

「気も効くんですよ」

金貨がまた一枚。

黒いコートの男はきつと気に入った女でも居るんだろうけど、店のオヤジはその誰かを褒めると金貨の枚数が増えるからどんどん褒める。

それにしても金の無駄遣いだ。こんな安酒場で金貨なんて馬鹿みたい。

そうやっていくうちに腹を立てたのか、黒い上着の男が袋の口を大きく開いて、金貨を一掴み机の上に乗せた。店長は大喜びで商談は成立したらしい。

その男が俺の方に向き、袋から金貨や銀貨をぽとぽと落としなが

ら近づいてくる。

「え？」

黒い男の後ろでは、金貨や銀貨を拾おうとする人がお互いに重なり合っている。

もう、誰も黒い男の事なんか構わなかった。

俺は近づいてきた男の肩に抱えられた。男は店の扉を開ける前に袋の中身をもう一掴みはぶちまけたので、店は今にも壊れそうなほどの騒ぎで店から出てくる奴は誰も居なかった。しかも、なぜか店に入ってくる人も居ない。

外に出ると俺は男に高く掲げられ馬に乘せられた。鞍の手前にちよこんと座らされ、後ろに黒い上着の男が乗った。

こんな所に見張りもつけないで、よく馬が盗まれなかったと思っ

た。  
馬が走り出す。馬なんて乗ったことも無かったから手近にあった鬘たてがみを掴んだ。暫く経つと慣れてきたので馬の動きに合わせて体を任せた。

村から出てちよつと経った所で馬の歩きが少し緩やかになった。

後ろに居る男に話しかけた。

「ちよつと、どういうつもりだよ？」

「お前を買った」

「で、俺をどうする気」

「育てる」

「あんた馬鹿じゃないのか？俺のオヤジはいくらでも借金つくるし、あんた、払えるのかよ？」

「かまう事は無い。そういう者は誰か頼る相手がいれば何処までも頼る。お前はその父親に未練があるか？」

「あるとか無いとかじゃないだろ。他に生きようが無いんだから」

「遠くへ行けば思いは断ち切れるか？」

「…そんなの先にならなきゃ解らないだろ？」

「出世して父親を助ける事もできる様にも成れるかも知れない。父

親の心がけが変わればだがな」

山に入り川に近い所で馬が止まった。男が馬を降りて俺を地面に下してくれた。男は馬の鞍とか何かを全部外して馬を逃がしてしまった。もったいないって言いたかったけど、今は何も言わない方が良さそうだった。

焚き火の側に座っている若そうな緑色の服を着た男が立ち上がった。黒い上着の男の方へ向かって歩いてきた。この人達はどうやら、ここで寝泊まりしているらしい。旅の異国人という事だろう。さっき金貨を出していたんだから金が無いつて事も無さそうだけど宿を取らないでいるのは、なにか訳があるのかも知れない。

「何処に行つてたんですか！みす……」

歩き出した黒い上着の男がちょっと俺の方を振り返った。もう一人の男が俺が居る事に気が付いたらしい。

「えー？ちよつとお、どこから子供なんか連れてきたんですか？」

なんかつて言われたつてこつちだつて事情がよくわからないのに、黒い男が緑色の服を着た青年に耳打ちしている。どう見ても緑色のほうが背が高い。黒い方は火の側へ行つた。緑色が近づいてくる。「あー、ええつと、こんばんは」

緑色の服の男を見上げた。金色の髪に薄緑の瞳。なんか人の良さそうな奴。

「私は、その……名前はミスト？かな？」

？自分の名前で悩むつて無いと思うけど、変な人。

「君は？なんていうの？名前」

「ナギ。あいつ……だれ？」

黒い上着の男が火の側で帽子を取った。黒く長い髪。女みたいに綺麗な顔。

「あー、うんとね」

「あいつに連れてこられたんだ」



「あの人はちょっと変わり者っていうか、難しい人だから気にしないでいいよ。君、お父さんとかお母さんとかいる？家で心配してない？」

「ああ、飲んだくれの博打好きの馬鹿オヤジがいるけど、だから何？」

ミストという金色の髪の男は少しホツとした顔をした。

「帰った方がいいのかな？」

「さあ」

「どうして連れて来られたかわかる？」

「金で買われたんだろ？」

「え？うそ！ちょっと、リード！あつ、どっか行った」

「向うの木の後ろに隠れたよ」

「はー。もう。で？名前なんだっけ？」

「ナギ」

「ナギ、宜しくね。なにか飲み物を持ってくるからちょっと待っててね」

金色の髪の奴は忙しそうにうろろして、お茶を持ってきた。

「どう？かな。これ、飲みにくい？」

「お茶？」

「そんなところだけど、お酒は入ってないよ。火の側に座ろうか？」

「いいけど、俺、どうなる訳？」

「大丈夫。心配しなくていいよ」

「俺、真面目に働くし。嘘とかもつかないし、えっと、それで食べて行かれる？」

「うん。子供らしい質問だね。俺はね、親が居なかったけどあの手に拾われてこの通り元気に育ったよ。だから心配しないで火の側においで、火の側の方が安全だから」

へえ、この人いいひとっぱい。いざとなったら逃げればいいし。なんとかなりそう。

俺は焚き火の側に腰を掛けた。

「そこに居るのは分ってるから、いい加減出てきたら？お茶、入れましたから」

木の陰からさっきの男が出て来て火から少し離れた所に座って足を組んだ。

「はい、リード、お茶。ナギくんは？美味しい？」

黒い髪のお茶を渡してから俺に聞いてきた。

「うん、でも酔っ払っちゃいそうな味がする」

「ごめん。急だったから子供向けの味に出来なくて。お酒は入ってないから安心して」

「俺、こういう仕事したらいいのかな？」

「それは後でにして、今日は何か消化に良いものを食べて寝ようね」  
「なんか、変なの。だって、見たこともない子供に食事を与えるのもどうなんだよ？」

「あなたっ、ちょっと無責任でしょ。どうするんですか？それにお金、散財して。旅はこれからなんでしょ？」

ミストがちょっとふてくされたように話している。俺に話しかけてるんじゃない。黒髪の男にだ。ああ、みたいな返事が聞こえた。

黒髪の男は、どうやらあまり話すのが好きじゃないらしい。

よく見ると、黒い髪のお茶は体が細くて、年齢は俺より歳は上だろうけど、ミストと変わらない気がする。

どっちが偉いんだか分らないけど。よくしゃべる人と黙ってる男だ。

暖かいおかゆみたいな食べ物をミストって人からもらった。美味しかった。で、すぐに天幕みたいな布の部屋へ入った。ミストに「子供は、夜寝ないと、ちゃんと育たないから」と言われて天幕の下へ押しやられた感じだった。折りたたみ布団に包つて横になった。1年以上も昼間は寝て夜働いていたから、夜にぐっすり寝られるわけが無かった。

いつの間に寝ていたのか、うつすらしたばやけた感じの夢かなん

かを見たのかもしれない。

外から声がしてる…気がする

「だから、旅費はどうにかしますから。あの子を育ててください」  
「ちよっと、リード、あなたのお世話だって忙しいのに、どうやって」

「わたしはいいです」

「いいって言ったって、お金なんかどうやって稼ぐ気ですか！また危ない事でもしようと思ってません？」

「適当に調達しますから。それよりあの子、お願い」

「だめです」

「そんな事言わないで。そうだ、あなた、そろそろ」

「なんですか！」

「魔術とか、教えてもいいかな…」

「え？ほんと？」

「ええ、あの子を良い子に育ててくれたら」

「それって、すごい遠回りですけど」

「それなりに価値のある子です」

「じゃなくて」

「あの子の髪の色、あの方に似てると思って」

「まさか、それだけの理由で連れて来たんじゃないでしょうね。他には？」

「酒場の店長が、よく働くし気も利くし人気もあると言っていたし。あとは…元気も良いしとにかく良い事だらけなので」

「それって相手の良いようにお金を差し出したって事ですよね」

「それとバランス感覚はいいですね。あと、もうひとつ、多分あの子は特別な能力を持っているんじゃないかな…。ミスト、あの子を面倒見ている間は遠慮なく魔術を使ってくれていい。その方があなたも練習になるでしょ？うまくいけば早くに教えられます」

「やります。やらせて下さい」

「というわけでそろそろ寝てください。わたしが火の番をする時間

です」

天幕の中に金髪の青年が入ってきた。折りたたみ布団を開けて潜り込んでいるらしい。

俺は目が覚めたけどじっとしていた。そのうち寝息が聞こえてきた。

このミストという人はなんか安心する。寝息を聞いているうちに眠ってしまった。

次の日、朝ミストに起こされて着替えを渡された。焚き火の前で朝食を食べながら辺りを見回したけど、ミストの他には誰も居なかった。

「今日から君の世話をさせてもらうことになったから、よろしくね。私の事は呼び捨てでいいよ。今日は昼間は寝ないで夜寝て。食事も準備するから遠慮なく食べて下さい。あとは、そうだな、2、3日は気楽に過ごしてね。会いたい人がいたら村につれて行ってあげるから心配しないで何でも言ってください」

背の高い青年はにこやかに言った。

「俺、働く」

「いいから。そうだな、お願いがあるんだけど、いい？」

「なんでも言つてよ。おれ、…器用だから」

器用っていうのは酒場の店長が言ったことを真似しただけだけど。「んー。じゃあ、まず、言葉かな。それと、一緒に洗濯しようか？」  
なんか、どっちが世話するんだろう？まあいいか、仕事がないのもまずい。

洗濯を手伝いながら敬語っていうのを教えられた。リードつていう昨日の黒髪の男の前では出来るだけぼくか私つて言ったほうがいいとか、うんじゃなくて「はい」とか「です」とか「ます」とか？声にしてみたけど慣れないな。

それにしても、ミストはよくしゃべる。彼の言葉をよく聞いてれ

ばなんとかなるかも。

多分だけどリードって人の方が偉いんだろうな。

数日間、ミストの手伝いをしながら沢山休んだ。その後はミストに連れられて村に行って衣類を買ってもらって、友達に会いに広場へ行った。

同じ歳頃の知ってる奴らはみんな働きに出ていた。年下の子達が集まって話しかけてくる。

「ナギー」

「ねえねえ、ナギって本当はお金持ちの子供だったって、ほんとのこと？」「ナギく膝すりむいちゃったー」「ちがうよ。ナギはね、悪い奴に連れて行かれるんだって、だれかが言ってたもん」「え？そうなの？」「ばーか、そんなの嘘に決まってるだろ？」「きのう金貨、拾ったって」「酒場で身売りだとかいってたけど」

あーもう、うるさいなあ。小さい子たちって騒がしくてたまらない。大人の騒がしいよりいいけど、とにかく声がよく響く。だから大丈夫だよ。って笑ってやった。それから、年が上の奴らに元気だって伝えるように頼んでおいた。

帰りの馬上でミストが話しかけてくる。

「ほんとだ、君バランス感覚いいね。君って人気あるんですね」

「仲間の間ではね」

「謙遜しちゃって」

「けんそん？って何？」

「うーん、いい所をついてくるね。なんていうのかな？可愛いって事かな」

「あんだ、そっちの趣味ないよな」

「なに？」

「わからないのか？なら、いいよ」

「気になるー！」

「子供好きの…へんな事する人みたいな」

「え？なにそれ？普通は子供って大切にするけど」  
「やっぱり分らないらしい。この人って育ちがいいんだろうな。」

数日休んだ後からは、細い木の棒でチャンバラをしたり、木登りをしたり、毎日遊んで暮らしてるみたいな生活だった。気が引けたからミストの手伝いを一生懸命にやった。言われた事もきちんと聞いた。

リードっていう人は、食料とか旅費とかの調達に行ってるってミストから聞いた。

たまに、リードをみかけたけど、向こうは遠くから見ていらしくて、話し掛けられたりもしなかった。ミストは爽やかで優しい人だから一緒にいるのが楽しかった。

何週間かして、明け方話し声が聞こえた

「もう、剣も持たせてますし、馬も乗れるし、順調です」

「そう。ありがとう。明後日には此处を発ちます。支度してください」

「そう思っで少しずつ遠出できるようにしてきました、ナギにも手伝って貰ったから、いつでもいいですよ」

「いろいろすみません」

この人たちの会話だと、どっちが偉いのか本当に分らなくなる。

「リード、あなたは？同行するの？」

「ええ、まあ…起きたかな？また後で」

なんで起き上がったのが分るの？何者なんだろう。俺を育ててどうするつもりなんだろう？そんな事は聞けないまま、旅に出るらしいかった。

次の山まで馬に乗ってゆっくり移動した。ミストはずっと俺に気を使ってくれた。

山で狩を教えて貰った。ミストには数えきれないほど色々してもらって、なんでも教えて貰った。リードは付かず離れずだったけど、

ミストとはいつも連絡をとっているらしかった。  
どうしても気になってリードの事をそれとなく聞いたけど、あまり答えてもらえなかった。

ある日、昼間に薪とか山菜を探しにミストと出かけた時。ミストが俺の体を制した。

「さがって」

「え？」

「いいから。後ろへ」

ミストの声が真剣だったので言われた通りにすると、わけのわからない動物が姿を現した。

なにこれ……。怪獣？見たことも無い生き物だ。二本足ででかい。いや、ミストと同じくらいか。

「剣を抜いて構えていて。そのまま動かないで」

ミストが低い声で言った。黙って言われた通りにするしかない。後ろから声がした。いつの間に来たのか、リードが立っていた。

「その子にやらせなさい」

「でも、普通の生き物じゃない！」

「ガレット。彼にやらせるんです」

「……」

俺は太刀を構えた。気持ちを落ち着けて生き物を睨んだ。なんでもいい。必ずしとめる。

生き物の目が俺を捕らえる。向かってきた。動きが遅い。だったら、こっちに分がある。

思い切って太刀を振り上げながら走った。なんだか声を出してたかもしれない。

一太刀は浴びせた筈。振り返って生き物の背中を見る。尻尾がある。掴もうとする。尻尾の力で吹き飛ばされる。安全な

地面を回転し、向き直って突く。青い返り血。化け物は怒ったらしい。どっかんどっかん足を鳴らす。今だ！突く。だめだ。もっと深く！

化け物の体に刺さった剣が抜けなくて、足を掛ける。ここで手を放したらおしまいだ。

後方から、槍を渡された。受け取りながらそのまま後ろに飛び距離を置いた。

斜めに振り、偶然敵の足の指を刺した後、「しゃがめ！」と言う声にすなおに体を下へ沈めながら化け物の足から槍を抜いた。

強風が背中の方から吹いてくる後方からの黒い影が目の前を覆った。俺は態勢を立て直した。

大きな鳴き声を聞いた。次に俺の目に映ったのは、目に怪我をした生き物。とどめだ。

倒れそうな勢いの化け物に槍を深く突き立てる。

サーという音を立てて生き物の体が青い塵になっていく。

いつでも攻撃できるように構え動かないで見つめた。

「お疲れ様。もう大丈夫ですよ」

ミストの優しい声を聞き、気がゆるんだ俺は、少しの間気を失った。

「うーん、槍はよく解ってないな。でも初めてとは思えない判断力だ。それに、追い風をありがと。よくやったねガレット」

「っていうか、あなたがもうちょっと魔術でなんとかかすと思ったのに」

「習うより慣れろっていうでしょ？」

まじゆっ？なんだろう？前に聞いた気がする。

「気が付いたみたいですね」

目を開くと黒い皮の鎧を着て長い髪を後ろへ束ねたリードが俺から離れた。無表情なリード…。その横のミストが心配そうに覗き込



んでいる。

「怪我はないみたいですよ。起き上がれる？」

ミストが優しく話しかけてきた。

「あっ、うん」

「ゆっくり。痛いところが無いか確認して」

「はい」

痛いところが無いので起き上がった。

後姿のリードが歩き出す。

「まって！」

立ち止まる。

「あの」

一瞬、リードが笑った気がした。振り向いた綺麗な横顔はいつもと同じ様に表情がない。

「まだまだです」

瞬き。

「頑張つて」

無表情で冷たい声。この人は強い人なんだ。そして俺には厳しい。立ち去っていく後姿を見ていたらミストに遮られた。

「よく出来ました。がんばったね」

清々しい笑顔、しっかりした明るい緑色の輝く瞳。肩下まである金色の柔らかそうな髪。あなたが居て良かった。

夕食を食べながらミストがリードのことを話す。

「あの人はね、君の寝顔を見ては、良い顔だつて言ってますよ。それと、心配してた。自分は間違つてなかったかって何度も聞かれたし」

「嘘でしょ？」

「今にわかるつて。あの人の優しさが」

「絶対優しくない」

「じゃあ、私も優しく無いって事になっちゃうな。だって今の名前、

彼が使ってたものだから」

「え？ そうなの？ なんか似合わない気がする」

「そんなこと無かったよ。私には凄く優しい笑顔を見せる人だよ」

「信じられない…。あの人の前で俺って言うの止めてみようかな。ぼくにするかな？」

「あ、良い子だ」

「やめるの、やめようかな」

「まあ、その時その時でね」

「あなたっていい加減ですね」

「あはは」

穏やかに明るい声で笑う、俺はこの人の笑顔が好きだ。

翌朝、野菜が入った籠に大きめの卵が乗っていた。

「今日は卵も食べるんですか？」

「え？ 卵？ あれ…これって、怪獣の…」

「怪獣？」

「昨日の…」

「えー？」

思わず剣の柄に手を置いた。

「いえ。というより、昨日の怪獣はこの卵の幻影ですね。これって、怪獣じゃなくて、何て言うか、鳥というか、竜の卵だと思うけど。

私も初めて見るな」

「食べないんですか？」

「食べ物じゃないから。君の事を気に入って付いて来たんでしょうね」

卵が歩き回る訳ないと思ったけど、本とかで勉強してるミストが言うならそうなのかも知れなかった。

「これは、私は触れないから、ナギが持ってみて」

「はい」

「そっと」

手を伸ばした。パカッ！

「あっ」

「生まれちゃったね」

ちっちゃい。卵は大きいのに小さいのが手の上に乗ってきた

「なにこれ」

雛を見つめながら、ちょっと可愛いかと思った。

「雛でしょ？」

俺の掌の上で禿げた雛がピョッ！と声を上げた。

「かわいいかも」

「じゃあその子はナギが育てるといいよ。リードに見せないでね」

「内緒なの？」

「そうだね。あの人は色々うるさいから」

「エサは何を上げればいいのかね」

「多分、虫かお肉でしょうね」

「ふーん」

試しに干し肉をちぎってよく咬んで与えた。食べるみたいだ。

その日から懷に雛をしまつて歩いた。干し肉とか魚を与えた。雛

はよく食べ、どんどん成長して、俺は雛を育てる為にせっせと狩をした。

数ヶ月後、海に向かった。異国へ行くらしいので覚悟をした。

## 16話 竜の名

海に向かう道中のある夜、俺が火の番をしていると、珍しくリードが火の側に来た。リードと会うのは一週間ぶりだった。会ったと言っても言葉を交わすことなどあまり無かった。

リードは以前見た黒い皮の鎧を着て、火の向こう側に立った。俺は石に腰掛けたまま彼の姿を見上げた。

リードは俺の懐の辺りを見た。気付いたらしい。俺は竜を飼っている。飼っているというのは正しくない。竜と友達だし話ができる。小さい雛だった竜の子供は、今はだいぶ大きくなっていた。竜は姿を変える能力がある。普段は小鳥の様な大きさだけど、実は既に馬よりも大きい。空を自由に飛ぶ雌の竜。

「あつ、これ：鳥を飼ってるんです。駄目ですか？」

「いや、動物を可愛がるのは構わない」

交わしたのはその言葉だけだった。リードは自分の懐から細い葉巻を出し、焚き火の枝を取って火を点けた。煙が流れてくる。

「あつ！ちよつと！リード。子どもの前で葉巻はいけません！」

リードの存在に気付いたミストが天幕から出て来た。

「試しただけだ」

「その手はこの子には効かないでしょ。解ってるんじゃないのかな？」

「確かに。無駄でした」

何のことだかさっぱり解らない会話だった。

後でミストに聞いたら、リード特有の自分の姿を誤魔化す魔術だったらしい。

海に出るまで毎日、竜を元の大きさ、つまり馬より大きい体に戻す時間を作って、自由に飛ばしてやつたり、背中に乗ったりして空を飛び回っていた。

海に出るとミストは大はしゃぎだった。リードは浜辺で黙って俺たちを見守っているようだった。

「凄い！水だらけ」

「海、見たこと無いの？」

「湖ならあるんですけど。これって何処まで水があるんですか？」

「遠くまでだよ」

「だって向こう岸がみえない」

「だから、ずーっと海なの」

後ろからクスクスと笑う声が聞こえた。それまでリードの笑い声なんて一度も聞いたことが無かった。初めて聞いたリードの笑い声は信じられないくらい可愛らしいものだった。

船に乗ってからは、ミストが船宵いで大変だった。俺も船は初めてだったけど、すぐに慣れた。とにかく、ミストには船から身を乗り出して海面を覗き込まないようにつて何度も言った。

ミストが船の生活に大分慣れた頃、晴れた昼間だった。甲板に立ち、緑色の瞳を輝かせながら海を見るミストが、うつとりした声で隣に立っている俺に言う。

「綺麗ですね。こう…なんて言うか、波に光が反射して、でも夜はまだ怖いかな」

「夜は寝るからいいんです」

「ですねえ」

なんでもない会話だけどミストが言い表せない程感動しているのがよく分った。

「でも退屈だな」

「そうですね？幾ら見ても飽きないけど」

彼の瞳に海がどう映っているのかは俺には想像も出来ないけど、とにかく機嫌が良かった。

俺はというと、これからどんな所へ行くのかという事ばかりが気になった。知らない国。言葉は通じないだろう。ミストとリードが俺に聞かれたくない相談を異国の言葉で交わすのを何度も聞いたし、

ミストから少しその言葉を教えてもらっていたので、所々理解できるようにはなっていたけど、考え方とかお金の価値とかちゃんと付いていけるのかな？覚えられるのだろうか？今までは殆どミストと二人きりで過ごしてきたから問題なかったけど。ミストは一緒にいてくれるのかな？いざとなったら竜に乗って何時でも故郷に帰れるのが唯一の救いだった。

船内の狭い個室の中で異国の言葉が交わされていた。

「だからって、このままってというのは困ります」

「何故？」

「あなたは戦いに出て、私を放っておけば良いかもしれない。でも、私だって何かできるでしょ？」

「ですから、ナギの面倒を見ていれば良い」

「ナギは直に成長します。今のままで行けばあつという間に自立するでしょう。そうなった時、私は？また、貴方をただ待っているだけですか？私は女性ではないです。いまどきは女性だって戦士になっている人も居ると聞きます。それに万が一、貴方が戦に倒れたとき、私は何も知らされずに帰ってこない貴方を待ち続けるんですか？」

「あなたなら魔術でそのくらいの事は分るでしょう」

「わかったとしても、それから？どうやって生きると言っんですか？」

「わたしの財産で問題はない」

「そんな事を言っている訳ではないでしょう？何か仕事があればそれに生きがいを見つけることも出来ます。でも、何も無かったら、貴方の為に働けなかった事や貴方を守れなかった事を悔やみ、泣いて暮らすんですか？」

「ガレット…どうやら、わたしは自分の事しか考えて居なかったようです。解りました」「じゃあ、これからは戦場に連れて行って貰えますね」

「それは…」

「どうなんですか」

「あなたには…戦いは似合いません」

「そんな！」

「暫く考えさせて下さい。王宮に着くまでにはなんとかしますから」

「おねがいしましたよ」

「あの小さかったガレットがここまで言うようになるとは思いませんでした」

波の音、小さな明かり。ゆりかごの様に揺れる船の中。眠りにおちて行った。

北へ向かうほど気温が下がる。新しい大地に着くまで、少しずつ体が寒さに慣れていく。

俺が足を踏み入れた大陸は、俺が育った島より寒い。船が離れていく。活気のある漁村。見ると人々は金色や茶色の髪が多く、たまに、俺と似た灰色っぽい髪の色をした人も居た。俺の髪はもう少し色が薄くて、銀色っぽい。俺と同じ銀色の瞳はあまりいないらしいかった。ミストがいうには、俺の母親あたりが此处よりも、もっと北の方の人ではないかということだったが、飲んだくれの父親の事以外には何も知らなかったし、自分の歳が本当は何歳なのかもよく知らない。飲んだくれの父親とはまともな話もしたことが無かったからだ。

俺の故郷では黒い髪の人が殆どで、そういう意味ではリードが一番目立たないはずだったけど今は逆だ。俺やミストの方が目立たない。

リードは船を下りるとすぐに姿を消した。

「寒くないですか？」

「うん。ちょっとだけ」

「暖かい服を買い足しましょうね」

「うん」

「このお店で暖かいものでも食べましょうか」

「食べる！」

知らない土地に来た不安の中、ミストの心遣いが嬉しくてそれだけでも心が温まる思いだった。

それから暫くは徒歩で移動した。

人里を離れた崖の上で久しぶりに竜を自由に飛ばした。ミストには竜が言葉を使える事も、俺が乗って飛んでいる事も話してあった。海が見える崖の上で竜のヴェルダが言い出した。

「このずっと先に湖がある」

「行ってみる？」

「人の足では追いつけないから、ナギの連れも乗せて上げてもいいわよ」

「だってミストは乗ったこと無いんだから、落ちないかな」

「ゆっくり飛ぶから心配しないで」

「本当？じゃあ呼んでくる」

ミストは何度かヴェルダを見てはいるが、紹介するのは初めてだった。

ミストはヴェルダを見て微笑んだ後、彼女の周りを遠回りにゆっくり一周した。正面に向き直りお辞儀をする。

「はじめまして、私はミストと言います」

「おい。挨拶しろよ？俺の先生なんだぞ」

「そうしたいけど無理よ」

「なんで？」

「だってこの人には聞こえないもの」

「え？」

「私の声って聞こえる人にしか聞こえないの」

「……えっと。ミスト？何も聞こえない？」

「はい？」



「分ったでしょ。そういう事」

「この子、ヴェルダって言って、女の子だ。まだ大人じゃないけどもう自分で狩も出来るし結構飛べる。で、これから少し彼女の背中に乗ってみない？」

「いいのですか？」

「うん。彼女がiiiって。湖に行くから一緒に乗る？」

「ええ、ぜひ」

緑の瞳が煌めく。ほんとに生き生きしていて心が綺麗な人だ。

ミストが竜の背に昇った。俺は前に乗る。

「飛ぶから俺にしっかり捉まって」

「はい」

「いいかしら？」

「ああ。いいぜ」

羽ばたき舞い上がるヴェルダの頭のふさふさの毛が太陽の光に白く輝き、風になびく。空に弧を描き頭の向きを変える。

「ミスト大丈夫？」

「はい」

ミストはやつと答えた風だった。ヴェルダはミストを落とさないように注意深くゆっくり空を進む。俺だけが乗ってるときは多少乱暴に飛んでも大丈夫だから今は彼女も相当気を使ってるのだろう。

「高いですね」

少し慣れたのかミストが話した。

「低い方です」

「気持ち良い」

「これで高いですって？地を這う者って不便そうね」

いまミストとヴェルダが直接話せたら、どんな会話になるんだろう。

しばらく飛んで湖に着いた。

ヴェルダは羽根を休めている。

「ここって…」

「ん？」

「以前住んでいた所です」

「そうなんだ」

「なんか…ちよつと前まで住んでいたのに懐かしい気がします」

その言葉が終わったと同時に。突然、陽射しが遮られた。空には暗雲が集まり、湖の中が波打つ。

嵐？違う。湖の中とその上空だけだ。

ジャバジャバと波が逆立って、太い緑色の柱がうねりながら伸びる。それもちよつと違う。生き物だ。相当大きい。

「我を起こすのは誰か」

上のほうから太く大きな声。高さはとにかく高い。多分それでも全身が見えたという事でも無いだろう。

「ナギ！下がって」

「いや。こいつは…。ミスト、今、彼の言葉聞こえた？」

「鳴声なら」

「竜だね」

「…これは…」

後ろから聞き覚えのある声がした。

「リード、竜らしいですが、どうします？」

「俺に任せて」

リードが何時どうやって来たのなんて考える暇も無かった。どう話せばこの大きな竜を納得させられるか、しか考えていない。竜は難しい気質だ。気に入った者にしか友好的じゃない。俺はふたりに後ろへ下がるように手で合図して、竜の方へ進み話しかけた。

「俺はナギ、この中であんたと話せるのは俺だけだ」

「こわっぱめ。我の安らぎを壊したのはお前だな。そなたたちまとめて壊してやる」

だめだ。話しにならない。戦うしかないのだ。

「ヴェルダ、あれの頭まで行きたい」

「任せて」

俺は急いでヴェルダに乗った。ヴェルダは宙に浮かび、少し離れてから勢いを付けて急上昇する。俺は頭に角がある緑色の竜に飛び降りた。頭も体も鱗が多い。なんとか、緑の竜の頭に飛び乗った。ヴェルダは殆どが毛で覆われているので掴みやすいが、この竜は偉く足元が滑る。角に捉まった。

実際に触ると、その竜の考えが直に伝わって来た。

「リード」

私はナギが緑色の竜に飛び乗ったらしいのを見上げながら、横にいるリードにこの生き物が何者なのか、自分は何をしたらいいのか聞いたかったがリードの黒い瞳は緑色の生き物を見つめている。敵を前にするといつもは凜として口の端が上がる彼にしては珍しく、唇を薄く開いていた。彼にもよくわからないのだ。

この緑色の鱗だらけの、蛇の大きな生き物は何処から来たと言うのか。私は子供のころから少し前までこの湖の近くに住んでいたというのに噂すら聞いたことがない。

これもナギの能力のなせる業か？彼が無意識に緑色の竜を呼び起こしたのだろうか？

私は高く舞い上がるヴェルダの姿を見ながらナギの事が心配でたまらなかった。

高すぎてよく見えない。雲と複数の小さな雷、水しぶき。もう少し明るければ。

リードは口を閉じ、ただ、静かに見守っている。彼にはナギの様子が見えるのだろうか？

ヴェルダが緑色の竜から少しはなれた所を飛び回っている。

考えないで感じる事。それだけがこの竜と戦う方法。俺が頭に乗

ったのを怒っている。振り回されながら、耐えて感じる。あし？いや手か？にぎっている…あれに触れば何か変わるはず。

頭の角から手を放した。下へ滑り降りる。竜はここぞとばかり体を捻る、でも、それも読めてる。

この生き物の考えは全て感じる。動きも、全部一瞬ずつ手前に伝わってくる。あとは体を旨くあわせていけば良い。滑り台を滑るように右へ左へと加速しながら滑らかな鱗を滑っていく。近い。小刀を刺して滑る速度を落とす。竜が感じている針のような傷みが伝わってくる。でも、ここで止める訳にはいかない。

あれだ！透明に近い水色の玉、あれに触れば。

ようやく竜の腕にまたがる。落ちないように三本指の手に思い切っ  
つて飛び掛る。

「小僧！」

落ちても平気だ。下にヴェルダが居る。ヴェルダが上手く受け止めてくれるだろう。

指は節々に爪がある。掴まって前へそして、長剣を抜き、剣先で大きな玉に触れる。届いた。

とたんに竜は縦に空へ昇る、頭の向きを下方へ向け、踊りながら湖へと戻ろうと下降する。耳に風が入ってくる。

落ちる。視界にヴェルダの姿。受け止めようと俺の方へ向かっている。

ドバーンという水の音。ヴェルダの背の上から見下ろすと大きな水飛沫。黒雲が薄くなり薄い日射しが戻ってくる。ヴェルダが幾らか興奮したのか勝ち誇ったように火炎を吐く。

地上に降りると静まった湖面に髭の生えた長い鼻、その向うにでかい目、頭からは角が生えた竜の顔があった。

「気に入ったぞ、そなたの名はナギであったな。いつでも呼べ。そなたに加勢してやろう。我が名はシャオロン」

「しゃおろん…何が出来るの？」

「水、風、雷。我が力。使役するがいい」

緑色の竜がゆつくりと湖に沈んでいく。

「ナギ、大丈夫ですか？」

「あつ、はい。ミストは？それにリード…さんも」

ミストは自分のシャツを脱いで俺の頭をせっせと拭きながら心配そうに俺に怪我がないか体を見回し、話してきた。

「私たちは大丈夫、ちよつと濡れたけど。近くに城があります。あなたもずぶぬれですね。温まりましょう」

すぐ近くにお城があった。扉が開く。蠟燭の火が一つ、また一つと奥へとむかつて灯る。魔法の力。多分、ミストの。リードは少し離れて後ろから付いてきた。

ミストが暖炉を指さすだけで暖炉に火が灯り、何か言葉を唱えたら風呂に湯が沸いた。これが彼らが言っていた魔術というものだ。

ミストに勧められ最初に風呂に入った。

俺はリードに聞きたいことがあった。でも、リードが答えてくれるのか？

全員が風呂を終え食卓に付いた。

「あの、質問してもいいですか？」

リードと話すのは少し緊張する。リードが頷くだけで許可する。

「これから何処に行くんですか？」

「王都」

「そこって言葉通じますか？」

「おまえの力で出来ることだ」

「どういう意味ですか」

「竜の心を読むのと同じ事だ」

「え？心が読めるんですか？ナギ」

「うん。俺は気が付かなかったけど竜が話せるんじゃない、俺が

わかるらしいんだ。俺、この国に適応できるの？」

「全てはその力で学べる。他には？」

「それで、俺には何をしろと？」

「暫くはお前の好きにするといい」

もう聞くことがなくなってしまった。何でも即答だった。

相変わらず無愛想な人だ。ミストには優しそうなのに。まあいいか、俺はミストがいれば良かったしそのためにこの国に上手く順応できればいいと思ったただだから。

その数日後、王都という所に付いた。俺はその賑やかさに驚いた。俺としては、少し前まで下品な酒場で働いていたので人を見て驚く事は無かった。でも、それにしても、広くて明るくて立派な街だった。沢山の商店、女は買い物や家の用事をして金を稼ぐのはあまりしていない様だった。広場では出店、その辺に行くと、子供もいて女も売り子をしているらしい。この町に比べたら俺が居た村なんて閑散としたものだった。

しばらくの間はこの国に慣れるようにと、ミストと一緒にいられた。

ある夜、宿屋の部屋でミストと話をしていた。

「ここって、色んな物が売ってて凄く賑やかだね」

「ですよ。私も最初はお祭りかと思っただけなんですから」

「リードさんは？」

「また王宮でしょうね」

「あの人ってどうしてあんなに愛想が無いのかな」

「そんなこと無いんですよ」

「だよな。俺には厳しくておっかないけど」

「似てるんでしょうね」

「だれが？」

「あなたとリードがです」

「似てないよ」

「例えば、あの人は、人にあまりお世辞とか、飾りたてた綺麗事を言わないんです。ナギもそういう所があるでしょ？私は知らないけど、きつとナギと似たような生い立ちなんじゃないかな？現実的っていうか。大人の汚い所をよく知ってる。だから変に人に期待させない。それが彼の優しさなんじゃないかな？」

「ミストは？どうなの？」

「私？うーん。どうかなの？」

「俺はいいと思うけど、人に希望を持たせるって大事な事だと思うよ」

「だと、いいんですけどね」

「すごく良いと思うよ。だって俺はそれで癒されたなって思うぜ。俺は少し前まで、自分で自分の事はなんとかしたし、人がどうなるかなんて考えてなかったけど、とにかく、ミストにあって人を信じるってのが出来た」

「ナギにそう言って貰えるところいいな。ナギは強い子ですね」

「そうなのかなあ。ただ生きるのに精一杯だった。ていうだけだと思っけど、でもミストと出会って思ってたんだ。人に優しくしたり、きつと良いことがあるよって言ってやると元気が出る事もあるなって」

「ありがとう。ナギは強いんですね。偉いよ。強いついでに、私の我儘を聞いて欲しいんですが」

「ん？なに？」

「リードに言われたんですけど、暫く王宮に通うと思うんです」

「俺は1人で留守番か…」

「出来ます？」

「食事は？どうするの？」

「ちゃんと作って置きますから。夕方帰ってくれば出かけてもいいし」

「そうだな、いいけど。ミストこそ夜帰って来なかったら怒るよ」  
「はい。門限は夕方6時でお願いします」

「まあ。いいか。ミストも6時に帰ってくる？6時までには帰ってこなかったらすごく怒るぞ」

「はい」

「ところで王宮に何しに行くの？」

「勉強しに」

「あなたが？俺じゃなくて？変なの…」

次の日からミストは王宮と宿を忙しく往復した。俺は街をうろろして過ごした。

言葉はなんとなく聞き取る事が出来た。出来るだけ同年代が年下の子供を探して遊んだ。子供は言葉を覚えるのに都合が良かった。身振りと言でなんとか通じる。子供って隠し事が少ないからこの国のことや街のこと色々教えてくれる。

そうしていくうちに、少しずつ生活の会話に差し障り無くなった。それ以外の時間は、人の来ない所を探し、ヴェルダに乗って狩に出たりした。彼女との時間は俺にとって最高の気晴らしだった。

リードはたまに宿に現れたけど俺に話しかけることはなく、ミストと話をしていた。

俺が思ったのは、リードって人はミストとあまり本当の事を話していないと思う。どちらかというとミストと一緒に過ごして会話を楽しむという雰囲気、真剣な話しなにかしないんだろう。

俺のときと同じで、ミストが沢山話しているのだからリードが自分の話をするのが好きでないのは多分誤解じゃないと思う。

リードが来るとミストは楽しそうに甲斐甲斐しく彼の世話を始める。以外だったのはリードが薄紫とか淡い色のローブなんかを着ている事だった。リードが来たときのミストの喜び様を見ると、俺としてはちよつと焼もちをやきたくなる。まあ、ミストを独り占めしている俺の贅沢な考えだけだ。



ある日の夜。ミストが大事な話があると言う。

「何？」

「戦に出ます」

「あなたが？それって危ないし、向いてないよ」

「私は戦いません。状況を見て作戦を立てたりするだけです」

「一緒に行つてはいけないの？」

「心配しなくても、ちゃんと帰ってきますから」

「分った」

そうは言っただけ、大人しく待つ気は無かった。ヴェルダに乗ればこっそり後を付けられる。そう考えた。

ミストがいる大軍は王都を出て結構距離を移動してどこだかの城へ向かった。石造りの城壁。どうやら戦いの準備をしているらしかった。俺は空から見る事が出来るので、戦う相手の軍を見に行つた。

見てきたことを伝えたかったが、ミストに見つかりと怒られるのでリードを待った。

リードは鉄の鎖帷子と黒いマントを身に付け、馬に乗って辺りを視察していた。

リードが城から離れた所でヴェルダに降下してもらった。

「投石機か。彼の読みは確実だったという事だな」

石を準備していると聞いたリードが独り言のように答える。

「馬が50頭位に、後は歩く兵士だと思うけど。弓矢もあつたと思う」

「便利だ」

「え？」

「お前の事だ。報酬は欲しいか？」

「くれるなら貰うけど」

「何が欲しい」

「なんでもいいの？それなら」

「なんだ」

「ミストの安全」

「…」

一瞬、リードの形が良い眉の端が動いた。

「ミストを無事に返して」

「それで？お前は戦う気が有るか？」

「俺はどっちでもいいけど。ミストの為なら何でもする」

「慕っているとは思ったが、そこまでとは…」

「どうすればいい？」

「言っておこう。お前が竜に乗り戦えば、いずれ、嫌でも英雄にさせられる。わたしの言う事がわかるか？」

「なんとなくだけど」

「戦うか否かはお前次第だ、それはそれとして。一つ忠告する」

「なに…」

「ミストの為に何でもする、などと二度と言うな」

「どうして？」

「あれの弱点になりたいか？」

「…つまり。俺が戦うなら、ミストを大切に思ってるって言ったらミストが誰かに狙われたりする。って事だろ。それに、ミストも俺を隠した方が安全」

「…お前、馬鹿でなくて良かったな」

リードが唇の右端を少し上げてにやりと笑った。それって褒め言葉かよ？イマイチ嬉しくないぞ。しかもちよっと馬鹿にしたみたいなのこっそりした笑い方。腹立つ。

「戦うなら弓矢を用意しろ。それなら上空から放てば良い。竜に乗っていれば姿を見られない」

「弓矢なんか買う金ないよ」

「おまえなら矢の100や200程度、何とかできる。器用だからな。弓と防具は適当に後程持って来よう」

「解った。俺との約束、絶対守れよ！」

俺は矢を調達する為に忙しくなるのでさっさとヴェルダに乗り、リードの頭上から言い放って森へ移動した。

俺は悩んだ末ヴェルダに相談した。

「矢？」

「そう。まさか枝を集めて作ってたらどう考えたって間に合わないだろ？」

「100位ならすぐだわ」

「どうするの？」

「簡単よ。敵の武器を持ってくればいいの」

「どうやって？」

「普通に」

ちよつと頂けないやり方だと思っただけ他に無かった。俺は槍を取りに湖のある城へ行き、少しだけシャオロンと話をした。

「ってわけで、協力してもらえないかな？」

「つまらぬが、そなたの頼みとあらばやってやろう」

「わるいね、頼むよ。何しろヴェルダは昼間じゃないと目が利かないから」

「承知した」

時々湖に来てシャオロンと話をしておいてよかった。彼は俺の話面白くと言ってよく聞いてくれるし、彼の事も少し解った。彼は住んでいた湖が狭くなったので雨を利用して海を超え飛んで来たらしい。シャオロンが住んでいた国はここよりももっと南東だったらしい。海にも竜族は居るのだとか。シャオロンは塩水では長くは生きられないらしい。

作戦を決行した。シャオロンが巻き起こす雨と雷の中、ミストの敵方の陣営に空からヴェルダに乗って向かう。

あっという間にヴェルダが矢を一掴みして飛び去ったそれだけで終わった。実際は100本も無い。必要ないと思う。ヴェルダの背

に乗せるとしてもせいぜい30〜50本程度だろう。攻撃力というならシャオロンやヴェルダの方が勝っている。だからってシャオロンに頼りすぎるのも控えたかったし、年若いヴェルダに無理をさせるつもりも無かった。それでも、いざとなったら竜に頼めば何とかなる。

リードから弓と防具を渡された。リードが今回は国の境目にある城壁を守る為の戦いだと言った。戦の後には城壁から国の真ん中近くまで路を作る予定なのだから。それがどういった効果があるのかなんて俺にはどうでも良かった。多分、リードもその口ぶりから今はどうでも良いのだろうと思う。今、俺とリードの頭にあるのは戦いの事だけだ。

リードに言われたのは、間違っても味方に攻撃しない事と出来るだけ自分の姿を見られない様に、と言うこと位だった。

そして、戦は始まった。

シャオロンが風を送る中ヴェルダに乗って気が向いたときに矢を放った。戦場は初めてだったけど特に驚かなかった。上から見ると大した事も無く見える。

もともと負ける戦いでは無かったらしかった。ミストの姿が戦場に無かったので俺も真剣になる必要も無かった。

リードは味方の後方に居たが特に何もせず。殆ど見ているだけだったと思う。もしかしたら俺には分からない魔術とかを使っていたかも知れない。

そろそろ戦いも勝つだろうと思った所で、ヴェルダが一度だけ急降下して敵軍の真上で火を噴いた。兵士はただただ驚いていた。運の悪い奴は丸焼きにされたかもしれない。

俺もヴェルダの行動に驚いていたのでそこまで見ている余裕も無かった。

「おい、無茶するなよ」

「でも、そろそろ潮時でしょ？帰る前に何かしたかったから、こん

「なの無茶でもないし」

竜というのは気まぐれだからちよつと予想が付かない時がある。基本的に彼らは自由な生き物だ。もちろん気に入った人間のいう事を聞いてはくれるけど、だからって、決して支配されない。俺は彼らの奔放さが好きだ。

その後の俺とリードの関係はこの戦の時に決まったと言って良い。戦場では情報を交換し、戦う。殆どそれだけだった。戦場でミストと行動する事は無かった。ミストとはいつも安全な時だけ一緒にいた。

俺は王宮には出入りしなかった。この国の軍隊にも入らなかった。束縛の多そうな窮屈な生活なんて俺には向いてなかった。

戦うときはリードは仲間だった。

最初に忠告を受けた時は彼に自分の弱みを握られたと思っていたけど、リードも同じ弱点だと気付いた時には少しほつとした。それにリードという人は思っていたより弱点の多い人だ。それを隠したいから人前に出たがらない。どうしても人前に立たなければならぬ時は魔術や小道具で誤魔化すという手を使っているらしかった。俺もだんだんと竜の事も含めて秘密を持つようになったしまったので、彼とは違うやり方であり人に住んでいる所を覚えられない様に気を使うようになっていた。

ミストが言った通り、もしかしたら俺はリードと何処か似た所があったのかもしれない。

人間は表で活躍する人と、裏で動く人間というって事だ。

## 17話 ミスト（ガレット）

「ミストは本当に澄んだ、目をしているな」

私がセウルド様によく話しかけられる言葉だ。

セウルド王子が、王太子となられてから、リードの紹介で王子に付き添って学ぶと決まった。

「リードの弟子だったな。以前会った時にも思ったが、君は爽やかな青年だな」

「恐縮です」

「勉強をしたいと聞いたが、何を学ぶつもりだ？」

「私でお役に立てる事でしたら、何でも学びたいと思っています」

「ふーむ。では、共に学ぼう。君が嫌でなければだが」

「はい。是非、有難う御座います」

「これからは学友だからセウルドと呼捨てでよいぞ」

「そんな…もったいないです」

結局、他の呼び方をする、まだ学んでいる身の上なのに偉そうにするのはうれしくないと思嫌悪そうにするので暫くは呼捨てにするしかなかった。学ぶと言っても学校に行っていたのではなく教師が来て恐れ多くもセウルド様の講義と一緒に受けるというものだった。

セウルド様のお側には常にラスターという騎士が護衛をなさっていた。彼は体がつちりとしていて、セウルド様をお守りする事に集中していたが、長く一緒に過ごすうち少しずつ話をするようになった。

いかにリードの紹介とは言っても、何処の誰とも知らない私に余計な事は言わない人だが、以前、王都外へ逃亡した折に一緒に過ごして頂いた事もあってか、徐々に気持ちが開けてきたらしく、彼が口を開いた。

「お前は、剣を扱えるか？」

「一応は、でもそういうのは不得意ですから、貴方が守っていらつしやる限りセウルド様に危険はありませんよ。安心してください」  
「その気があれば教えようか？」

「そう言つて頂けるのは嬉しいです。でも、それより……ご迷惑で無ければ、戦略について教えて欲しいんですが」

「そうか。残念だな。その体躯なら充分戦力になると思ったが。戦略についてはそのうちゆっくり話そう」

「お願いします」

「殿下がお気に入られたとは言つても呼捨ては納得がいかないが、そのうちセウルド様の臣下に下るのだろう？」

「いずれ、そうなりますね」

「その時はよろしくな」

ラスターは明るい笑顔を見せた。個人的に付き合つてみると彼はよく食べ、よく笑い、酒も程々に飲む。結構単純な人で、セウルド様のお人柄に心酔しているらしかった。酔うと私にだけは奥様のお惚気話が多かった。実は奥様はセウルド様の想い人だったとか。

「だから俺はセウルド様をお守りするのだ」 と言つていたけど、結局はセウルド様の寛大さに惚れこんだという事だと思った。誰に対しても面倒見がいいのも彼の素晴らしい所だ。

魔術師テュルナーナスは年若いけれど、彼がラスターの学友だったのも面白い。

テュルナーナスに会つて直ぐに彼の優しさを感じた。何かが、私と似通つていて最初から話が合った。魔術に詳しいのもありがたかった。彼とのおしゃべりは尽きない。

心遣いの細やかさ。強い精神力。私としては最も心安らぐ友だ。正し、体力という意味ではちよつと心配な人なので、私もそれとなく彼の体調には気を配った。

「テュルナーナス！」

「ああ、ミスト、今日はセウルド様とご一緒じゃないのですか？」

「ええ。だって、あの方も最近はお忙しいから、そうするとラスト  
ーもでしょ？」

「それで私に会いに来たのですね」

「そんな風に言わなくても、話したかったですよ」

「丁度お茶を入れようと思っていたので、ご一緒しましょう。それ  
と魔術を少しご披露できるけどいかが？」

「ええ。ぜひ、お菓子でも持って来れば良かったな。すみません気  
が付かなくて」

「お菓子って、子供じゃないんですから。そんな事より、なにか面  
白い魔術でも見せて、何か助言できるかも」

「うーん。私はレベルが低くないかな？」

「そんな事は気になさらないで、貴方の魔術は面白いから  
「どうして？」

「ミストは、感性も発想も意外性がいっぱいあるし、私より自由な  
使い方をするから。飽きないんですよ」

「褒められたみたいだけど、あんまり稚拙で

馬鹿にされない様に気をつけないといけませんね」

「馬鹿にする訳は無いでしょ？例えば、私のように学校で魔術を習  
ったり、研究所で使う魔術ほとんどが攻撃を目的としたものですが、  
ミストは普段の生活にちよつと便利な使い方をしますよね。独創的  
ですよ。あなたみたいな方がいると新しい発想が出てくると思う  
な」

「そうでしたか？」

静かな時間の流れ、笑顔と甘い香りのお茶。まるで両思いの恋人  
同士のような密かな笑い声。

意志の強さを内に秘める能力の高い魔術師。彼から学ぶ事は多か  
った。



リードが見出した人材は心が清らかで秀でていた。

ナギも例外でなかった。ナギはこの世界で最後といわれる最強の竜騎士だ。何処からとも無く何体かの竜を引き連れ、戦場に現れて一気に片付けて去ってしまう。

ナギは何処かリードと似ている。戦場で常にリードと繋がりがあ  
るらしく、そのコンビネーションには目を見張った。他人には分  
からない方法でリードがナギに指示を送り、それに従ってナギが動  
くという形だったようだった。めったに、二人同時の活躍などは見  
られるものでもなかった。彼らの戦場での働きには驚くばかりだっ  
た。

ナギの強さはとにかく強烈だった。

リードと違っていたのはナギは人前で明るく話す社交的な性格だ  
という所だった。常に自由で行きたい所へ行き、私の前にも何時で  
も現れ、明るい屈託の無い姿を見せてくれる。若く強く大胆で奔放  
なナギ。彼こそが国王だと言えば信じてしまう人もいるかもしれな  
い。事実、髪の色は陛下と同じだから。

私が戦場で少し寂しかったのは、リードとナギの間には特別な関  
係があつて、私には入れない何かがあつたという事。いつの間に彼  
らが仲良くなつたのかも知らなかったし何時何処で話し合ったのか  
も何も知らされず。戦場では三人で会う事もなかった。

二人の目的は明らかに協力し合い戦に勝つ事だったのだろうが、  
その先はどうしているのか、姿を眩ましたり、いきなり私の前に現  
れたりするので予想がつかなかった。3人で一緒に暮らしていた時  
もあつたが、ナギとリードは私から見たら、仲が良いのか悪いのか  
ちょっと分かり難い不思議な人間関係だった。

二人は結局、私を守っていたのだろう。その程度の事は私にだっ  
てわかった。

年月が経ちセウルド様は国王になられた。

セウルド様が陛下になられてからは、この国は多くの国と同盟を

結んだが、それでも敵対する国はあり、私は戦略家として働いて来た。

以前よりこの国に敵対してきたハラドール国との戦いが始まるうとしていた。リードは国外で得た情報を陛下に報告たいと言ってきた。その時は陛下を含めラスター様と王国魔導士テュルナスが会し、私も末席に居た。

「陛下、今回の戦は少々厄介な事になりそうです」

陛下の前に跪いたリードが珍しく戦を重く語った。この国はどの国からも攻め難い事で知られている。

ナギとリードがいるからだ。彼らは圧倒的に強く如何なる戦でも負ける事は考えられなかったが、今回リードが事態を重く見るのはそれなりに理由があるらしい。

「リード、偵察苦労だった。ハラドール公国にどういう策があるのだ」

「策というより、裏で人外の者が糸を引いております」

「人外の者とは？」

「はい。強い魔力を持ち、武器による攻撃も出来るかと、彼の者がハラドールとイルブラン王国に同盟を結ばせ連合軍を編成してくると思われます」

「しかし、あの両国の軍では我が国を攻撃して勝てるだけの強さはないと思うが？」

將軍とら成れたラスター殿らしく、他国の軍勢の情報に詳しい意見だ。

「流石、ラスター殿、他国の軍隊にまで詳しいですね。しかし、今回は人外の者が荷担致します故、一筋縄では行かないと思います」

「リードがそこまで言う程、強い魔力の持ち主が関与しているという事なのか」

「はい、陛下、奴は如何なる手をも使って来ましょう。恐らく敵国は強気で来ます。魔導騎士リシュエルの名をも恐れぬ軍となつてかかって参りましょう」

「解った。急ぎ作戦を立てよう。ミスト、ラスター、テュルナー、忙しくなるが頼んだぞ」

「御意」

その戦について書くとき長くなるので、あまり多くを書きません。リードはその戦に全てを投げ打って、力尽きたように見えた。現在には消息を絶っている。

あの戦の後、我が国の強さを恐れたのか、攻撃してくる国も無くなった。

今、私は戦争も無くなったので政治家として働きながら、将来国民の為の学校を作る準備にも忙しい。民の一人一人が知識を身に付けより高い文化を目指す。理想ではあるけれど、それこそがリードの意志を継ぐ事なのだと私は思っている。テュルナーもラスターも賛成してくれて助力を惜しまないでいてくれる。

セウルド陛下も国民の財産を守る事、色々な人種の子供がいるこの国では、自国他国問わず、互いの文化を尊重する事を条件付けて金銭的な援助をしてくれる。

視野の広いセウルド様らしくあらゆる文化を取り入れた王宮。それすらも、セウルド様には狭い世界であられるのだらう。

その後、大地の巫女様であられるルーニアさまが、人々の怪我や病気を治癒する施設を作られた。もうその頃はリードの存在が無く。彼女はひたすら傷ついた人々の為に尽くす素晴らしい人だ。彼女もリードを知っていたらしいが、その出会いについては語らなかった。戦いが終わった戦地跡で傷ついた人々を癒す彼女の姿を何度も見かけた。あまりに大変そうだったので声をかけたこともあった。「その病人はちよつと厄介です。お手伝いします」

「わたくしが至らないのです」

「とんでもありません。貴方の様な方が自ら出向いて下さっただけで民がどれだけ力づけられたか。でも、貴女はご自身のお体をもう

少し大切になさるべきです。ここは私に任せて休んでください」

「いいえ、まだ。あと10人は癒せます」

高潔で何処までも体力のある女性。女性というのは失礼だ。聖職者なのだから性別は関係ない。

それにしても、このルーニアという巫女は人々に何と献身的なのか。私など足元にも及ばない。多くの人々が彼女の存在に癒され、希望を見いだした。

私の書くべき事は余り無い。皆に世話になりっぱなしというのが私だったから。

時々思い出す。私の大切な人の声。

「ガレット、貴方には戦いは似合いません」

そう、その通りでしたよ。私は貴方に会いたい。もう一度会いたいです。

生きているのかそれとも神々の元へ召されたのか。それぐらい知らせてくれてもいいんじゃないですか？

私はまだまだこれからするべきことが多い。感傷に浸っている暇はまだ無いのでこの辺にして後はテュルナスに任せる事にします。

## 18話 魔導騎士リシュエルについて（テュルーナス）

十八、魔導騎士リシュエルについて

（テュルーナス）

魔導騎士リシュエルの名は、ナギに引き継がれ、彼が亡くなったと思われていない。

今この王国で彼の名が無くては不都合が多い。他国に攻め入られる可能性が否めないからだ。

リード本人が何処にいるのかは不明である。

ナギについて、私は多くを知らない。私が知るのは、リードと親しかっただろうという事ぐらいだ。

実際、最初にその名を受け継ごうとしたのは、ミスト、本名はガレットだ。

彼こそリシュエルの名を継ぐべき人だと私は思っていたが、リードはそれを望んでいないらしいことが、ミストの記述からは読み取れる。

これからは平和が訪れるだろう。そうなれば魔術や剣術など必要がなくなる。ミスト（ガレット）のような人が多くの民を引っ張るのだと思う。

命に限り有る者には、どんなに目を凝らしても見ることの出来ない新しい世界。もっともつと生きたいと思う。

ミストの活躍を見たいのだ。彼はきつと長生きするだろう。私も最近はこの体はきちんと管理している。それでも尚、ミストやラストのの丈夫さには追いつかないだろう。

リードはいつか時を経て、必ず、新しい世界に現れると思う。彼は変化を求め、人を育てる筈。例えば生まれ変わっても、きつとガ

レットと巡り会うだろう。ガレットは彼にとって特別だったのだから。

私はリードが生きているのか、亡くなったのかは知らない。そもそもリシュエルという名が何代受け継がれたのか、どういふ人なのか、何年生きているのか、誰も知りようが無いのだ。私の友人たちにしても勘違いや覚えていない事のほうが多いだろう。

強いて言うならミスト（ガレット）とナギの記憶が一番正しいのだろうが、それにしても、名前をちよくちよく変えてしまうリシュエルの印象がミストとナギでは違いすぎる。誰に聞いても印象は違うだろう。

私を含め友人たちが彼を最後に見たのは、戦場だった。彼は多くの人を癒し、全てを投げ打って力尽きた様にみえたが、私が彼と最後に会話した時、初めて会った時と同じ優しい笑顔であった事に感謝している。

ナギという竜騎士なら、まだまだ多くを知っているだろうが、私にはナギが何処に居るのかわからない。戦場でナギが乗る竜の姿は何度も見たがそれ以外では殆ど彼と関わった事がないのだ。リードについて書かれた文章もミストの手を通して渡された。

ナギという人物は居るのは確かなのだが、戦争でも起きない限りミスト以外の人前には現れないのかもしれない。

時折、竜が空を飛んでいるところを見ると、そう長い間遠くへは行っていないのだろう。

竜に乗っているのだとしたら、この世界の一周ぐらいはきつと簡単な事なのかもしれない。

私は世の中が静かになるまで頑張つて、ナギが私の前に現れてくれるのを待とうと思う。

ナギならばきつと、リードがどういふ人で、何を目的にしていたのかという疑問に答えを出してくれるかもしれない。その日を楽しみにしたい。

18話 魔導騎士リシュエルについて（テュルナス）（後書き）

最後まで読んで頂いて有り難う御座いました。

今後、また続きを書くかもしれません。

ご指導ご鞭撻のほど、お願いいたします。 m ( ) m

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6674m/>

---

リシュエル1 魔導騎士リシュエル

2010年12月7日07時10分発行